

## 丹波国氷上郡佐治莊高源寺所蔵文書

解説 橋本 雄

### 一 調査開始の経緯と方法

東京大学日本史学研究室では、一九九五年～九七年の三カ年にわたって兵庫県氷上郡青垣町の高源寺（正式名称Ⅱ瑞巖山高源禪寺）の所蔵文書を悉皆調査させていただいた。本稿は橋本が代表してその調査結果を報告するものである。同時に史料調査目録を公開して、高源寺の貴重な資料群の一端を紹介してみたい。

まず、調査開始のきっかけは、中世日本の対外関係史を専攻する筆者が、戦国期に外交僧を多数輩出した臨濟宗幻住派（中峰派）に関心を抱き（橋本一九九六）、中世を通じてその本山的存在であった高源寺に注目したことにある。幻住派出身の外交僧としては、豊臣・徳川政権期の景轍玄蘇・規伯玄方が有名であるが（長一九六三、田代一九八三、田中一九八八、北島一九九〇）、天文八年の遣明正使となった湖心頼鼎、十六世紀に数度「日本国王使」として朝鮮に渡った彌中道

徳や安心□楞なども近年注目を集めている（村井一九九三・一九九五・一九九七、伊藤一九九六・一九九八、橋本一九九七・一九九八）。

ところが不思議とその幻住派「総本山」高源寺の史料そのものに缺が入られることはなかった。理由は簡単で、高源寺文書じたいが未紹介だったのである。東京大学史料編纂所にある高源寺関係史料は明治二十一年（一八八八）謄写の「高源寺略縁起」（後掲）だけであり、『兵庫県史』も採訪を行なっていない。わずかに所在地の青垣町が調査を行なっているのみである（しかしほとんど学界では未知だろう）。

そこで日本史学研究室では、研究室メンバー有志の「禪宗史料研究会」が中心的受け皿となり、東京大学史料編纂所助手菊地大樹氏などの協力も得て、史料調査を実施することにした（指導教官Ⅱ村井章介教授）。ひとえに高源寺現住職の山本祖登師の御好意によるものである。その結果、同寺には本稿で紹介するような貴重な史料群が多数所蔵されていることが判明した。ここではその史料調査目録を公開し、はなはだ恣意的ではあるが、中世文書を中心に高源寺所蔵史料を翻刻

・紹介してみたい。

史料調査の方法としては、参加者の朴澤直秀・木村直樹両氏（近世史専攻）の提案をもとに、近年盛んに成果を挙げている房総史料調査会などでの「現状記録法」を採用した（吉田・渡辺一九九三参照）。

簡単にいえば、①最初に現状記録を行ない（ビデオ撮影とライトダウン）、文書群に名前をつけ（たとえば本調査でいえば「繪旨」「冊」「A」「B」など。これらはすべて現状で一まとまりになっている史料群に与えられた仮称であり、史料的価値に関する序列付けなどはまったくない）、②それぞれの史料一点（生物学になぞらえて「細胞」と呼ぶ）ごとに調査を取り、③史料現物を保存のために中性紙の封筒に詰めていく、という作業である。調査対象はある程度限定をしておかないと際限がなくなるため、一応「紙類に記された史料類」に限ることとした。そして、今回の高源寺調査では、「経蔵」（寺内の経蔵内にある史料をこのように一括仮称）を除いて文書類は全点マイク口撮影することを原則とした（経蔵は全点筆記調査と一部の写真撮影との組み合わせ方式。なお、調査参加者の全氏名については本稿末尾を参照のこと）。

ただし、この現状調査法にまったく問題がなかったわけではない。

本来この方法は、一紙物の文書群を中心とする農村資料調査を念頭に置いて組み上げられたものであり、今回のような、中・近世以来の古刹の、しかも禅宗寺院を対象とした方法ではなかったからである。最大の問題は、現在も使用している資料群（什器・語録・絵画史料）にどう対処するのか、こうした寺院調査に「現状」記録はそもそもどれだけ意味があるのか、という点であろう（数年に亙る調査において「現状」記録をしたがために、重複して調査を取ってしまった例もあ

る。これは調査主体の単純なミスだとは言いい切れない、本質的な問題を孕んでいるのではなからうか）。また、本稿も末尾に現状記録の結果を別表として示すが、まさに現状記録法が身上とする「フィールドワーク対応」型で、正直なところ未整理のままである（ただし短期間にこうした報告書をまとめられるという魅力は第一に挙げておきたい）。今後、寺院資料調査のための方法論・情報提示法を構築していくことも不可欠であろう。課題としたい。

## 二 高源寺文書の概観

高源寺所蔵史料の多くは、実際ほとんど近世・近代のものである。中世段階に関する考察は第三章、近世・近代の部類別の紹介は第四章で行なうので、ここではまず、高源寺文書の全体像を捉えるためにも出来るだけ大づかみに、そのサーヴェイを行なっておこう。以下、本稿末尾別表「史料現状調査目録」の順序に合わせて叙述していく（ただし、高源寺文書F・Gは表にしなかつたので、ここで内容を紹介しておく。また、経蔵の目録分は紙数の関係で次号に分載）。

### ①高源寺文書繪旨

文書番号として「繪旨n」という名称の付け方をしたのは文書様式論上いささか失敗であったが、繪旨およびそれに準ずる文書群が集められている。軸装されておらず、すべて箱入りのものであるが、長い年月のうちに礼紙や包紙が外れてセットが分からなくなってしまうものもある。寛正五年（一四六四）の年紀をもつ【繪旨3】（これは様式論的には繪旨でない―第三章④項参照）から、慶応三年（一八六

七)の【繪旨9】(明治天皇繪旨)まで、多数の文書が含まれている。なお、繪旨はすべて翻刻して紹介する(近世後半以降は第四章①項にて)。

## ②高源寺文書軸物

丹波高源寺にとつてとくに重要な文書や、宗派図・頂相・墨蹟・和歌切れなどが軸装されているようである。また説法の折に用いられる絵画史料も存在する。もちろん、現在使われているものもある。

第一に、勅願所・賜紫衣としての寺格を獲得した際の関係文書を一幅に連ねた【軸別1】(口宣案あり。第三章③項参照)や、伝法の証明に関わる【軸L5】(一華頌由製湖心碩鼎嗣法証明題詩、【軸イ2】月舟寿桂製湖心碩鼎住高源同門疏、【軸N5】湖心碩鼎・耳峰玄熊作製宗派図(本文末尾法系図参照)、【軸別3①】頌仲碩養法衣由来書、【軸ウ15】頌仲碩養筆宗派図(以上、第三章④⑤⑥項参照)、【軸N7】眞乗祖章製弘巖玄猊嗣法印可状、【軸ア12】弘巖玄猊筆法系図など)が、寺史を考える上では重要か。

第二に、頂相もこの伝法に深く関わるものである。【軸ア3】高峰原妙(中峰明本の師)、【軸ア14・軸エ9】普応国師中峰明本(遠溪祖雄の師)、【軸床5】遠溪祖雄(高源寺開山)、【軸エ12】天巖明啓(中興)、【軸M1】桐洲明潮、【軸ウ7】眞乗祖章、【軸ア15・軸N2】弘巖玄猊、【軸O10】一道宗昌、【軸イ4】大峽元嘉、【軸イ25】蘭室祖芳それぞれの頂相が現存する(このほか像主不明もあり)。

第三に、紫衣の寺格を持つ高源寺は、朝廷との連絡が欠かせない。それを示すのが天皇・公家の和歌切れ類の伝来である。【軸別11】後

鳥羽院、【軸別13】後円融院、【軸別8①】後柏原院、【軸別7・軸別

8②】後奈良院、【軸別6・軸別9②】後水尾院、【軸9①②】桜町院、その他【軸床6】(朝仁帝(東山天皇))も参照。なお、朝廷との関係でいえば、近衛・鷹司などの要路の贅文が備わった、狩野派の絵が伝わっていることも無視できない。【軸床1①③・軸ア2・軸ア8・軸イ17・軸ウ8①⑩】参照。また近衛家熙筆の大字「法皇殿」【軸ウ13】(文化七年)や詩懷紙【軸N3】があるのも興味深い。なお、【軸エ11】即位式の図なるものが伝わっている。いつの即位式かは分からないが、今後考証を重ねてみる価値はあるだろう。

第四に、墨蹟類。禅宗寺院だけあってさすがに墨蹟が多く残されている。ここではとくに元代(鎌倉時代)のものについて見ておきたい。

【軸5】雪岩祖欽送行偈(口絵写真表下)

送凝藏主歸蜀

凝藏主五載惡相聚

我既横點頭公亦

未相許就中猶尉

耐拗折露明柱似

此拙去就端的不可

恕蕭蕭九月風露

寒忽來告別還鄉

去臨岐煞沒巴鼻

卻要就我覓轉語

如何舉濕紙裏大虫

大捧打老鼠阿呵

無你會處 雪岩叟

(鼎印・方印各一類)

記者の雪岩祖欽は中峰明本の祖父に当たる(雪岩—高峰原妙—中峰—遠溪)。中国紙らしい灰色の独特な料紙に書かれ、臨済宗幻住派の根本道場・高源寺にふさわしい一品である。凝蔵主なる人物が蜀(四川)に帰くに際し雪岩が送った送別偈であり、入手年代やその契機はまったく分からない。このほか、中峰の師・高峰原妙(玄妙)の一行書「積善堂」【軸別12】も高源寺には伝えられている。これも入手の経緯は不明であるが、高源寺がこうして法祖にまつわる史料類を収集していたことは確実である。なお、このほか近世以降の墨蹟類の分類紹介は第四章に譲る。

### ③高源寺文書別置冊物(冊n)と略記

五つのタイプの史料が混在している。

第一に「禁裏」(天皇)の崩御記録と、住持の参内記録など、朝廷関係の史料類。第四章でまとめて紹介するので、ここでは列挙しないこととする。

第二に高源寺の什物類。まずそのリストとして【冊11・冊17・冊18】が挙げられる。寺領財産関係は明治三十年代の【冊19・冊20】の二つがある。とくに【冊20】は妙心寺当局との折衝を物語る史料。また、本稿でも大いに活用する【冊9①】『高源寺住持籍』(歴代住持の書上げ)も、ここに含めてよいだろう。そして、とくに珍しい什物である毛利家寄進の輸入朝鮮經典【冊22】、後柏原天皇宸筆と伝える法華懺法【冊23】もここに含めておこう。

第三に、清規類(生活・宗教全般の取り決め書・マニュアル)。普応国師の定めたもの【冊14】(江戸時代版本)から、江戸時代の【冊13・冊16】を経て、大正十四年の【冊15】(垂示式規則)までさまざま

まなタイプのものが存在する。

第四は宗門改帳の【冊6・冊7】。

第五の【冊4】『開山遠溪祖雄五百年遠忌献立并野菜寄進簿』は、「高源寺文書B」から誤って混入したものと推察される。

### ④高源寺文書A

三つのタイプに分類される。

第一に、会計・財務関係。田地名寄帳、宝塔建立寄進帳、祠堂銀帳など、寛保年間以降に筆写・筆記されたものが中心である。大正・昭和年間のものも若干含む。堂塔の復興事業関連と考えられる。

第二に、宗門離れ手形。案文【A11】と雛型【A13】が各一通ずつ。

第三に、これは「高源寺文書別置冊物」から誤って混入したものとと思われるが、【A6】『桐洲和尚参内記』および【A12】口上書の朝廷関係史料。

### ⑤高源寺文書B

宗旨証文【B19】を除き、会計・財務関係の書類のみ。なかでも、高源寺開山遠溪祖雄四五〇年忌(寛政五年〔一七九三〕高峰録会)・五〇〇年忌(天保十四年〔一八四三〕禅関策進会)・五五〇年忌(明治二十六年〔一八九三〕仏祖三経会)、荊叢毒薬会(文化二年〔一八〇五〕—鐵門明柱三十三回忌か)などの法会収支関係が中心。そのほか、高源寺保存を図る佐治地域内の「高源寺保勝会」による寄進帳など(明治三十年代)。明治十年代の地券が十通含まれているが、これは高源寺文書【I106】(明治十年)と同一グループと見なすべきであろう。



### ⑥高源寺文書C

安政・慶応・明治・大正年間など、近代の会計簿的性格の強い帳物に限られる。法会にまつわる把住(収入)・放行(支出)をまとめたものが多い。唯一、【C 63】『参内晋山前賀賞賀到来記』のみが朝廷との関係を記したもので、おそらく「高源寺文書別置冊物」からの混入と考えられる。

### ⑦高源寺文書D

江戸時代後期の祠堂銀や法会費用などの会計簿が【D 1】～【D 4】。幻住派の伝法儀式のテスト案(慶長年間)が【D 5】。隠退した弘巖玄猊の写経した妙法蓮華経の一部が【D 6】。まったく性格の違うものが混在している。最初のグループ【D 1】～【D 4】は「高源寺文書B」の延長と見なすべきか。

### ⑧高源寺文書E

これはだいたい、五つのグループに分けられる。

第一に、鐵門明柱・卓堂玄騰・眞乗祖章(高源寺歴代住持)の参内記録類。紫衣勅許に関わる記事を含む(第四章参照)。そして、安永九年(一七八〇)光格天皇の即位関係を記す記録【E 33】もこれに準ずる内容。

第二に、高源寺歴代住持の入院開堂儀式に関するもの【E 11】笑巖明闇・【E 19】鐵門明柱(再住)・【E 10】卓堂玄騰・【E 14】弘巖玄猊、および眞乗祖章・弘巖玄猊の示寂を記した記録【E 36・E 15】。

第三に、法相中峰明本四五〇年忌(宝暦八年(一七五八))、開山遠溪祖雄四五〇年忌(寛政五年(一七九三))高峰録会・五〇〇年忌

(天保十四年(一八四三))禪関策進会・弘巖玄猊三十三回忌(安政三年(一八五六))禪関策進会・荊叢毒藥会(文化二年(一八〇五))鐵門明柱三十三回忌か)などの法会関係の収支会計簿。これが大半を占める。

第四に、年貢収納帳。【E 30・E 41】。このほか山林寄進状控【E 31】なども財務関係の類として存在する。

第五に、什物・蔵書リスト。【E 28・E 29・E 34】。

### ⑨高源寺文書F

經典のみで構成され、しかもセットで箱に入れられている。いずれも先祖供養のために高源寺へ奉納された經典類であろう。書誌的情報のみ示す。

【F 1】『過去莊(後欠)』。江戸時代、折本(原裝)。法量縦二八・一cm、横一〇・七cm。墨界。楮紙。奥書「爲 真岸了空居士／滿界法月大姉／善智院法順居士／夏月円空信士 福知山萬屋治良右衛門母」。

【F 2】『現在賢却千仏名經』。江戸時代、折本(原裝)。法量縦二八・一cm、横一〇・七cm。墨界。楮紙。卷頭「瑞源山高源禪寺常住」。奥書「爲 先祖代々菩提 福知山嘉渡屋太兵衛妻／爲 大円淨光居士／賀屋妙悦大姉／同(福知山)大里屋治右衛門母」。

【F 3】『未來星宿劫千仏名經』。江戸時代、折本(原裝)。法量縦二八・一cm、横一〇・七cm。墨界。楮紙(か)。奥書「爲 本然妙性信女／止雲紹観信士／心法宗順信士／眞覺教證信士」。また「□建寺蔵板」の注記あり。

### ⑩高源寺文書G

これも箱入りでワンセットの経典である。これも書誌的情報のみ示す。

【G1~G8】『妙法蓮華経』。江戸時代、折本〔原裝・表紙あり〕、一紙四行、八冊構成。法量縦二八・二cm、横九・〇cm。料紙は紺紙で、界も字も金泥で筆記。奥書「維時文化五年歲次戊辰春正月日瑞巖山高源寺住持比丘玄祝写焉／紺紙金泥施主成松田中庄三郎」。なお箱書「紺紙金泥／大乘法典 全部」。

### ⑪高源寺文書H

おおよそ四グループに分けられる。

第一に、住山入院じやまにんに際しての開堂関係史料の類。鐵門明柱の再住山門疏【H1】、卓堂玄騰の開堂記録【H22】、弘巖玄祝の入山開堂記録【H25・H26】など。

第二に、弘巖玄祝【H27】・春澤祖透【H7】・大峽元嘉の示寂葬儀記録【H10】のほか、開山遠溪祖雄四〇〇年忌（寛保三年一七四三）・五〇〇年忌の法会などの収支会計簿が多数を占める。【H34・H38】など堂塔修復・供養関係もあるが、【H50】が仏光寺の大工雇いに関する帳簿であるように、必ずしも高源寺そのものの修復とは限らない。

第三に、年貢収納帳。【H56~58】。

第四に、什物宝物リストの【H44・H53】や大蔵経目録【H33】。

### ⑫高源寺文書I

二つのグループに分けられる。

第一が一紙物の類で、ほぼすべて山林・田畑の寄進ないし譲り状。年代は正徳年間から明治末年まで分布する。地券二十四枚【I106】もここに含めてよいだろう。

第二は帳ないし冊物で、年貢収納帳【I75~82・I85~87・I90・I91・I93・I94・I96~105】、小作料徴収簿【I83・I89】、田畑売買控【I72・I73・I95】などの財務関係書類が挙げられる。【I92】は寺内の会計予算簿。いずれも檀越足立氏が「世話人」として深く関わっている。

### ⑬高源寺文書J

すべて書状か包紙、ないしその断簡。漢詩の草案づくりや習字の習い、また漢詩の添削依頼などが圧倒的多数を占める。高源寺副寺であったこともある義門が差出・宛所として頻繁に登場するので、ひとまず義門関係文書として括ることができようか。なお当時義門は京都上京幸さき神社・長学院に居たようである。このほかには高源寺から京都への托鉢ルートに関し、織田氏と折衝した際の書状【J188】、開山遠溪祖雄四五〇年忌関係の書状【J27】など、様々なものも混ざっている。

### ⑭高源寺文書K

冊物および状物の二種類に大別できる。

まず、冊物のグループは、版本と写本とに分けられる。版本は、「高源寺文書経蔵」中のもものと相通じ、語録類（例『浄慈録』『中峰録』『虚堂録』）・漢詩参考書（例『文選刪註』）などから成る。また、なかには、南禅寺↓備後福山弘宗寺↓高源寺といった入手ルートの分

かるものもあり、近年盛んな情報ネットワーク論(書斎史・寺宝論)〔棚橋一九九七、西岡一九九八、上島一九九八〕とも共鳴してきそうである。「経蔵」中の版本と併せて、高源寺の「書齋」がどのような構成になっていたのか、禅宗寺院「知識」論の対象ともなるだろう。次いで写本としては、高源寺歴代住持の語録写本類が数種存在するが、そのうち、中世戦国期の【K121・K118】『願賢録』乾坤二冊、【K122】『三脚稿』、【K119・K120】『嘯岳録』上下二冊については第三章⑤⑥項で触れることにする。江戸時代の高源寺歴代住持の語録としては、【K144・K146】『大幻録』全二冊(中興天巖明啓)、【K145】『眞乗和尚語録』(中興十三世眞乗祖章)が存する(なお、こうした語録にまとめられる前段階のものとして、【B2】『視象高源拙語』〔中興住持十三世眞乗祖章〕・【H28】『天目瑞巖山高源禪寺開堂拙語』〔同十七世住持濟洲玄橋〕なども存在している)。

さて、状物のグループは、二つに分けられる。一つは兵庫県当局との間の寺領明細書関係【K45・K48】。もう一つは妙心寺当局との折衝である。単一の法系に限られる度弟院型の寺院と違い、複数の法系を兼受するという曖昧な性格に規定されたためか、高源寺をめぐるのは、明治頃までかなりルーズな本末関係が築かれていたらしい。明治十六年末寺塔頭の転派問題、明治二十七年末寺・塔頭から本山妙心寺への義財金額の折衝肩代わり問題、明治三十四年支班金(割当金)問題をめぐるやりとりが【K94・K97】などには窺える。

### ⑮ 高源寺文書経蔵

三つのグループに大別される。一つは「高源寺文書K」の版本と重なるもの(というよりも「K」の版本はもともと経蔵にあったと考え

るべきか)。ここには入手ルート不明ながら、文之玄昌の自筆による追記奥書を持つものもあった(『周易経傳』第十九〜二十一卷―『経蔵1―13―13』―第四章⑤節参照)。二つは寛文・延宝年間の鉄眼版大蔵経(略称Ⅱ鉄眼蔵)。三つは大正新修大蔵経。後二者は施入者の名前が書き込まれているものも少なくない。また、鉄眼蔵は勸進行為によって開版されたもので(東島一九九三など参照)、その刊記には結縁した人々の名が記されている。今回の調査ではそれも洩れなく拾っているため、史料調査目録「経蔵」中の鉄眼蔵部分は、鉄眼蔵研究にも資するところ大のはずである。なお、版本類のなかには、高麗版経典(『妙法蓮華経』)経蔵6―7―6・7・12、6―9―24、6―10―1・5)や朝鮮版本の再刊本も見受けられた。以上、詳細は史料調査目録を参照されたい(⑮は次号掲載)。

### 三 中世の高源寺と歴代住持の復元

次いで本章では、本稿がもつとも関心を持つ中世段階の高源寺の沿革について述べていく。あわせて、高源寺内外の史料をもとに、出来る限り歴代住持の発掘も行なってみたい。そして、出来るだけ有名な住持の経歴の復元にも努め、幻住派の歴史を繕っていくことにしよう。以下、必要な限りで文献史料を引用しつつ叙述していくが、その際、高源寺所蔵文書は【論旨1】などのように本調査における文書番号を付して引用する。

#### ① 『高源寺住持籍』と歴代住持―付『高源寺略縁起』

まず、寺史を考える上で基本的な情報を与えてくれる、【冊9①】

『高源寺住持籙』から、現在伝えられている限りの歴代住持について紹介を試みたい(冒頭の算用数字や「」内の注記は橋本が付けたもの、( )内の語句は本史料における後筆ないし異筆。なお、嗣法関係は複雑多岐に互るので、本稿末尾掲載の幻住派法系図を適宜参照されたい)。

- 1 開山遠溪祖雄大和尚 嗣法中峰明本 父足立光基 康永三年六月二十七日寂 寿五十九歳
- 2 二世了菴元悟和尚 嗣法遠溪祖雄 筑前人 博多聖福寺幻住菴開山
- 3 三世玉潤元琛和尚 嗣法了菴元吾<sup>(三)</sup> 筑前人
- 4 四世高陽宝瑣和尚 嗣法玉潤元琛<sup>(三)</sup> 筑前人
- 5 五世大用宝碩和尚 嗣法高陽宝瑣 京師人
- 6 六世運籌碩勝和尚 嗣法大用宝碩 筑前人
- 7 七世(伝法七世) 玄室碩圭和尚 嗣法運籌碩勝 筑前人
- 8 八世東海碩昕和尚 嗣法玄室碩圭 筑前人
- 9 九世(伝法八世) 一華碩由和尚 嗣法玄室碩圭 筑前人 永正四年三月四日寂
- 10 十世禮仲碩耕和尚 嗣法東海碩昕 江州人
- 11 十一世知傳碩精和尚 嗣法禮仲碩耕 丹州人 大永五年十月二十七日寂 寿八十一歳
- 12 十二世湖心(頤賢) 碩鼎和尚 嗣法一華碩由 筑前人 陞南禅後住当山 永禄末歳寂 寿七十歳
- 13 十三世江月碩満和尚 嗣法忠菴碩恕 筑前人
- 14 十四世厦仲明桂和尚 嗣法無極寶久 筑前人
- 15 十五世玉淵碩珠和尚 嗣法玉室碩琳か 丹州人

- 16 十六世燈室鼎桃和尚<sup>(桃)</sup> 嗣法頤賢碩鼎 筑前人
- 17 十七世(伝法十世) 嘯岳鼎虎和尚 嗣法湖心碩鼎 筑前人(博多) 慶長四年十月五日寂
- 18 十八世(伝法十一世) 濟蔭玄宏和尚(周安ト八天竜下ノ名ナリ) 嗣法嘯岳鼎虎 住天竜寺 文禄三年九月二十一日寂
- 19 伝法十二世三章玄彰和尚 嗣法濟蔭玄宏 慶長三十年三月二十二日寂 寿七十一歳
- 20 伝法十三世三伯玄伊和尚 嗣法三章玄彰 慶長十八年十月五日寂 寿七十七歳
- 21 伝法十四世龍派禅珠和尚 嗣法三伯玄伊 塔所鎌倉建長寺 寿八十一歳
- 22 伝法十五世明徹祖徳和尚 嗣法龍派珠 塔所鎌倉建長寺 寿七十五歳
- 23 伝法十六世澤雲祖兌和尚 嗣法明徹徳 塔所圓光寺 元禄三年七月八日寂 寿六十四歳
- 24 十九世頤仲碩養和尚 嗣法湖心碩鼎 筑前人
- 25 二十世才隣碩茂和尚<sup>(最茶)</sup> 〔嗣法頤仲碩養〕 肥前人
- 26 二十一世悦叔最和和尚 嗣法頤仲 肥前佐賀郡水上派下八幡高寺本紙秘在之
- 27 二十二世超外碩傳和尚 嗣法耳峰玄熊 本紙肥前嵯峨水上派下泰陽院秘在之<sup>(マ)</sup>
- 28 二十一世耳峰玄熊和尚 嗣法頤仲碩養 肥前唐津近松寺開山<sup>(マ)</sup> — 閑室元倍(足利学校) 圓光寺開山
- 29 伝法十七世中興天巖明啓和尚 嗣法澤雲祖兌 享保八年一月十四日寂 寿七十四歳

- 30 中興二世固山碩堅和尚 嗣法天巖明啓 享保十年七月十二日寂
- 31 中興三世魯山玄播和尚 嗣法天巖明啓 武州人 住円光寺前南禪  
大阪天王寺村永元寺二世 塔圓光寺 寛延四年六月十五日圓光寺  
寂 寿七十六歳
- 32 中興四世笑巖明閻座元 嗣法天巖明啓 塔所法長寺
- 33 中興五世湛堂湛座元 嗣法天巖明啓 塔寂照菴 延享二年五月五日 寿七十八歳
- 34 中興六世寶琳座元 嗣法天巖明啓 塔山内 享保十三年六月十日 日 寿五十八歳  
(伝灯九世春江安功和尚)
- 35 中興七世桐洲潮座元 嗣法龜泉中興大機方和尚 塔佛光寺 寛保元年十二月二十三日寂 寿六十歳  
(明潮)
- 36 中興八世中巖賢和尚 嗣法天巖明啓 塔山内 享保十五年二月二十七日寂
- 37 中興九世桐洲明潮座元 嗣法大機方 塔山内 寛保元年十二月二十三日寂
- 38 中興十世笑巖明閻和尚 塔光明寺 開基法長寺 寿八十四歳
- 39 中興十一世鐵門明柱和尚 嗣法魯山玄播 塔寶珠寺 安永二年一月十六日寂 寿七十八歳 明永上座ニ法ヲ嗣ス
- 40 中興十二世卓堂玄騰和尚 嗣法三峯玄應 塔泰清寺 天明九年正月朔日寂 寿六十八歳
- 41 中興十三世(伝灯二十世)眞乗祖章和尚 嗣法春光玄功 水心室号ス(采寺ヲ弘巖ニ譲リ後ニ薬師菴ニ去ル) 塔本寺 寛政元年十一月三日寂 寿六十三歳
- 42 中興十四世(伝灯二十一世)弘巖玄猊和尚 嗣法眞乗祖章 號古心菴下號ス 塔本寺 文政四年五月二十七日寂 寿七十四歳

- 43 中興十五世梁翁玄珉座元 嗣法弘巖 塔本寺 文政九年二月二十三日寂 寿六十二歳
- 44 中興十六世中道座元 嗣法弘巖 塔法長菴
- 45 中興十七世濟洲玄橘和尚 嗣法弘巖玄猊 (生家綾部陸合町) 塔本寺 嘉永二年四月十四日寂 寿八十歳
- 46 中興十八世春澤祖逸座元 嗣法濟洲 塔本寺 安政四年四月五日寂
- 47 中興十九世(伝灯二十二世)靈溪碩源和尚 嗣法弘巖玄猊 塔所天寧寺  
(千九)
- 48 中興二十世幽峰碩遠東堂 嗣法天猷大和尚 塔所當山 明治十七年九月二十四日寂 寿五十歳
- 49 三十六世桂林文昌和尚 當山世代ニシテ法系ナシ 姓名二株卜稱ス 明治三十八年四月二十八日寂
- 50 三十七世槐宗文安和尚 當山世代ニシテ法系ナシ 世代円悟寺塔所在円悟寺 大正元年十月二十八日寂 寿七十五歳
- 51 伝灯二十二世一道宗喝和尚 分骨塔所在本寺 昭和十八年六月十二日寂
- 52 伝灯二十三世大峽元嘉和尚 嗣法一道 姓龜井 昭和十三年五月一日寂 寿五十歳
- 53 伝灯二十四世一舟慈禪和尚 嗣法大峽 姓三浦 昭和五十三年十二月十日サンフランシスコに於て遷化 寿七十六歳(先々代の住職。なお先代は蘭室祖芳師)

以上を通覧するさい注意すべきは、「住持」と「伝法」とが混在している点である。1〜18・24〜28は実際に入院した住持、19〜23は住山の事実がなかった僧である可能性が高い。このほかにも、中世段階

(1~28) は概して不明瞭ないし不正確な点が見られる。

第一に、2了菴元悟(玄悟) ~ 8東海碩昕の法系が実際に高源寺に住したのかどうかの徴証がないこと(玉村一九七九頁)。京都生まれの5大再宝碩を除き、他の住持はすべて筑前生まれである。このことを考えると、2了菴 ~ 8東海の「住山」は多分に名目的な継承であった可能性が強い。後述するように、湖心碩鼎の住山も、足掛け二ヶ月程の出来事である。名目的には高源寺住持でありながら、実際は博多の聖福寺周辺に暮らす。——そうした在り方が中世段階でも普通だったのではないだろうか。

第二に、住持の漏れがあること。これについては第⑤項にて詳述するが、結論のみ述べると、9一華碩由以後、器川碩瓊・駿岳碩甫・棟宗明柱・江月碩満・日甫碩熙・茂林鼎猷・希周玄旦などの博多幻住派禅僧が史料上判明する。もちろん、これ以外にも住持がいた可能性は大いに考えられる(たとえば龍甫玄真など)。

第三に、住持の歴世にもやや混乱が見られるということ。後に紹介する紫衣勅許の繪旨類をも参照すると、17嘯岳鼎虎の前に少なくとも28耳峰玄熊が住持した——すなわち28耳峰玄熊・17嘯岳鼎虎……27超外碩傳の順で入院した——と考えるべきである。おそらく、耳峰玄熊が湖心碩鼎の法孫であること(湖心—珀林玄琥—耳峰)、したがって湖心の法嗣嘯岳を聞いて耳峰が高源寺に入ることはいえなないと考えられたため、こうした混乱が起こったのだろう。しかし第⑤項で後述するように、当時の耳峰の立場を考えると、これは決してありえぬ逆転ではなかった。また他にもこのような「逆転」現象は起こっている(次注参照)。「住持籙」をアウトラインとして信用しながらも、今後、現在残された諸史料をもとに住持歴代を確定していくことが必要であ

らう。

\*住山順序と法系世代との「逆転」現象の例——18濟蔭は24頤仲の法姪に当るが、上述のように18濟蔭—24頤仲の順で住持が継承されたはずである。前述第二点の棟宗明柱も湖心碩鼎の法姪であるが、湖心より先に住持している。やはり、「逆転」現象はそれほど特殊なことではなかったのではないか。

また次に、近世段階に関して言えば、29で突然「傳法十七世中興天巖明啓和尚」が登場することから分かる通り、慶長年間の27超外碩傳を最後にして、この宝永年間の29天巖明啓まで、近世前半段階の住持はまったく不明である(ただし29天巖が23澤雲(圓光寺)(28耳峰—閑室(圓光寺開山))と関連付けられている点は要注意。高源寺「中興」のため幻住派を遡及的に辿り、鎌倉建長寺からの梶入れを仰いだことが想像される)。この住持籙作成を発起したのは中興十三世の眞乗相章であり(「高源寺住持籙」序文)、その時点で寺菴内外に存在する史料をもとに同書を編んだであろうことは想像に難くない(以後は先々代までの書き継ぎが続く、信頼するに十分である。なお、49・50は中継ぎとして他派から当住したものと思われ、51一道以後は幻住派の法系にふたたび復帰している。51一道は「傳燈二十二世」とあるので42伝灯二十一世弘巖玄猷の法嗣であろう)。それでもなお、この近世前半期の住持の空白は埋められなかったようである。実際、戦国末期に焼け出されて後の高源寺は、住持空席の状態に近かったのかもしれない(後掲「高源寺略縁起」参照)。

この「住持籙」編纂の根拠となったのは傳燈法系図の類や、現在寺内に什物として存在する口宣案・宣旨類だと思われるが、『丹波水上郡佐治庄瑞巖山高源寺住持帳』こそ、もっとも重視されたはずである。

この『住持帳』の方は残念ながら現在行方不明であり、我々が目にすることが出来るのは、おそらく『大日本史料』九編之八―永正十五年十一月二十七日条に引用されている部分のみであろう(第三章④節に後掲)。そこには、知傳碩精・湖心碩鼎・嘯岳鼎虎と、実際に住山した人間が判・印を据えており、間違ひなく同時代史料だと言え、きわめて史料的価値の高いものである(ただし大森正且氏がこの住持帳の写を持つているとのことである―玉村一九七九頁参照)。したがって、現在のところ、完全にこの『高源寺住持籍』を裏付ける(検証する)に足る史料は寺内に残っていないようだ。現任職に伺ったところでは、什物が寺外に流出した可能性も大きく、今後一層の調査が必要であるという。諸方面の御示教を衷心より御願ひしたい。

ともあれ、前引『住持籍』は『住持帳』に依拠して作られただろうし、また住持の空席状態をも正直に示しているので、相当程度信頼のおけるものと考えられる。高源寺の歴史を繕く上で、現在最初に参照すべき史料である点は変わりがない。

さて、残念ながらこれも高源寺には現存しないが、本稿冒頭でも触れた「高源寺略縁起」も、寺史を考究するうえでまず窺うべき基本史料である。対外関係史上注目すべき記事も含み、それゆえ筆者も魅きつけられたわけだが(第三章⑥節に後述)、現況では、東京大学史料編纂所架蔵の謄写本(一八八八年謄写)や、【K7】神楽尋常高等小學校郷土研究部『瑞巖山高源寺史』(一九三三年秋刊行)中の写が伝わるのみである(両者の写は内容的にはほぼ一致し、一部語句の表記が異なる程度)。ここに便宜上、史料編纂所本「略縁起」を翻刻・紹介して、後日の「発見」を期することとしたい(訓点は史料編纂所本による。冒頭の「」は『瑞巖山高源寺史』により補った)。

#### 「瑞巖山高源寺略縁起」

寶永七年八月之ヲ誌ス

去今二百七十年前ナリ

高源寺⑥

丹波國氷上郡佐治庄瑞岩山高源寺略縁起

開山和尚、諱ハ祖雄、字ハ遠溪、當郡山垣ノ城主足立光基ノ子也、後宇多帝御宇、弘安九年丙戌誕生、幼年ヨリ資識群童ニ異ナリ、偏ニ佛乘ヲ慕ヒ、出家ノ志深シ、十三歳ノ時ヨリ、常ニ家ノ後ノ松樹ニ登リテ結伽趺坐ス、此松後代マテ坐禪松ト云傳フ、十九歳嘉元二年甲辰、遂ニ郷里ノ小院ニ入テ出家具戒ス、二十一歳謂ラク明師ニ逢テ大法ヲ成就セント、此願輪ニ乗シテ、大元國ニ渡ル、于時本朝後二條帝徳治元年丙午也、直ニ杭州天目山中峰普應國師ニ謁ス、國師其遠方ヨリ来レル志ノ厚キヲ感シ、殊ニ法器ノ勝レタルヲ稱嘆シテ、親切ニ接待アリ、遠溪和尚モ外ノ知識ニ相見ノ心モナク、只國師ニ朝參暮請シテ、ツイニ大法ノ源底ヲ究メツクス、有ル時故郷ノ老母ノ文ニ、コノ比毎夜山上ノ岩穴ヨリ光明ヲ生ス、又不思議ノ靈夢アリ、此山ニ梵刹ヲ建立セヨト、觀世音ノ告アラタナリ、早ク國ニ皈リ一寺ヲ草創アルヘシトナリ、其折節中峯國師モ當山ノ境致ヲ夢中ニ見玉フ、山ノ氣色天目山獅子岩ニ似タリ、故ニ遠溪和尚ヲ召テ曰ク、汝頃日モシ靈夢アリヤト、遠溪答曰シカリ、我夢ニ觀世音菩薩ノ告テ曰、故郷ニ皈リ伽藍ヲ建立スベシトナリ、又老母ヨリサキノコトキ文アリ、國師曰三夢一如ナリト、大ニ感シ玉ヒ、爰ニライテ大元國皇慶二年八月三日、宗門ノ一大事不殘付属アリテ、汝カ縁日本ニアリ、早ク帰ルヘシトナリ、サレレ國師ノ側ヲ去ニ忍ヒスシテ、又三年逗留アリ、大元ノ延祐三年丙辰版圖アラントス、其時中峰國師自贊ノ画像ト、

法衣一頂ヲ大法付属ノ證ニ授與アリ、後代佐治ノ半釋迦ノ御影ト云ハ、此画像ノ事也、夫ヨリ海上ヲ凌テ日本國筑前州博多ノ津ニ着ク、本朝後二條帝正和五年ニ相當レリ、其コト渡唐ノ僧、博多ニテ、遠溪和尚ニ逢テ、故郷ノ書状ヲ渡ス、是ヲ披キミレハ老母ノムナシクナレル也、夫ヨリ故郷ニ急キテ皈ル心モナクシテ、筑前ノアル岩穴ニ棲息スル事十年也、其間佛法傳授ノ弟子アリ、是ヲ了菴玄悟禪師ト云、其後丹波ノ故郷ニ皈リ、右ノ瑞夢ニ任セ、一寺ヲ建立ス、瑞岩山高源寺是ナリ、于時 本朝 後醍醐帝正中二年乙丑ナリ、中峯國師ノ画像并ニ傳來ノ法宝等、此所ニ祕在ノ、深ク幻住ノ家風ヲ行ヒ、法席日盛シナリ、於是道名四方ニ響イテ、高ク 天聰ニ達ス、朝聘屢應ケヒ、竟ニ山ヲ不出ト云々、サテ中峯國師ノ事ハ、異國本朝カクレナキ祖師ナレハ、今爰ニ委ク記スルニ及ハス、至ル處ノ道場皆幻住菴ト云、夫故幻住派トモ申也、廣録三十卷、其内幻住家訓アリ、又幻住菴清規一卷世ニ行ハル、唐土ニテモ五山ノ如キ叢林官寺ニハ住セス、山林ニ居シ、枯淡ニシテ、只朴實ニ宗乘ヲトリヲコナヒ、公案ヲ能ク圓カニシテ、法脈ヲシテ斷絶セザラシム、綿密ノ家風ナリ、遠溪和尚當山住持十九年、力子テ戡化ノ時ヲシリテ、一日一山ノ大衆十方ノ檀越ヲ集メ、齋會ヲ當ミ、懇ニ垂誡アリ、辭世ノ頌ニ云、悟テ了生死ヲ。五十九年。來去々。白日青天。筆ヲ擲テ端然ト示寂、于時 光明帝康永三年甲申六月廿七日酉ノ下刻也、第二世ノ住持ハ、即了菴和尚也、尔來開山ノ法孫代々住持アリ、第十世ノ住持智傳和尚、聲價遠近ニ聞フ、後柏原帝御在位ノ時、厚ク宗門ヲ信シ玉ヒ、永正十四年丁丑、當寺ヲ勅願所ニアケラレ、住持末代宜レ傳ニ任紫法衣大和尚一、宜旨アリ、コレヨリ住持代々 勸請ヲ蒙リ、

紫法衣ヲ着テ、入院開堂ノ規式、殘ル處ナク、願賢碩昇和尚、嘯岳昌虎和尚ニ至リテ、宗風愈盛ナリ、願賢和尚ハ、日本ノ使ヲ奉テ、大明國ニ渡リ、四明ニ寓居ス、世宗肅帝厚ク迎テ、金襴ノ袈裟ヲ製シテ、コレヲ賜フ、皈朝ノ時、梅崖等送行ノ詩アリ、大明ノ嘉靖二十年辛丑也、本朝天文十年ニアイアタレリ、嘯岳和尚ハ、畠山源義忠、日本ノ使トノ朝鮮ニ遣ス、後奈良帝御宇、天文十七年戊申ナリ、サテ又小早川隆景ノ請ヲ受テ、藝州ニ赴ク、長門國洞春寺ノ開基是ナリ、サテ天正ノ比ニ至リテ、五畿七道大ニ乱レテ、鬪諍ヤム事ナシ、當國モ赤井ト足立ト合戰數ケ度ニ及フ、此寺モ兵火ニ逢テ、一字モ不殘燒失ス、時ノ住持才隣和尚ハ、中峰國師ノ真像法衣、開山ノ位牌、世々ノ 綸旨、右ノ靈宝取アツメ、山ノ後ロニカクレ、其後寺ヲ今ノ佐治町西南ノ山隈ニウツシテ、是ヲ新高源寺ト云、綸旨又モトノコトク被下テ、慶長ノコロマテハ、入院ノ規式、日用ノ法事モ、カタノコトク執行シタリシカ、世上ノ騷シキニツレテ、寺モ物念ニナリテ、堪テ住スル人モナク、檀家モ次第ニ衰テ、供養ノ施主モナケレハ、コ、モ亦退轉スル事百年計ナリ、然ルニ遠溪和尚行道之旧跡トテ、山中纒ニ藥師如來ヲ安置シテ、草堂一字殘リタリ、今天岩老師ハ、開山遠溪和尚ヨリ十七代法脉的々相承ス、コレニヨツテ、本山ノ頽壞ヲ歎キ、多年再興ノ志願深シ、爰ニ宝永元年甲申、里ノ老弱力ヲヒトツニシテ、建立アルヘキ事ヲス、ム、コレアニ相道回復ノ時至ルニアラスヤ、コ、ニライテ、領主織田城州大守信休公ノ許命ヲ得テ、荊棘ヲカリ、土地ヲ開キテ、梵刹次第ニ造營ス、廣狹昔ニ異ナリトイヘヒ、晨香夕燈晝誦夜禪斷タルヲツキ、廢レタルヲ興ス、後來一派ノ輩相聚リ、幻住ノ古風ヲマモリ、人心ハ都テ天



心卜合シ、法運ハマサニ國運ニ随テ昌ナラン事ヲ期スト云爾、  
寶永七年庚寅八月廿九日 高源寺門人某寺謹誌

當山住持 參内行列次第

侍侍侍 伴僧 伴僧 杓持 挾箱 合羽籠

蘆籬乘<sup>馳見</sup> 小原履取押<sup>草カ</sup>

侍侍侍 伴僧 伴僧 長柄 挾箱 合羽籠

獻上長持 僧一人 僕一人 張札 丹波  
侍一人 人足二人 下札<sup>共ニ</sup> 高源寺

右 高源寺略縁起

丹波國水上郡檜倉村高源寺藏本明治廿一年六月  
修史局編修長重野安繹採訪明年二月騰寫了

②高源寺開山遠溪祖雄と幻住派

高源寺は現在、臨濟宗妙心寺派に属する古刹であるが、もともとは林下（非五山派）の臨濟宗中峰派（幻住派遠溪下）の総本山であった。幻住派ないし中峰派とは、中国江南の杭州天目山幻住庵主・普応国師中峰明本の法を嗣ぐ一派である。中峰明本の法を嗣いだ日本人僧には遠溪祖雄のほか、復庵宗己・古先印元・無隠元晦・業海本浄・明叟齊哲・大拙祖能などがある〔中峰明本やそこに参じた日本渡海僧の動向については西尾賢隆氏の研究を参照〕。ただし、その嗣法に忠実であろうとすればするほど、権力との接触を嫌って隠遁するという傾向が強かった。五山に積極的に進出した古先印元などを例外として、幻住派帰国僧は京都五山から離れて各地方に庵居するのが普通であった。

高源寺もそうした「隠れた」寺庵のなかの一つだったわけである。なお、研究史上「幻住派」という呼び名が一般的に用いられているが、これは言わば幻住派の外から見たときの呼称であり、自身では中峰派と呼ぶ方が普通だったのではないか。高源寺内の史料を見る限りそうした印象を受ける。ただ、学術用語としてすでに定着していることもあり、以下、本稿も「幻住派」という呼び名をもつばら用いることとする。

高源寺の立地は、かつての行政区画でいえば丹波国水上郡佐治荘内に位置する。開山は幻住派禅僧の遠溪祖雄（一二八六―一三四四年。寿五十九）で、前掲「高源寺略縁起」や『遠溪祖雄禅師之行実』（続群書類従九下）などによれば、創建は正中二年（一三二五）である。水上郡佐治荘地頭の足立氏（足立光基の子が遠溪祖雄）が檀越であり、現在に至る。遠溪祖雄は徳治元年（一三〇六）二十一歳で入元し、天目山の中峰明本に師事して、正和五年（一三一六）帰国。その際、嗣法の証明として、普応国師中峰の頂相（絹本着色・国指定重要文化財・高源寺所蔵）と「二十五条の法衣」（青垣町指定文化財・高源寺所蔵）を受け取っている。帰国後は筑前山中の巖穴に栖霞、九年後の正中二年（一三二五）丹波に帰郷して若屋山に庵居、後これが高源寺と呼ばれた。現在の瑞巖山高源寺は、若屋山高源寺が戦国末期に焼けたあと、宝永元年（一七〇四）に天巖明啓（一六五〇―一七二三年。寿七十四歳）によつて現在地に再興されたものである（「略縁起」にいう「新高源寺」）。一時期荒廢するが、文化・文政期、弘巖玄猷（一七四八―一八二一年。寿七十四）により中興された（以上、主として『高源寺住持籍』による）。また、遠溪祖雄が中国より持ち帰ったといふ天目楓が境内に植生し、秋には今も紅葉が多くの人を魅き付けてい

る。「天目山の戦い」で有名な甲斐栖雲寺（開山ニ幻住派業海本淨の「東天目」に対し、本寺を「西天目」と呼ぶ所以である）。

高源寺周辺には、縁り深い史跡が数多く存在する。そのなかの幾つかについては、青垣町公民館長（当時）足立襄一郎氏・芦田輝夫氏の御案内で我々も巡検することができた（一九九五年七月十六日）。いくつかの箇所を摘記しておくことにしよう。高源寺およびその周辺の歴史的環境を理解するためにも有効な手引きとなるはずである。

○観音堂——岩屋山の中腹に立つ。この場所はかつて高源寺の伽藍が立ち並んでいたところと言われるが、現在は小さな御堂が建つのみである。本尊は厨子に収められた半跏像（如意輪観音か）で、両脇に阿弥陀如来・聖観音が安置されている。

○石造宝篋印塔——高さ一・二六メートル、凝灰岩製。南北朝末期の作と考えられる。塔身に蓮華座付き月輪を練刻し、内に金剛界四仏の種子を配している。台石は左右に格狭間、前面にコウモリ狭間を彫り込んでいる。笠石の隅飾突起はやや外傾している。

○蘆井神社——式内社。祭神は天押雲根命。割拝殿形式の舞殿があるが、現在は九〇度方向がずれている。

○佐治神社——式内社。中世・近世には神楽明神と称していた。本殿下の亀腹は何らかの祭祀設備であったと考えられる。なお廢仏毀釈以前は高源寺所屬だったという。

○山垣城（万歳城）跡——足立氏の居城。足立遠政が承元三年（一二〇九）に築城したという。天正七年（一五七九）羽柴秀長に攻められて落城した。比高八〇メートル（標高二三五メートル）の山上に北から南へ本丸・二の丸・三の丸と郭が連なっている。本丸は最高所に位置し、三角状をなす。また、数力所に馬場・堀切

・土塁の跡が見られ、山麓には大正年間末に足立一族の子孫が改修したという遠政の供養塔がある。

○熊野神社——裸祭りで有名な神社。明治十八年（一八八五）大工が寄進した算額、室町時代の作といわれる木造狛犬がある。近くにはかつて社僧の庵だったという鶏足寺（現・臨濟宗妙心寺派）も存する。

### ③十六世紀初頭の幻住派中興——一華碩由

さて、そうしたなかで、十六世紀の初頭に幻住派のうち遠溪下（高源寺派）のみがひとり歴史の舞台へふたたび踊り出てきたのは、大きく言って二つの理由がある。遠溪祖雄の七世孫に当たる、筑前の一華碩由という逸材が登場し、一つは当時禅林で流行していた「密参」——内密に他派から口訣（印可を授かるための試験の解答集・マニユアル）を兼受して自身に箔をつける風潮——をうまく利用して諸派の禅僧を糾合したこと、二つは西日本・九州地域での政治的変動にこの遠溪派がうまく乗って権力と結びついたことである。ここでいう政治的変動とは、明応二年（一四九三）の政変で將軍権力が分裂し、前將軍足利義尹（初名義材、のち義植。以下「義植」と表記）が明応九年（一五〇〇）初頭、周防大内氏を頼って下向してきた事件を指す（この政変とその歴史的评价については家永一九九七、橋本一九九八などに参照）。すなわち、文亀三年（一五〇三）山口において足利義植自身に選ばれ、一華碩由が博多聖福寺の公帖を受けたのである（一華碩由行状「続群書類従九下」）。これを契機に、以後、一華碩由の法嗣玉室碩琳が永正五年（一五〇八）六月より以前に（『康親卿記』永正五年六月二十六日条参照）、彌中道德（一華の法姪）が永正十年（一五

一三)に(常庵龍崇『寅閣集』「冊中西堂住聖福疏」)、少し遅れて湖心碩鼎(一華・冊中の法嗣)が永正十六年(二五一九)に(「軸イ2」)月舟桂製「湖心和尚住聖福疏」(後掲)、それぞれ足利義種から博多聖福寺の公帖を受ける(ただし湖心以外は座公文か)。まさに一華碩由の時代において、幻住派は再建されたと言ってもよいだろう(以上、長一九六三、玉村一九七九など参照)。——もちろん、幻住派独自の隠遁の家風を自己否定せざるをえなかったわけだが。

\*一華碩由(二四四七〜一五〇七)は筑前箱崎秦氏の生まれ。同氏の菩提寺箱崎建徳寺の住持梅隱(五山系大覚派)に師事し、もと景徹元由と名乗っていたが、やがて発心して大徳寺養叟宗頤の門弟宗良居士や曹洞宗通幻派の道人大轍道玄など林下の人々に参じた。しかしなお飽き足らず、当時覚品庵に住していた遠溪六世玄室碩圭の門戸を敲き、その密受を請けて法を嗣いだ(文明十三年(二四八二)二月十五日のこと)。「浮木集」(駒澤大学図書館所蔵写本)巻八。一華は大覚派のほか、大応派・通幻派・幻住派といった諸宗派の印可を承けたことになる。すなわち「密参」による諸宗兼受である。その後、覚品庵を建徳寺に移して大年宝亀・湖心碩鼎・忠庵・仙覚らの門弟を育成したともいう(『浮木集』巻八)。たびたび参照した一華の行状は法嗣湖心碩鼎の撰になる(統群書類従九下所収)〔玉村一九八三28〜30頁参看〕。

残念ながら一五〇三年以前の博多幻住派(中峰派)の動向は分からないが、対外関係史の方面で最近注目を集めている冊中道徳が、初めて京都足利義澄政権と無関係な「日本国王使」として——つまりは大内義興―対馬宗氏ラインの詔えた「日本国王使」として——朝鮮半島に渡ったのが一五〇一年のことなので(『朝鮮燕山君日記』七年八月庚戌条)、幻住派の聖福寺進出はこれ以前に始まっていたと考えるの

が妥当ではないか。遅くとも、足利義種が山口に下向する時点より前から、幻住派と周防大内氏との密接な関係は築かれていたと見るべきだろう。当時、周防大内氏―対馬宗氏ラインは協同して偽使を派遣し、明・朝鮮との対外交流を完全に自己の主導権下に置こうとしていた(橋本一九九七・一九九八)。したがって、外交にまつわる技術や人材の供給源として、博多幻住派への期待度も高まっていたはずである。もちろん、幻住派の側としても、同門勢力拡大のための起爆剤として、積極的に周防大内氏や「公方」義種と結びついていったと考えられる。

#### ④幻住派の朝廷接近——知傳碩精による勅願所・紫衣開堂の格式獲得

この大内氏―足利義種ラインと博多幻住派の結びつきが意味するものは、永正五年(一五〇八)足利義種の將軍復帰に伴う、幻住派の京都進出と朝廷への接近であろう(当時は後柏原天皇)。実際、一華碩由の法嗣聖福寺玉室碩琳は、同年、師一華の先例に任せて香衣の着用を許されており(『康親卿記』永正五年六月二十六日条)、この背景に周防大内氏―一華碩由ラインの働きかけがあったことは間違いない(また「丹波人」||碩琳自身も翌年正月上洛して参内している——「後柏原天皇宸記」永正六年(一五〇九)正月二十六日条)〔玉村一九七八88頁〕。そして、おそらくはこれをステップとして、同門の知傳碩精(東海碩昕―禮仲碩耕―知傳。前出の外交僧冊中道徳の法姪に当る)の代に高源寺が勅願所として認定されるに至る。【軸別1②・軸別1①】永正十四年(一五一七)閏十月二十七日後柏原天皇口宣案・高源寺某奉書がその関係史料である。そこでは、高源寺住持が紫衣を

着けて開堂することが勅許されている(図版1)。

【軸別1②】

(端裏銘)  
「口 宣案」

上卿 小倉中納言

永正十四年閏十月廿七日 宣旨

瑞巖山高源寺住持末代

宜轉任紫法衣大和尚

藏人左小辨藤原 奉

【軸別1①】

丹波國水上郡佐治庄之内

瑞巖山高源寺事、被補

勅願所訖、末代宜紫法衣

旨候也、恐々敬白、

閏十月廿七日 奉(朱方印文不明)

高源寺大和尚

前者【軸別1②】の口宣案は料紙が宿紙で、本文・端裏銘ともに楷書体であるが、端裏銘の字体がほぼ本文と等しく、戦国期のものよりも江戸時代のものに近いという印象を受ける(富田一九八〇27頁参照)。奉者の「藏人左小弁藤原」とは、『弁官補任』によれば柳原資定(五位藏人)である。しかし、銘の「小倉中納言」が誰かは分からない。『公卿補任』に載せる当時の中納言(權中納言)にも小倉姓のものはない。また、後者【軸別1①】は、朝廷関係の文書でなく、高源寺派内の連絡文書である。同一と見られる朱印が「洞春寺文書」永祿五年六月二十七日付け嘯岳鼎虎宛て文書(「正宗山洞春寺由緒書」〔「防長寺社由来」巻六〕で「入院の請疏」と呼ばれている)に捺

されていること、そしてその封紙上書の差出が「高源寺」となっていることが、その根拠となる(また【繪旨17】〔案文〕に同一印を捺すことも参照)。おそらく、高源寺内の人間が知傳碩精に住山を依頼するための文書が、この【軸別1①】だったのだろう。なお、この問題の朱印の朱が写ってしまっていることから、【繪旨30】が【軸別1①】の包紙であるとも判明する(朱が乾き切る前に包んでしまったのだろう)。そして、このときの紫衣奏請に大きな弾みを付けたと考えられるのが、次の文書である。

【繪旨23】

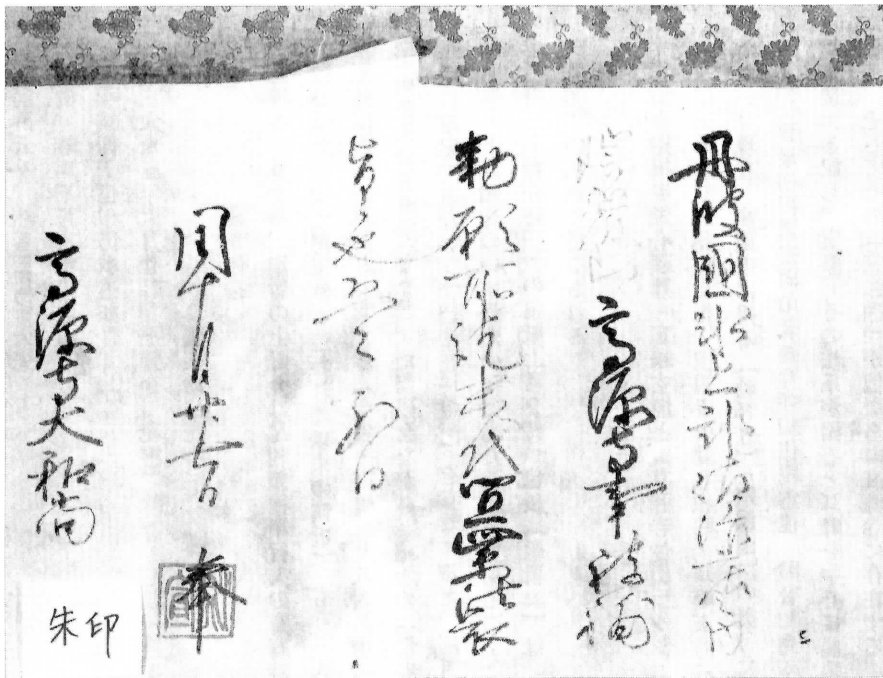
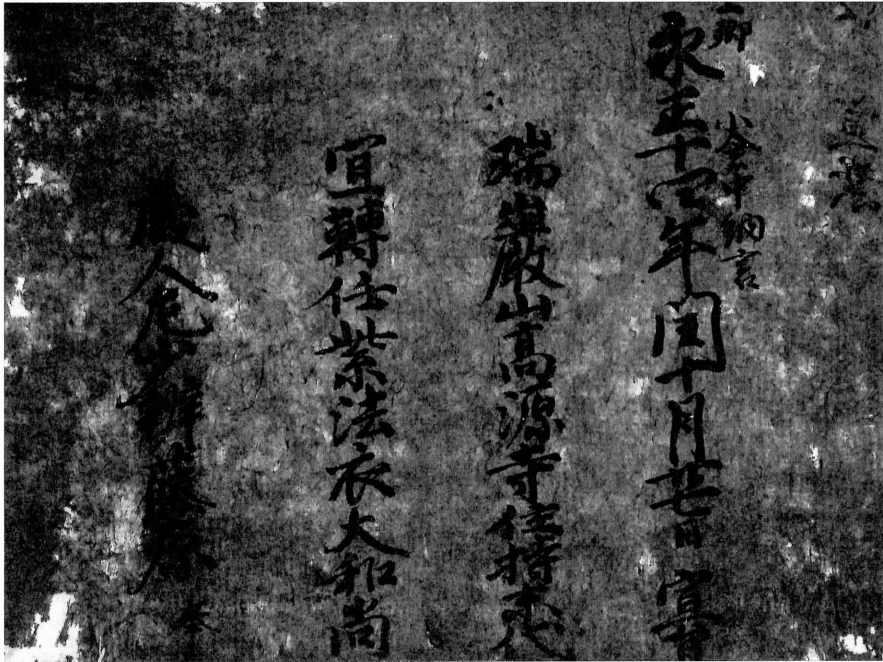
寛正五<sup>甲</sup>年八月十五日<sup>午</sup>時

當今御誕生

藏人左

高源寺

これはおそらく、天皇家の人間の誕生時刻(寛正五年「一四六四」を、藏人某が高源寺に報せてきたものであろう(奉者の候補としては、左中弁〔中御門宣胤〕・左小弁〔甘露寺氏長〕がいるが、これ以上絞り切れない)。高源寺(知傳碩精)は、こうした由緒ある文書が高源寺には存在することを朝廷側に語って、紫衣の勅許を引き出すことに成功したのではないか。ただし、誕生したばかりの皇位継承候補者を果して「當今」と呼ぶのか、いったい何故に天皇家の人間の誕生時間がこの高源寺に知らされねばならぬのか、不明である。また、現在までのところ、この寛正五年八月十五日昼生まれの人間が誰なのか確定できていない(なお後柏原天皇〔一四六四〜一五二六。名は勝仁〕は寛正五年生まれだが、誕生日は十月二十日である―『史料綜覧』など)。いずれにしても、この文書が、先の想定のように紫衣勅許の重



図版1 上【軸別1②】後柏原天皇口宣案  
 下【軸別1①】高源寺入院請疏（高源寺某奉書）

要な鍵となったことは、ほぼ間違いのないと思われる。なお、「御支干奉」という上書のある包紙【綸旨24】は、筆跡・内容から見てこの【綸旨23】の包紙であろう。

\*以上から推察されるように、高源寺と後柏原天皇との関係はかなり密だったようである。後柏原宸筆の史料として、法華懺法【冊22】・和歌短冊【軸別8①】が寺内に伝わっているのもこれを象徴する。

さて、こうした経緯によって、高源寺住持の知傳碩精は、紫衣を著けて実際に開堂の儀に臨む。それを伝えるのが『丹波水上郡佐治庄瑞巖山高源寺住持帳』である（現在同書が行方不明なため、ここでは『大日本史料』九編之八一永正十五年十一月二十七日条から網文とともに引用する）。

丹波高源寺ヲ勅願寺ト為シ、同寺住持碩精知傳、ヲシテ、紫衣ヲ著シテ、開堂ノ儀ヲ行ハシム、

〔丹波水上郡佐治庄瑞巖山高源寺住持帳〕

○丹波高源寺所藏

中峰和尚直弟開山遠溪祖雄大和尚、○中略開山九世禮仲碩耕和尚、

永正十五年丁未十一月廿七日、宣旨被補勅願所、○中略紫衣開堂、

開山十世法孫知傳碩精（花押）

開山九世孫第二世湖心碩鼎（花押）

（印文不明）

第七世嘯岳碩虎（鼎虎）

（鼎虎）

ここに初めて、「高源寺」勅願所、住持「紫衣開堂」という格式が整うこととなったのである。そうした意味で、知傳碩精が後世の高源寺に与えた影響は絶大なものといえよう。

それでは次に、右に続く、高源寺と朝廷との関係を示す史料を見てみる。それが、【軸別1③】大永五年（一五二五）六月二十日付け室町幕府（足利義植）奉行入連署奉書である（口絵写真表上参照）。

【軸別1③】

高源寺住持紫衣事、

勅許云々、然者云綸旨云先

例、着用不可有相違之由、

所被仰下也、仍執達如件、

大永五年六月廿日 上野介（花押）

雅楽助（花押）

當寺住持

花押の一致から、奉者の上野介は足利義植奉行人の斎藤時基（足利義植が明応政変で將軍位を追われて以来の側近）、もう一人の奉者・雅楽助は斎藤基速だと判明する（今谷・高橋一九八六上巻627頁参照）（末柄豊氏の御教示による）。ただ残念ながら、宛所の「當寺住持」が誰かは確定できない（「高源寺住持籙」を参看すると、江月碩満・厦仲明桂・玉淵碩珠のいずれかの代に当たるようである）。なお、「高源寺住持 上野介時□」の包紙上書を持つ包紙【綸旨34】は、この【軸別1③】の包紙と見なされる。

⑤博多聖福寺湖心碩鼎・耳峰玄熊と《高源寺住山ラッシュ》

次に、博多幻住派の枢軸、聖福寺の湖心碩鼎・耳峰玄熊に注目してみたい。現在、高源寺に残る【軸N5】「宗派図」の奥付に当る部分に、「扶桑最初禅窟安國山聖福禅寺幻住庵常住 頤賢和尚所筆 玄熊拾遺」と記し、実際、その法系が湖心・耳峰を中心に展開していること、そしてその「宗派図」が他ならぬ高源寺に存在することは極めて象徴的である。この彼らを中心とする数世代から、まさに《高源寺住山ラッシュ》というべきブームが現れるからである。永正以後、天

文・永祿頃まで、そうした状況が続いたものと思われる。以下、具体的に見ていこう。

湖心碩鼎が高源寺に入ったのは永正十六年十二月のこと（後述）。

『浮木集』卷十二は「同（永正）十七年庚辰、高源賜紫第二代ノ座ヲ領ス」と誇らしげに記す。すなわち、高源寺に住することで、紫衣の資格——南禅寺長老なみの地位——を獲得することが可能になったわけである。これに対し、寺内に伝わる【軸イ2】月舟寿桂製湖心住高源同門疏（図版2）は次のように祝賀している（月舟寿桂文集『幻雲稿』（続群書類従十三上）にて校訂）。

同門 茲審

夫丹州瑞岩山高源禪寺。廻吾門」遠溪大禪師施化場也。禪師曾踰滄溟。登獅子岩。拜謁 普應國師。傳其衣孟而帰本邦矣。

然後聘書屢到應而不受。蓋慕國師菴居也。」為其孫者。皆蹈其轍。殆乎二百年。比者」北關聞其高風。降 綸音。以寺陞紫衣

位矣。」紫陽湖心禪師入八世孫弼和尚室。嘗其法味。且復據琴臺第二座。秉拂提倡。人皆側聽。於是特賜恩詔。滌篆 高源。

山林光輝。蔑以加」焉。予欲製一疏講同姓好。然宗緒委地。無可謀于列者。縱有一兩輩。皆處天末。不知其名。末奈之何。若

復思而止。則庸詎稱瓜葛哉。昔吾山」天與老人住信之開善日村菴。希世師製同門疏。其末唯掛希世一人名。天與忻然為一斐而

足矣。吾是不文。豈師其跡。況今避兵乱北征。不」遑寧處。然聞此盛筵。不可不賀。遂綴儷語。以抒微忱云。」

瞻彼東都四百祀之間。誰賜國師徽號。冥吾 南詔第一祖之後。獨揖菴主高風。守家訓久雖掩闕。拜 天書幡然出世。 恭惟。」

新命高源湖心和尚大禪師。弼中彪外。離類絶倫。寬以濟猛。猛以

濟寬。驗人黒竹篔下。寂而常用。用而常寂。安禪青松樹間。蓋一峰倚天弥高。」矧衆流帰海益濬。四句百非俱離。慧朗膺仰嶠再来。片言隻字無遺。靈谷跋瑞岩雜録。群仙從遊丹壑。諸徒奔忙黃塵。月臨荒戌起啼鴉。未安」栖息。雲低遠塞鳴寒雁。難尉別離。」

永正龍集庚辰仲春

日疏

橘州寿桂（朱鼎印）

この同門疏は、月舟の捺印もあつて確かに自筆の正文である。整然と区切られた柵目に丁寧な字が書き連ねられている。この現物が高源寺にあるということは、とりもなおさず、湖心碩鼎がこれを博多に持ち帰らなかつたことを意味する。高源寺には他の住持に対する同門疏・山門疏などは残つておらず、さすがに文筆の誉れ高い月舟寿桂のものならではの現象なのだろう。この同門疏は、文書がどのように残され、保存されるかという問題を考える際にも貴重な事例を提供してくれそうである。

さて、月舟寿桂の文集『幻雲稿』にはこの同門疏に追記があり、これが実は大永二年（一五二二）の夏に書かれたものであること、つまり永正十七年二月日という二年前の日付は遡及させて記したものと、ということが判明する（米谷均氏の御教示による）。同門疏の作られ方が分かる貴重な事例とも言えよう。左に引用する。

公受業于無隠派。嗣法于弼中。師東海為其祖。中峯嗣高峯遠溪。

初於高源坐禪于石上。松垂蔭庇之。永正十七年二月。公住高源。

時撰丹并京師大乱。避赴越。不能製疏。因公懇請。大永二年夏。

追而製之。補闕可在永正十七年作。

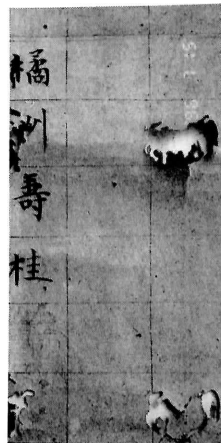
また、高源寺には、湖心碩鼎に一華碩由が与えた、嗣法を祝する題詩【軸15】も伝えられている（図版3）。

臨濟正傳大宋之 中峰普應國師一傳而至本朝之 遠溪雄菴主 七傳而至 玄室主菴主 之室中學得碧岩百則者遠江郡上出  
 関西之愚夫而已和愚夫之室參得百則者 湖心鼎外史 其參了之翌日袖筆倚一章來來和日歸也則以可爲後日之證歎愚夫  
 弗克因辭和之者一篇豬尾有餘地更製一帯以祝之云尔

帝將百則紙頭書公案圖既又守除坐其地乘罷後樣淨青嶂碧岩虛  
 參從不識至攻毛百則呈終有違昔他日喚祿新哥實更加才氣道聲高

寔永正二年乙丑書雲令節  
 幻住九世法孫比丘晴亮社多前住聖福一華叟碩由書于金巨羅華室下

図版3 【軸L5】一華碩由製湖心嗣法証明題詩



図版2 右【軸イ2】月舟寿桂製湖心住高源同門疏（全体）  
 左 同署名・捺印部分の拡大図

夫丹州瑞岩山高源禪會通各門  
 遠溪大師禪院住持也 禪師曾跡淡溪金獅子堂拜請 普應國師傳其衣蓋而瑞本外美然後轉書層到慶而不交蓋兼師卷居也  
 在夫孫名皆瑞共徽短乎二百年比居  
 北關開共高風降 給音以寺陸雲未位矣  
 茶陽洲一祥師入八世法嗣中和尚室常共法味以復振衰堂第二座兼師授信人管例然於是時瑞思彌滿蒙 高源出林也祥後以知  
 天與美麗佳信之開善日村奉意也師贊同門疏共味排着世一人名天與然然為一愛而足矣否是不文豈師失跡乎今遊天北任不  
 違寧處無聞比登奉不可不賀遂綴復語以行微拙也  
 宿使東野四百祀之間誰賜國師微號與吾 南詔第一祖之後獨得卷主高風守宗則又殊掩閣非 天與補然出也  
 斯今高源湖心和尚大師神胸中起外雖題純佛寬以濟福雅以濟覺發人照竹葉下微而常寂也禪音和樹門為一上師天與高  
 斯東流瑞海益深四句日外俱難要胡骨仰喝春來序言隻字無違靈谷跋瑞岩錄錄仙從遊好遊難後瑞代是應月瑞成也紅雲瑞主  
 和息雲微遠覺佛錄詳別錄  
 永正龍集庚辰仲夏 日號



臨濟正傳大宋之 中峰普應國師。一傳而至本朝之 遠溪雄菴主。

〔遺稿〕  
玄室圭菴主。々々室中。学得碧岩百則者。遠江之

鼎公外史。々々其參了之翌日。袖華偈一章。來求和曰。賜此和則

以可為後日之證歟。愚夫」弗克固辭。和之者一篇。楮尾有餘地。

更製一篇。以祝之云尔。」

寧將百則紙頭書。公案圓成文字除。坐具拋來罷參後。猿煇青

嶂碧岩虛。」參從不識至吹毛。百則呈終有遺曹。他日喚称新

雪竇。更加才氣道聲高。」

寒永正二季<sup>乙</sup>書雲令節 幻住九世法孫比丘瞻禿杜多前住聖福

一華叟碩由書乎金<sup>乙</sup>羅華室中」

幻住派の法を嗣いだ証拠とするために、湖心碩鼎が一華碩由に和約

を求めた。その際書翰の末尾に余白があつたので認めたという、一華

直筆の題詩だ。巻物の題銘には「前高源湖心昇禪師印證（博多聖福寺

住願賢禪師） 蘭室新添」とあるが（蘭室祖芳は先代の住持）、誤解

を招かぬよう付言すれば、これは通常の印可状（禪宗における嗣法証

明書）ではない。あくまでも副次的な嗣法証明「題詩」である。問題

はこれが高源寺で作られたものなのかどうかだが、おそらく湖心碩鼎

は博多で一華の室に掛塔したはずなので、博多で作られたと見るのが

自然だろう。その後、湖心がこの高源寺に入院する際に、この地へ持

参したのではないか。するとそれは永正十六年（一一一九）末のこと

となる。

\* 幻住派の印可状について——唐津市少林寺に残る天文七年（一一五三八）

二月十二日付け湖心碩鼎印可状（珀林・耳峰宛て）には、湖心の花押が

据えられている〔渡邊一九九五40〕41頁注30翻刻参照。また降って江戸

時代における関東の玄派・碩派の印可状でも、『浮木集』巻五・卷十に載

せる通り、印鑑の押捺がある。そして高源寺の眞乗祖章が弘巖玄猊に与

えた印可状（天明三年十一月十四日）【軸N7】にも、方印二顆（眞

乗）「祖章」が捺されている。つまり、印可状にはその名の通り、判

いし印が必要だったのである。なお、三伯玄伊五世孫昌能によれば、幻

住派の正式な嗣法とは、印可状だけでなく、「血脈伝来」が必要であつた

という（『浮木集』巻十）。

多くの幻住派僧を輩出した博多の禪院には焼失したものが多く、

幻住派はおろか、中世都市博多そのものの動向を詳しく知ることすら

かなりの困難を伴う。そこで威力を発揮するのが、今回の調査で「発

見」された湖心碩鼎の語録『願賢録』乾・坤【K121・K118】である。

従来知られていたのは規伯玄方（湖心—景轍玄蘇—規伯）が編んだ小

編の『三脚稿』のみだったが、この『願賢録』には、湖心の入明中の

詩文や博多住人との交流、そしてもちろん高源寺前住に関連する記事

が多数含まれている（粗々数えても二冊で千篇近い項目を有する）。

数少ない博多関係史料・高源寺史料として、極めて貴重なものと言え

よう。たとえば、次のような新事実がこの『願賢録』によつて知られ

るのである（湖心の入明中の事跡については瑣末な考証を要するため、

別途の機会を期す）。

○ 『願賢録』は外題で、内題は「願賢和尚雁唐集」。遣明正使と

なつて渡海した自負がそこには窺える。高源寺所蔵の『願賢録』

は原本に極めて近い写本と思われるが、原本は天正四年（一一五七

六）——願賢碩鼎没（永祿七年一一五六四）後まもなく——に編

集されたらしい（作成地は博多が有力か）。

○ 『東福寺誌』にも載せる永祿五年（一一五六二）六月二十七日付け

の「自贊」〔渡邊一九九五32頁参照〕はこの『願賢録』に収載されている。

○湖心碩鼎(当時西堂)は永正十六年(一五一九)十二月十九日に高源寺に入院開堂し、翌年正月十六日に退院した。こうした住山日数の短さからも、高源寺「入院」が多分に形式的なものであったことが知られる。このときの高源寺檀越は足立基仙であった(基仙は法名か。「足立系図」には見えず)。なおこれ以前に南禅寺、以後の永正十八年に聖福寺への入院が知られる(『高源寺住持籍』参看)。

○当時の高源寺には一華碩由(湖心の師)の肖像(頂相)があり、湖心碩鼎はそれを目撃している。おそらく永正十六年入院の折のことであろう。「丹波国ニ於テ先師一華和尚ノ尊影、手中ニ劔ヲ拈ズルヲ見ユ。二首。ノ先師去世十余年。真相如生怡儼然。似賜蒿枝手中劔。焼香掛著哭蒼天。ノ喝下金剛臨濟孫。大人真相遍乾坤。寫形即得寫真否。屢問先師と不言」。ただ残念ながら一華の頂相は現存していない。

○湖心碩鼎は永正十八年(一五二二)二月十二日、安国山聖福寺に入院開堂した(聖福一〇五世)。これ以前に南禅寺出世の経歴があるため(前述)、『三脚稿』【K122】所収の住聖福諸山疏でも「湖心和尚住聖福寺疏」と題されている(和尚はほんらい東堂・長老への呼び名)。

○「安山(安国山聖福寺)入寺の仏事」という項目があり(永正十八年入院の際)、「帖」(將軍足利義植の公帖)のみならず、「探題帖」(九州探題渋川尹繁の住持補任状)・「太守判」(大内義興の住持補任状)が存在していたことが分かる(それぞれの該当する現

文書は未確認)。

○また同項目の拈香部分は、「祝聖香」→「將軍香」→「守護[香]」→「嗣香」の構成である。山口隼正氏が指摘するように、「探題香」は存在していない(『探題香』は南北朝後期の今川了俊時代のみに限られる)(山口一九九八a 22~23頁)。そして、おそらく「檀那香」が入るべき箇所に「守護[香]」(大内義興への香)が見える。このことは、大内義興こそが当時の聖福寺を支えていた何よりの証拠といえよう(伊藤一九九七、橋本一九九八17頁注57)。

○天文八年(一五三九)度遣明船の総船頭・博多商人神屋主計の実名が運安、その子が長秀と判明する。嘉靖十九年(一五四〇)四月二日、湖心碩鼎は神屋長秀に嘉靖の年号にちなんで「嘉翁性靖」の道号法名を与えた。以上のことは『策彦和尚初渡集』に見えない事実である。なお、神屋主計運安は石見銀山を発見した寿貞の父でもある。その寿貞は実は法名であり、道号を「利翁」という。これも『願賢録』から判明する(息が宗漸・宗白である点から神屋氏だと確定できる)。

○天文十一年(一五四二)聖福寺捨門の棟上。

○天文二十年(一五五二)頃の作品に混じって「器川高源寺開筵頌」があるので、このころ器川碩瑠が高源寺に住持したことは明白である(『高源寺住持籍』には見えない)。

○天文二十二年(一五五三)仲春(二月)七日の火事の類焼により、聖福寺堂舎の「過半」が「焦土」と化した、という事実。『大宰府・太宰府天満宮史料』巻十四や佐伯弘次氏の中世博多の火災に関する研究(佐伯一九九四)で触れられておらず、聖福寺内の火

災とも考えられるが、『聖福寺史』(小島一九六四)には見えない事件である(天文二年・十七年・二十年・永祿六年の火災を述べらるのみ)。

○永祿四・五年(一五六一・六二)の作品に挟まれて、「頌ヲ作り丹波高源灯室ニ投ズ」という詩偈が見える。「灯室」は湖心碩鼎の法嗣燈室鼎挑と見られ、この当時高源寺に住山していた可能性が高い。

○前出の永祿五年(一五六二)六月二十七日付け湖心碩鼎「自賛」には、「前任東福、後住高源、承天主席駿岳碩甫」とあるので、湖心の法嗣駿岳碩甫(承天寺天徳院主・聖一派一同派名「元甫」も高源寺に入院開堂したことが分かる。おそらく湖心の住山(永正十六年)よりも後、この「自賛」が作られる永祿五年以前のことか。「高源寺住持籍」には見えない事実である。

○「高源寺前住」として知傳碩精を悼む偈を製するほか、やはり「高源前住」として「棟宗和尚」、「前高源日甫和尚」を悼む偈を作っている。【軸N5】「宗派図」によれば、棟宗とは湖心の法姪の棟宗明柱(一華碩由―無極実久―棟宗)、日甫も同じく法姪の日甫碩熙(一華―忠庵碩恕―日甫)のこと。この棟宗明柱・日甫碩熙の二人も「高源寺住持籍」には見えない。なお、日甫和尚を悼む偈には「乱中也」と注記があり、戦死したことが知られる。これは博多における乱劇を指すものだろう(「器川老禅」〔器川碩璣〕なども同前)。この博多における戦乱が何であったのか不確定だが、別のところに「杉衆没落」「乱ヲ避クル為メ乗船……」などとあるので、景轍玄蘇(湖心法嗣)も乱を避けて志賀島に寄寓したという、永祿六年九月の博多合戦(長一九六三138頁注5、佐

伯一九九四31頁など)ではなかったか。「乱後」に湖心碩鼎が「對州晴康公(宗晴康)ニ単衣ヲ送」っているのも注目される。

○やはりこの永祿年間頃死去したと見られる「小師龍甫ヲ悼ム」偈には、「贈リテ高源寺ト号ス」とあるので、この龍甫玄鼻も高源寺に住していた可能性がある。

○「前任高源江月満和尚肖像賛」を作っている。したがって江月碩満(一華碩由―忠庵碩恕―江月。すなわち前出の日甫の法兄)もまた高源寺に住した経歴を持つ。

○飛鳥井雅教の韻句に和する偈が数首、また「飛鳥井殿詩哥之會」という注記がある(この詩会がいつのものか確定できていないが、さしあたり、「富田一九八八267頁、米原一九七六」を参照)。

○聖福寺塔頭富潤庵の存在、庵主は三祝徳元首座(徳元は鼎元とも湖心の法嗣の一人。「三祝」の道号も湖心が与えたもの)。

○湖心碩鼎、「元庸蔵司ノ琉球ニ在ルヲ招ク」。

○一五四二・四五・四六・五二年に「日本国王使」として朝鮮に渡海した安心は、博多聖福寺・対馬西山寺僧の安心□楞(書記、のち西堂)である(『策彦和尚初渡集』天文七年七月二十六日条・『三脚稿』・「家康公命和睦朝鮮対馬送使約条相定次第対馬私記写」〔東京国立博物館資料館所蔵〕参照)〔米谷一九九八b〕。また、正使安心とともに副使として朝鮮に通交した人物も追跡することができ、一五四六年の副使菊心は、聖福寺塔頭鏡灯庵主の菊心妙金藏主である(『策彦和尚初渡集』天文七年八月十三日条も参照)〔橋本一九九八17頁注52、なお鏡灯庵が聖福寺塔頭であることは小島一九六四⑧150頁参看〕。一五五二年の副使天友は、彼の地において死去したが(『朝鮮明宗実録』八年三月庚寅条)、

「天友□教」といい、寿三十歳であった。そして、最近米谷均氏によって明らかにされた一五四二年副使方室宗諸（米谷一九九八b107頁）との交流も確認することができる（当時方室は在対馬）。

○一五五六・六二・六五年と続けざまに朝鮮に外交してきた日本国王使の「景轍」を誰と見るかが、中世日朝関係史上の一つのトピックとなっている（有名な景轍玄蘇ではない―長一九六三139―140頁）。筆者はかつて『策彦和尚再渡集』嘉靖二十六年十一月六日条の「景轍□軻」であろうと推測したが（橋本一九九八17頁注55）、実はこれは記主策彦周良自身の誤記であり、失当であった。『願賢録』によれば、「景蘇宗軻」が正しい道号・法諱だったのである。また、渡邊雄二氏（渡邊一九九五39頁注24）が紹介する「鏤水集」の「景轍禪師」も、「丁巳」年（弘治三年＝一五五七）京都万寿寺から博多聖福寺に帰ったというので、問題の景轍ではありえない（景轍は在朝鮮）。この直前、弘治二年に相国寺後板として「玄蘇首座」が見えるので（「鏤水集」）、おそらく景轍玄蘇の方であろう。したがって、現在のところは、道号でなく法諱を「景轍」と名乗った湖心碩鼎の法孫筠溪玄轍（湖心―嘯岳鼎虎―筠溪）〔玉村一九八五221頁〕が候補となるのではなからうか（道号で通用するより法諱を用いる方がランク下位である点は今枝一九七〇379頁）。

○大友氏の志摩郡代で博多の支配を掌った「臼杵房州」、法名「恕峯宗忠」（臼杵鑑統）の一周忌を湖心碩鼎が行なう（臼杵安房守については堀本一九九七30―34頁、佐伯・小林一九九八230―231頁など参照）。

○湖心と「芸州小早川内浦兵部公」との交流。後述するように湖心

の法嗣嘯岳鼎虎が小早川の篤い帰依を受けることになる。

冗長な紹介となってしまったが、高源寺関連に絞って言えば、高源寺歴世住持が多数補える点がこの『願賢録』の最大の強みである。また、高源寺住山がきわめて短期間の、すなわち形式的なものであることも判明した。そして、本節冒頭でも述べた通り、湖心・耳峰周辺の博多聖福寺幻住派僧たちによる、『高源寺住山ラッシュ』の様相も垣間見えてきた。高源寺に住し紫衣の位を獲得することが、博多に帰ってどのような効果を持ち得たのか定かでないが、聖福寺復興のための勸進行為に、一定の効果があつたことは間違いあるまい。もちろん、それだけではなく、高源寺住持となった人間たちには、たとえば、高源寺（紫衣住持）→聖福寺（十刹）→京都五山→南禅寺（五山之上）、というルートが想定されるので、彼ら自身の立身出世のためにも多大な推進力を生んだことは疑いない。

一方、高源寺や檀越足立氏の側としても、幻住派の有力な住持が入院してくれば、佐治地域における宗教的求心性を獲得することができたはずである。おそらく、このように高源寺・博多幻住派の双方にとって望ましい在り方が、この『高源寺住山ラッシュ』だったのでないか。

以上のような考察を可能にしてくれる『願賢録』は、高源寺本の写本が横浜の大倉山精神文化研究所にあり（『国書総目録』）、これまで日本史学界でのみ未知だったとも言える。したがって、原本に近い『願賢録』がこうして世に出たことは重要であろう。今後、翻刻作業を含めた内容の一層の紹介と検討とを行ない、高源寺史・中世博多史研究の進展に寄与していきたいと思う。

ところで、従来、湖心の遺稿集として知られたものには先述の通り

『三脚稿』【K122】があり、続群書類従十三下にも所収されているが、高源寺には「寺町五條 書林藤屋／古川三郎兵衛」の刊記の江戸時代版本がある（ちなみに最初の規伯玄方關版本は京都村上平樂寺刊―田代一九八三参照）。この版本には、入手の契機が奥に記されており、興味深いので紹介しておこう。

享保壬寅之秋終、高源寺祖老寓居洛中、閱市取書、偶得此集、感前住之同縁、寄附高源之常什、以為支割、

常州正宗住持固山碩堅書

ここから、高源寺やその歴世住持に關係のある書籍類が、折りに触れて集積されていたことが窺える（この点は法祖・中峰明本の語録類の江戸版本が多数所蔵されている点と通底する―高源寺文書K参照）。当時のマーケットにおいては、その努力たるや大変なものであつたらう。

\*湖心碩鼎（二四八一―一五六四）。筑前の人。生年は「自贊」などから逆算。もともと幻住無隱元晦下の彌中道徳に師事し、その後、一華頼由に掛塔。幻住派遠溪下十世となる。享祿年間、博多幻住庵主となり、薩摩大願寺に住すともいう。永正十六年（一五一九）十二月十九日高源寺入院開堂。翌十七年正月十六日退院。紫衣の位を獲得する。永正十八年二月一二日聖福寺出世（一〇五世）（『願賢録』）（以上、小島一九六四④64―65頁を一部修正）。唐津市少林寺に残る天文七年（一五三八）二月十二日付け湖心碩鼎印可状（珀林・耳峰宛て）（渡邊一九九五40―41頁注30翻刻）は、湖心が遣明正使となつて渡海する直前に作られたものである。そこに「大永五乙酉（一五二五）、大明二渡ラント欲スルノ時」云々とあるので、湖心碩鼎が有名な寧波の乱を起こした大永度遣明船に乗り組んでいた可能性は高い。そうした経験があつたればこそ、次の天文八年度

の遣明正使に抜擢されたはずだからである。また、湖心の別号「願賢」は、明の嘉靖帝から下賜されたものだともいうが（『高源寺住持籙』など）、『策彦和尚初渡集』に該当の記事はない。帰国後、天文十四年（一五四五）七月九日南禅寺入院（『鹿苑院公文帳』）。高源寺も兼任したらしい（『願賢録』・『三脚稿』の「自贊」）。また弘治三年（一五五七）九月段階で聖福寺当住が確認できる（『聖福寺文書』弘治三年九月二十三日付け聖福寺当知行目録）。永祿七年（一五六四）、筑前国宗像郡曲江山隆尚庵にて寂（『以訂庵開山由来書』―長一九六三146―147頁注7）、寿八十四歳。ちなみに、湖心の俗兄・芳林道春も八十八歳という高齢で没している（『願賢録』）。作品には『願賢録』『三脚稿』のほかは大永五年（一五二五）四月撰『得魚釜』があるというが筆者未見。

それでは次に、湖心碩鼎の法孫・耳峰玄熊の活動に移りたい。

耳峰は、湖心―珀林玄琥―耳峰という法系に属すが（もともととは玄琥―玄履―玄熊を予定されていたらしい）、玄履・珀林が湖心に先だつて死没したため（『三脚稿』耳峰号説・唐津市少林寺藏湖心碩鼎印可状（渡邊一九九五41頁翻刻））、実際には湖心に多く掛塔していたと考える。『聖福寺史』によれば、永祿六年（一五六三）乱後の第一回復興（元亀元年―一五七〇奏功）、天正十四年（一五八六）の乱後の第二回復興を成し遂げたという（小島一九六四①8―9頁）。しかし復興作業はそれに止まらなかつたらしく、上述『願賢録』でも、天文二十一年（一五五二）開山忌の湖心碩鼎製頰偈に「熊耳峰」と読み込まれるなど、前年類焼した聖福寺の復興にも力を尽くしていたようだ。責任の重い立場にあつたわけであり、自ら聖福寺「中興住持」と名乗るなど（『聖福寺文書』）、自負心も強かつた。つまり彼は、戦国期博多史・聖福寺史上きわめて重要な人物だったのである。

【繪旨17】永祿十一年（一五六八）六月二十七日付け高源寺奉書案

丹波國水上郡佐治庄

瑞巖山高源禪寺

住持職之事、任先例

勅宣之旨、宜轉任紫法衣

大和尚之狀、如件、

永祿十一年六月廿七日 奉朱方印、印文不明

玄熊大和尚

この【繪旨17】は、前出の【軸別1①】と同様、紫衣住持として入院するよう高源寺が耳峰玄熊に、求めた「請疏」の写と考えられる。耳峰の入寺が永祿十一年だということも判明するので、博多聖福寺の復興に邁進している最中の住山だったことが知られる。おそらく、その勸進活動に弾みを付けるためにも、高源寺住持（南禪寺長老並み）の立場が求められていたのではないか。

ちなみに、この文書案の入手契機も面白い。

【繪旨28】（【繪旨17】の包紙に当る）

「耳峰玄熊大和尚賜紫 享保九春二月 玄賢記

繪旨筑前聖福禪寺常住秘在之 然處丹後宮津觀音寺

現住無文和尚享保八卯夏彼国遊歴之次依所望附當山者也

宣旨 耳峰和尚

すなわち、丹後宮津の觀音寺住持無文和尚が享保八年（一七二三）

筑前聖福寺を尋ねた折り、所望して持ち来ったものだというのである。

\*ところで、この【繪旨28】包紙上書を記したのは「玄賢」だというのが、

彼は「住持籙」に見えず、副寺であったかと思われる。概して中・近世

段階の高源寺は、住持が外部から招聘されてくるが多かったよう

（それは前述した博多幻住派僧の住山のあり方から見ても首肯されよう）、

基本的には地付きの副寺が檀家の足立氏とともに寺内の事務を切り盛りしていたようである。なお、この玄賢は、遅くとも宝永六年段階まで碩

養と名乗っていたが、のち、玄賢に改名したという（R41 奥付参照）。

あるいは、高源寺十九世の頓仲碩養との混同を避けることであろうか。

さらに、高源寺には、耳峰玄熊が入院開堂した際の語録【軸M3】

が、そっくり軸装されて残っている。奥書を参照するに耳峰の自筆で

あり、熙春西堂（東福寺僧熙春龍喜）に「慈斤」（添削）を求めたも

のである。中世の法語の実物といい、実際に添削の跡が残っている点

といい、極めて貴重な史料なので紹介しておきたい（図版4）。

【軸M3】耳峰玄熊入院法語

誓片

丹州瑞岩山高源禪寺入院之法語

指三門 高源一滴澍大法雨豁開頂門眼

看飛龍上九五 普

佛殿

取小白花山安 置大日本國如何是端的

底觀音千里遠溪江水色

土地

瑞岩神人護法重任指像 善哉々々無

管仲吾其被髮左衽

祖師

西來閑達磨山僧撥草鞋胡家一曲作履声

須弥躡跳舞三臺



據室

高峯室内下三語高源室内拈一箴

卓一下不二法門更休問夜來明月上高峰

繪旨

九州四海行 吾王令至理一言轉凡

成聖

拈衣

山水袈裟々々山水因甚塔在某甲上座

半肩 喚

父子從來妙不傳

祝香

席卷八方囊括四海

一統乾坤

三山盃有五湖

開關

折

金輪永轉 蟠桃吹御苑之香

鈞齡益遐 龍華掃弥勒之綠

檀香

挿向一炉為當山檀越足立公資

倍祿算 更惟 開福聚海結檀越緣

人間亦自有丹丘 滿山藥草春幾

祇今多雨露 一門桃杏日新

嗣香

這是松風十里名地無載天無覆山野

不遠千里携来于箇坐禪松下而問

聲相應同氣相求即今燕向金爐供養

珀林前板首不啻報乳恩之厚且要

俾人識見過師貽堪傳授也

開山諷經拈香之偈

吾祖曾從戢化緣而今方

閩部州光陰易遷 祖翁去二百

餘年 再来今日初相見獅子

岩前一喝先 喝二喝

東福熙春西堂云一二之句三字ツゞイツレモ上ニツクホトニ

何トヤラルトラセラレタホトニ 吾祖曾從戢化緣而今

方 當機觀面トツカマツラウトツ子タレハヨカラウ

サウメサレヨト云テ ソハニ御書アツタリ 寔永祿

年八月日也

【語注】○九五：易卦の、下から五つ目の陽爻の称。また、天子の位を表す。

【易、乾】九五、飛龍在天、利見大人。○管仲：名は夷吾。春秋、齊の

顯上の人。桓公の相となり仲父と称せらる（史記、六二）。○油麻：胡

麻の異称。○喚：禪林で、師家が学人に接するとき、または導師が引

導する際、言詮不及、意路不到の玄旨を開示するに、イイと言ってこの

語を用いる（無門関、四一則。碧眼集、一二則、頌）。

\*ちなみに、中興十七世濟洲玄橘が入院開堂したときの法語（H28）も、

添削を求めてそれが書き込まれた状態で保存されている。添削を施した

のは「各室」なる禅僧だが、詳らかにしえない。

この【軸M3】とともに現在「耳峰和尚墨蹟 武卷」という木箱に

入れられている【軸M4】雪嶺和尚（雪嶺永瑾か）法語は、近松寺

（中興開山が耳峰）の五世遠室明超により、「右／＼軸耳峰和尚真蹟無

疑者也／＼幻住菴遠室明超（印二題）」と追記されている（幻住庵は肥

前のそれか―「近松・小林両寺略記」「松浦叢書」二参看。おそらく、



遠室が証明して、高源寺に譲られたものだろう。この遠室の記載を信ずるとすれば、本文はもとより、「雪嶺和尚真蹟、蓋字有差誤又有脱落字、以異本校則佳乎、慶長第二（一五九七）十月四日於肥前安國再拈筆、玄白拜」とある写の奥書に至るまで、まるごと耳峰玄熊が筆写したものだということになる。

なお、【軸M3・軸M4】および【軸N5】の三つは、損傷甚だしく、また中世史料としての重要性も鑑みて、修理補修が緊急に必要なものと思われる。

\*耳峰玄熊は出身・生年ともに不明。博多幻住庵にて湖心の法系に連なる（湖心―珀林―耳峰）。聖福寺一〇世。天文二十年（一五五二）の類焼後、聖福寺復興に活躍したらしい。永禄十一年（一五六八）六月高源寺入院、紫衣の座を獲得。永禄十三年（一五七〇）春、「聖福寺古図」（残余部分）を修復（同図奥付―大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館編『神社絵の世界』（同館、一九九五年）40〜41頁による）、また聖福寺を復興。天正八年（一五八〇）住南禅（ただし「鹿苑院公文帳」は「天正十九年十二月、芸州ニ於イテ台帖ヲ拝領ス」とする）。天正十五年（一五八七）筑前国主小早川隆景の助力により聖福寺を復興。一方、肥前松浦岸嶽城主波多三河守の招聘により近松・小林の二寺を中興、湖心を開山に据える。しかし天正二年正月三日、両寺は兵火に罹り炎上。唐津の領主寺沢広高の請により、文禄三年八月、唐津に移って中興開山となる（以上、「近松・小林両寺略記」「松浦叢書」二）。慶長四年九月十六日示寂。法嗣に閑室元倍（圓光寺開山）・天桂明完・超外碩傳らがいる（小島一九六四④67〜70頁、玉村一九七九95頁、渡邊一九九五41頁など参照）。

## ⑥ 幻住派の中国地方・関東地方進出——嘯岳鼎虎・濟蔭玄宏・三章

### 玄彰

幻住派の朝廷・天皇家接近が、足利義種の將軍復帰をきっかけに本格化したとすれば、幻住派の京都五山への進出が本格的に始まったのは、やや遅れて天竜寺妙智院（臨濟宗華藏門派）策彦周良の門弟濟蔭周宏（幻住派名「玄宏」）や三章令彰（同上「玄彰」）が幻住派の法を兼受し、臨川・天竜などに入院した点に求められる（今枝一九六二211頁）。策彦は、天文年間二度の大内氏経営遣明船の副使・正使となっており、博多幻住派とも密接な関係にあった人物である（初度の正使が湖心碩鼎だった）。そして、策彦の門弟濟蔭玄宏に幻住派の法を嗣がせたのが、その湖心の法嗣・嘯岳鼎虎であった。つまり、彼こそが幻住派の京都五山への本格的突破口を開いた人材だったのである。

嘯岳鼎虎は師の湖心碩鼎と同じく、筑前博多生まれ（『浮木集』巻十二）。湖心碩鼎に参じて夢窓派名「昌虎」を改め「鼎虎」「碩虎」と名乗る。当時、多くの幻住派禅僧が安国山聖福寺・横岳山崇福寺など博多禅宗寺院を拠点に活躍していたので、それに導かれてか、彼も外交僧としてまず史料に現れる。前掲の「高源寺略縁起」でも、彼の外交活動は湖心と並んで注目されている。「略縁起」によれば、「嘯岳和尚ハ、畠山源義忠、日本ノ使トノ朝鮮ニ遣ス、後奈良帝御宇、天文十七年（一五四八）戊申ナリ」とあり、まさしく同年朝鮮側に現れた畠山殿使送「昌虎」（『朝鮮明宗実録』三年三月癸巳条）と一致する（橋本一九九七76頁注53）。しかし、この渡航の典拠となる史料類は高源寺に存在しなかった。米谷均氏の御教示によれば、『日韓書契』や『嵯客便覧』などにもこの記事は見えるというので、おそらく、典拠となるような史料が京都五山のどこかに現存するのではないか。各方面の御示教を切に乞う次第である。

\*また、典拠は不明であるが、山口洞春寺刊行の『嘯岳鼎虎和尚語録』(一

九三一年印刷・発行。底本は高源寺所蔵本) 末尾付載の伝記によれば、

「入明両度二及」び、「永祿三年(一五六〇) 帰朝」す、とある。これを信頼するとすれば、少なくとも、嘯岳鼎虎が一五五八年入明の遣明船

〔日本一鑑〕「窮河話海」巻七「奉貢」項・嘉靖戊午(三十七年)条)

〔使節は聖一派龍吟門派の熙春龍喜一玉村一九八五95頁、伊藤一九九八32頁〕に乗っていたことは間違いない。この遣明船は毛利氏が仕立て

たものと思われ〔橋本一九九八14頁〕、嘯岳が同乗していたとしてもまったく不思議はない。「入明両度」とある前者の入明年次は不明だが、策彦

周良両度の入明記録(天文年間)にも顔を見せないのが、①一五四四年遣明船(使僧寿光)〔大友氏遣明船の二号船か一村井一九九八116~120頁〕、

②一五四五年肥後国(相良氏か)遣明船(使僧御休)、③一五四六年大友義鑑遣明船(使僧梁清)、④一五五六年大友義鎮遣明船(使僧清受)の四

つに絞られる(『日本一鑑』同上・①嘉靖甲辰・②乙巳・③丙午・④丙辰各条。なお④には博多人・佐々新兵衛(和叟貞順)が便乗していたことが『鏤水集』により知られる)。あるいは一五四八年の朝鮮通交が誤って

「入明」と伝えられた可能性もあろう。なお今後の検討を要する。

さて、こうして朝鮮(及び明)に渡り、外交僧としての経験を得た嘯岳鼎虎は、おそらく、少なくとも三度高源寺に住しているようである。初住は永祿五年(一五六二)七月頃(『洞春寺文書』同年六月二

十七日付け高源寺奉書〔嘯岳に対する入院の請疏〕、再住は永祿八年五月以降(同前)同年五月日付け景轍玄蘇・駿岳頼甫奉書)、そして

三住は次に見えるように元龜元年(一五七〇)である(なお入寺開堂は元龜元年六月二十七日)『嘯岳鼎虎和尚語録』後述)。

【繪旨2】元龜元年八月二十九日付け正親町天皇繪旨案

丹波國高源寺住持職事、

然者着紫衣、愈令專佛

法興隆之沙汰、宜被抽天下

安寧 寶祚延長之懇祈

狀、如件、

元龜元年八月廿九日 權右中将 (マ)

嘯岳大和尚禪室

嘯岳鼎虎の紫衣着衣を勅許した内容である。【繪旨33②】が直接の包紙と思われ、さらに【繪旨12・繪旨18】(後掲)とともに包紙【繪旨33①】にくるまれていたらしい。この写の正文は、包紙【繪旨33

②】上書に記す通り、山口洞春寺に伝えられている(『洞春寺文書』参看。なおその封紙の上書には、本文同筆で「權右中将定親」と差出

書があるが、人名比定はなしえなかった。後考に付したい)。

この洞春寺は、開基が毛利元就、開山が嘯岳鼎虎である。現在は山口市内にあるが(現・建仁寺派)、当初は芸州吉田、のち長州萩に建てられていた。嘯岳と毛利氏との関係は、嘯岳が吉田に程近い備後三

原妙法寺に住していたことがきっかけだったようで(『正宗山洞春寺由緒書』〔防長寺社由来〕巻六)、小早川氏との関係は、天正十五年

小早川隆景が筑前国を拝領してからより一層強くなったのではない(隆景は聖福寺耳峰玄熊の天正度中興を援助している)。現在もつとも

古い写本が高源寺に存在する『嘯岳鼎虎和尚語録』上・下【K119・K120】には、小早川関係の吊偈・法語が多数窺える。刊本(洞春寺刊、

一九三一年)も出されているので、今は詳しい紹介を省くが、この『嘯岳録』は元龜元年(一五七〇)六月高源入院法語から、文祿四年

(一五九五)冬に至るまでの作品を、ほぼ年代順に編んだものである。

とくに注目される記事として、以下に数点摘記しておく。

○高源寺入寺開堂法語によれば、「大檀越」は「高橋三州太守鑑種」だという。足立氏でない点は興味深い。

○元龜四年（天正元年＝一五七三）三月二十四日に執行行っている「先師東陽十七年忌」の東陽は、一五三六年朝鮮に通信した日本国王使東陽と同一人物か。「先師」とあるからには同門の先輩格であったのだろう。また東陽は湖心碩鼎『三脚稿』に「東陽小祥忌」とあり、湖心ともつながりが深かったと考えられる（橋本一九九八14頁）。やはり聖福寺住僧であった可能性が高いのではないか。なお右により東陽の没年が弘治二年（一五五六）と判明する。

○著者嘯岳と、茂林鼎談・駿岳碩甫・九白玄菊（駿岳の法嗣）・耳峰玄熊との交流が窺える。また、東福寺派の度弟院寺院、赤間関の永福寺（聖一派龍吟門派）〔伊藤一九九八26～27頁参看〕の玄益首座が嘯岳に参じて三友の道号を受けている。永福寺三友といひ承天寺駿岳といひ、幻住派が聖一派にまで浸透していたことは確実である〔渡邊一九九五玉村一九七九が「幻住派は東福寺派に浸透しなかった」とするのを批判している〕。

\*嘯岳鼎虎（一五二八～一五九九）は筑前博多の人。もと夢窓派に属して昌虎と名乗っていたが、聖福寺・幻住庵の湖心碩鼎に参じて嗣法し、幻住派名を碩虎あるいは鼎虎と名乗る。天文十七年（一五四八）畠山義忠（架空人物）の使いとして朝鮮に通信。永祿三年（一五六〇）までに二度の入明体験を経て、永祿五年・八年・元龜元年（一五七〇）、三度高源寺に住山（住持十世・紫衣七代）『浮木集』卷十二。元龜二年には東山（建仁寺）にいた模様である（嘯岳録）。元龜四年（一五七三）毛利輝

元の発願で、毛利元就の香華として洞春寺を開創、開山として着任。天正三年十一月十四日住聖福、同四年三月十日住建仁、天正五年（一五七七）四月六日陞南禅（「正宗山洞春寺由緒書」）。秀吉の朝鮮出兵（文祿・慶長の役）では毛利氏ないし小早川氏の従軍僧として参加、朝鮮から朝鮮などの漢籍類を「手扱」してきた（二〇〇冊余、山口県指定文化財）。慶長四年十月五日、芸州吉田洞春寺にて寂。寿七十二歳。法嗣に濟蔭玄宏・鶴溪玄轍・青嶽素永らがある（嘯岳禪師語録）〔開山嘯岳鼎虎禪師傳〕参看。

【繪旨1】元龜三年（一五七二）十一月二十三日付け正親町天皇繪旨（図版5）

高源寺住持職之事、

所有 勅請也、弥可

被專佛法之紹隆者、

天氣如此、仍執達如件、

元龜三年十一月廿三日 右中將（藤田東通）（花押）

玄宏和尚禪室

右の繪旨は、宿紙で作られた正文で、宛所の玄宏和尚とは嘯岳鼎虎の法嗣、濟蔭玄宏である。濟蔭は幻住派の法を嗣いでいるが、もともとは天竜寺妙智院の策彦周良（夢窓派華藏門派）の門弟であった（「一華頌由行状」元龜三年十一月十四日策彦周良再跋。なお、同行状の跋文自体は他ならぬこの濟蔭自身によるもの。策彦再跋の「二十年」前に加えられている）。高源寺入寺以前に南禅寺で首座を務めていたらしい（『浮木集』卷十二）。『高源寺住持籍』によれば、天竜寺下の諱が周宏であり、幻住派の場合、玄宏と系字を換えて名乗ったという（これは嘯岳鼎虎の昌虎〔夢窓派系字の「昌」〕とまったく同様



図版5 【綸旨1】正親町天皇綸旨

〔今枝一九六二頁〕。おそらく嘯岳の跡を承けて高源寺住持に陞つたであろう（高源十一世―『浮木集』卷十二）。この後、南禅寺に陞つたというが、「鹿苑院公文帳」では確認できない。文禄二年（一五九三）閏九月二十一日、示寂（『浮木集』卷十二）。なお幻住派系字の「玄」字はこの濟蔭以来のこととも伝える（『浮木集』卷十五）。

\*濟蔭玄宏は、夢窓派華嚴門派同門の三章玄彰（夢窓派名「令彰」。なお別号「廓庵」に法を伝える。玉村竹二氏によれば、三章は天正十年（一五八二）二月十八日景德寺（諸山）、同日臨川寺（十刹）、天正十三年五月二十四日円覚寺（五山）、慶長十二年（一六〇七）四月八日天竜寺公帖を得て入院（玉村一九七九頁）。慶長二十年（一六一五）三月二十日（足利本『浮木集』は二十二日）示寂（『浮木集』卷十二）。高源寺住山は確認できない（高源寺住持持『19』でも「伝法十二世」のみ）。そして三章玄彰はさらに三伯玄伊（玄派の祖とされる）に伝法（天正八年二月八日―『浮木集』卷十二）。三伯が鎌倉円覚寺に出世することによって、ここに幻住派の関東進出は本格化する。建長寺など鎌倉五山はもちろん、足利学校の庠主にも幻住派の人間が任ずることになった（たとえば耳峰玄熊の法嗣閑室元倍）。関東幻住派は江戸時代中葉まで栄えたが、そのなかでまさしく、天巖明啓が閑室元倍（圓光寺開山）の法脈を辿り（天巖は圓光寺澤雲祖兌の法嗣）、高源寺中興の任を負って住山したわけである（この点は前述）。なお三伯は慶長十八年十二月五日示寂（『浮木集』卷十二）。高源寺には彼が書いた「一問之次第」（慶長七年正月十五日〔同十二年十二月八日を訂正〕）【D5】という嗣法試験（？）の問題文一通が残されている。三伯が高源寺に住山したというよりは、関東幻住派の人間が後世持ち来ったと考えるのが妥当か。

さて、元龜三年住山の濟蔭玄宏の跡を継いで高源寺に住したのは、

『高源寺住持籍』によれば願仲碩養である（願仲は湖心碩鼎の法嗣）。天正六年（一五七八）六月二十七日付け法衣由来書【軸別3①】に「前當山願仲桮納碩養」と書いてあるので、この天正六年以前に高源寺を退院していることは間違いない。高源寺には現在その親書による宗派図【軸ウ15】が残されている。これは他の宗派図とほとんど変わらないが、豊臣秀吉政権の領袖西笑承兌が「西笑碩兌」として見えている点、やや珍しいと言えようか。

\*西笑承兌は願仲碩養の法嗣。夢窓派慈濟門派（空谷明応の法系）の法も兼受。現在のところ、西笑承兌に関しては北島万次氏の研究〔北島一九九〇〕がもつとも詳細であるが、法系が幻住派に属することにはまったく触れられていない。このことは実は秀吉の中国・九州地方平定や朝鮮侵略の経営に多大な影響を与えたと思われ、詳細は別途の機会に検討したい。

そしてこの後には才隣碩茂（天正年間―「高源寺略縁起」）、そして悦叔最宗と、願仲の法嗣が続く（才隣が願仲の法嗣であることは『浮木集』卷十二参照）。悦叔の住山を裏付けるのが次の繪旨案である。

【繪旨12】慶長四年（一五九九）六月十二日付け後陽成天皇繪旨案

（包紙上巻）  
「悦叔和尚 写」

高源寺住持職之事、

所有 勅請也、宜奉祈

佛法興隆寶祚長久之

状者、依

天氣執達如件、

慶長四年六月十二日 右少辨判

悦叔和尚禅室

やや遅れて、悦叔の次の住持とされる超外碩傳（耳峰玄熊の法嗣）に対する論旨（論旨案）が続く。

【論旨18】慶長十一年（一六〇六）八月二十三日付け後陽成天皇論旨案

高源寺住持職事、

應 勅請、宜奉祈

國家安全 寶

祚長久者、

天氣如此、仍執達如件、

慶長十一年八月廿三日 右少辨判

超外和尚禅室

前者【論旨12】の奉者の右少弁は藏人の広橋資遠。後者【論旨18】のそれは五位藏人の中御門宣衡。ただし肝腎の宛所の悦叔・超外の経歴については詳細が不明である。また、【論旨12・論旨18】は前述の通り【論旨2】と一緒に包紙【論旨33①】に包まれていたもので、寺外から持ち込まれた案文（写）のまとまりと考えられる。そして、この【論旨12・論旨18】（案文）の正文が、他ならぬ九州幻住派最後の拠点・肥前（肥前佐賀水上派の八幡高寺・泰陽院）に存する（「高源寺住持籍」、という点も重要である。何となれば、この耳峰法系の超外を最後にして、博多幻住派の禅僧が丹波高源寺に住した徴証は見られなくなってしまうからだ。江戸時代初頭には、博多幻住派の拠点・聖福寺が藩主黒田氏の挺入れのもと妙心寺派に転派し、幻住派の勢力が急速に弱まっていく（斎藤一九九八12〜14頁参看）。肥前幻住派（耳峰派）を最後に、博多幻住派僧が総本山・高源寺を盛り立てていく時代は明確に終わりを告げたのである。

#### ⑦小括——戦国期高源寺歴代住持復元試案

以上、ほぼ時代順に高源寺所藏の中世（戦国期）史料を紹介し、高源寺住持の復元や寺史のデッサンに努めてきた。また、本文との重複を厭わず、重要な住持に関しては注記の形で小伝を付しておいた。今後の高源寺史（禅宗史）、博多・対外関係史研究の踏み台となれば幸いである。

なお、以上の分析のほか、渡邊雄二氏の注目した希周玄巨（湖心碩傳の法嗣）が天正二年六月頃、茂林鼎諫（湖心碩傳の法嗣。聖福寺塔頭興徳庵主——『嘯岳録』）が元龜二年八月頃、それぞれ高源寺に住したことが、仁恕集堯の「鏤氷集」により窺い知られる（渡邊一九九五38〜39頁参照）。いずれも『高源寺住持籍』には見えない住持である。今後も、こうした情報収集に努めていかねばならないが、とりあえず現段階で推測される中世段階の歴代住持について、まとめておくことにしよう（一華碩由以下のみ示した。＊は順序が不明なもの）。

一華碩由（『住持籍』）

禮仲碩耕（『住持籍』）

知傳碩精（永正14〜15——軸別1①②）

湖心碩鼎（永正16〜17——『頤賢録』）

江月碩満（『住持籍』）

厦仲明桂（『住持籍』）

玉淵碩珠（『住持籍』）

器川碩瓊（天文20頃——『頤賢録』）

棟宗明柱（『頤賢録』）

日甫碩熙（『頤賢録』）

＊

＊

＊

(龍甫玄幕—「願賢録」)

燈室鼎挑 (永禄4・5頃—「願賢録」) \*

駿岳碩甫 (永禄5以前—「願賢録」) \*

嘯岳鼎虎 (永禄5—「洞春寺文書」) (初住) \*

嘯岳鼎虎 (永禄8—「洞春寺文書」) (再住) \*

耳峰玄熊 (永禄11—「繪旨17」)

嘯岳鼎虎 (元龜1—「繪旨2」) (三住)

茂林鼎猷 (元龜2—「鏤水集」)

濟蔭玄宏 (元龜3—「繪旨1」)

希周玄旦 (天正2—「鏤水集」)

頤仲碩養 (天正6以前—「軸別3①」)

才隣碩茂 (天正年間—「略縁起」)

悦叔最宗 (慶長2—「繪旨12」)

超外碩傳 (慶長11—「繪旨18」)

#### 四 高源寺の近世・近代史料の部類別概観

本章では、近世・近代文書を中心に、特徴ある史料群の部類別紹介を試みたい。以下、①繪旨類、②参内記録類、③帳簿類、④墨蹟類、⑤經典・版本類、と分類して見ていく。

##### ①繪旨類

近世中期以降になると、ふたたび繪旨が見え始めるようになる。このこと自体検討に値する課題だが、今はその余力がなく、年代順に紹介するにとどめたい。

【繪旨7】享保二十年(一七三五)五月二十七日桜町天皇繪旨(繪旨8)

桐洲和尚禪室 左中弁光綱

高源寺住持職之事、所有

勅請也、殊着紫衣令參 内、

宜奉祈國家安全 寶祚

長久者、

天氣如此、悉之以狀、

享保二十年十二月廿七日 左中辨(花押)

桐洲和尚禪室

【繪旨4】延享元年(一七四四)八月二日桜町天皇繪旨(繪旨3)

桜町天皇繪旨案

笑巖和尚禪室 左中將基望

高源寺住持職事、所有

勅請也、殊着紫衣令參 内、

宜奉祈國家安全 寶祚

長久者、

天氣如此、悉之以狀、

延享元年八月二日 左中將(花押)

笑巖和尚禪室

【繪旨15】寛延三年(一七五〇)二月十八日桃園天皇繪旨案(正文)

見えず

一鐵門和尚禪室 權右少辨資望

高源寺住持職事、

應 勅請宜奉祈

國家安全 寶祚長久

者、

天氣如此、仍執達如件、

寬延三年二月十八日 權右小辨判

鐵門和尚禪室

【繪旨11】 宝曆七年（一七五七）十二月六日桃園天皇繪旨案（正文）

（包紙上書） 見えず

〔高源寺住持鐵門和尚禪室 右中辨資枝〕

着紫衣令參 内、宜

奉祈 國家安全

寶祚長久者、

天氣如此、仍執達如件、

寶曆七年十二月六日 右中辨判

高源寺住持鐵門和尚禪室

【繪旨13】 天明元年（一七八二）十二月四日光格天皇繪旨案（正文）

（包紙上書） 見えず

〔卓堂和尚禪室 右大辨篤長〕

高源寺住持職事、所有

勅請也、殊着紫衣令參 内

宜奉祈國家安全 寶祚

長久者、

天氣如此悉之、以狀、

天明元年十二月四日右大辨（花押）

卓堂和尚禪室

【繪旨14】 天明七年（一七八七）正月二十三日光格天皇繪旨

（封紙上書） 〔眞乘和尚禪室 權右中辨胤定〕

高源寺住持職之事、所有

勅請也、殊着紫衣令參

内、宜奉祈國家安全 寶祚

長久者、依

天氣執達如件、

天明七年正月廿三日 權右中辨（花押）

眞乘和尚禪室

【軸別2】 文化四年（一八〇七）五月二十一日光格天皇繪旨案

高源寺住持職所有

勅請也、殊着紫衣令

參 内、宜奉祈國家安全

寶祚長久者、

天氣如此、仍執達如件、

文化四年五月廿一日 右中辨御判

弘嚴和尚禪室

\*包紙の写しが【冊12】『弘嚴和尚參内記録全』のなかにある（文化

四年八月朔条）。「上包」『弘嚴和尚禪室 右中辨明光』。またその横

に「右者天葵柳原殿に被下之 御繪旨之写也」などともある。

【繪旨5】 天保十一年（一八四〇）十一月十八日仁孝天皇繪旨（繪

旨6）仁孝天皇繪旨案）

（封紙上書） 〔濟洲和尚禪室 右小辨資宗〕

高源寺住持職事、所有

勅請也、殊着紫衣令參 内、

宜奉祈國家安全 寶祚



長久者、

天氣如此、仍執達如件、

天保十一年十一月十八日 右少辨(花押)

濟洲和尚禪室

【綸旨9】慶応三年(一八六七)三月十五日明治天皇綸旨(綸旨

10) 明治天皇綸旨案)

(封紙上書)

【靈溪和尚禪室 權右中辨資生】

高源寺住持職事、所有

勅請也、殊着紫衣令參 内

宜奉祈國家安全 寶祚

長久者、

天氣如此、仍執達如件、

慶應三年三月十五日 權右中辨(花押)

靈溪和尚禪室

## ② 参内記録類

すでに本稿で何度も触れているように、高源寺は紫衣参内の資格を持つ寺院である。したがって、住持ないし住持代はことあるごとに参内し、紫衣の資格を再確認していくことが求められた。高源寺では、幾度かに互る住持参内の記録を控えている。まだ内容に就いては検討を経ていないため、さしあたり年代順に列挙して今後の研究に備えた

【A6】 桐洲和尚参内記。享保二十年(一七三五)頃か。住持桐洲明潮。

【E23】 鐵門大和尚参内扣。宝曆七年(一七五七)か。住持鐵門明

柱。

【E9】 卓堂大和尚紫衣参内勅許日記。天明元年(一七八二)八月。住持卓堂玄橋。

【E7】 泰清卓堂大和尚参内扣。天明二年(一七八二)九月。天明の大飢饉を受けての参内だったのだろう。

【E8】 眞乘和尚紫衣参内雜記。天明六年(一七八六)十一月。住持眞乘祖章。これも凶作・飢饉が契機であったか。

【冊12】 弘巖和尚参内記録。文化四年(一八〇七)。住持弘巖玄猊。

【冊8】 京師参殿柏原披露。文政九年(一八二六)。住持代中道座元。

【冊3】 皇都柏原披露諸般記録。天保三年(一八三二)九月。住持代濟州玄橋。

【E17・E18】 参内諸般日記・参内記録。天保十一年九月。住持濟州玄橋。

【冊2】 仙洞御所崩御記録。天保十一年(一八四〇)十一月。住持濟州玄橋。光格天皇没に伴ってのもの。

【冊5】 禁裏御所崩御雜記。弘化三年(一八四六)三月。住持代濟州玄橋。仁孝天皇死去に伴ってのもの。

なお、【冊1】伏見宮様御館入之記録(文化六年=一八〇九)は、直接的な朝廷との折衝ではないが、伏見宮家に紫衣参内勅許の件で伺いを立てにいったときのものらしい。また【A12】(延享二年(一七四五)十月)も高源寺への紫衣綸旨の許可に関わる口上書(申請書)である。そして、記録は残っていないようだが、慶応三年(一八六七)三月には普山義門が(おそらく法類惣代として)参内していた【C63】(参看)。前年末の孝明天皇死去を受けてのものだろう。

### ③帳簿類

高源寺ないし幻住派に大きな貢献をした住持の年忌は重要な儀式である。このうち、少なくとも江戸時代には、法祖中峰明本四五〇年忌(宝暦八年(一七五八))、開山遠溪祖雄四〇〇年忌(寛保三年(一七四三))・四五〇年忌(寛政五年(一七九三))・高峰録会・五〇〇年忌(天保十四年(一八四三))・禅関策進会)・弘巖玄猊三十三回忌(安政三年(一八五二))・禅関策進会、荆叢毒藥会(文化二年(一八〇五))・鐵門明柱三十三回忌か)が営まれていたことが判明する。それぞれの関連史料についてまとめておき、後日の検討に便ならしめたい(法会の年代順に並べる)。

○法祖普応国師(中峰明本)四五〇年忌(宝暦八年(一七五八))

【E 3・E 22・E 26①・H 32】

○開山遠溪祖雄四〇〇年忌(寛保三年(一七四三))

【E 27・H 31】

○開山遠溪祖雄四五〇年忌(寛政五年(一七九三))・高峰録会

【B 10・C 79・E 25・E 26②・E 39・E 40】

○荆叢毒藥会(文化二年(一八〇五))・鐵門明柱三十三回忌か)

【B 4・B 7・B 8・E 1】

○法祖普応国師五〇〇年忌(文化五年(一八〇八))か)

【D 4】

○開山遠溪祖雄五〇〇年忌(天保十四年(一八四三))・禅関策進会

【冊 4・B 1・B 3・D 3・H 30】

○弘巖玄猊三十三回忌(安政三年(一八五二))・禅関策進会

【C 55・C 56・C 59・E 6・E 19・H 35①④】

### ④墨蹟類

江戸時代の高源寺歴代住持が認めた墨蹟・遺偈・法語類が多数存在する。なかでも中興十四世・古心庵主弘巖玄猊のものが多くようである(軸イ3)・遺偈)。このほか、【軸シ3】龍派禅珠(伝法十四世)詩序、【軸エ13】天巖明啓遺偈・【軸N9】同墨蹟、【軸床7・軸床8】魯山玄瑤墨蹟・【軸N12】同法語、【軸エ7】眞乘祖章遺偈などが挙げられる。寺外・門派外の関係者も少なからず存在するようであるが、いまは詳らかにしえない。

### ⑤經典・版本類

高源寺の経蔵に高麗版經典が六冊ほどあることは第一章で述べた通りだが(『妙法蓮華経』【経蔵 6―7―6・7・12、6―9―24、6―10―1・5】)、ここでは最初に、朝鮮から輸入されたと思しい經典に注目してみよう。十五世紀中葉に朝鮮で書写されたと考えられるものが次である。

【冊22】『金剛般若波羅蜜経』―奥書

迦文古皇通序入道階漸使先以戒律弘範三界次

以慧解破執頭空後以行願成就威儀蓋今寫成梵

網戒經金剛般若普賢行品之所譚是已叔世學者正

身修心超凡入聖之蹊徑無越乎此也且原其成經之

意則欲憑圓頓教之功能於以奉祝

主上殿下

聖壽萬安

恭妃殿下壺福無虧

世子邸下寶體康寧朝壘和平農桑豐足兼及己

身戒根益固道芽彌長福慧增修身心適悅捨此  
報己親承佛光一念頓超九品華臺聞法悟道還

入娑婆度盡有緣凡諸見聞隨喜聞此愿主一々如意  
者乎歲宣德青龍四月下澣住開慶禪寺沙門釋 卍雨 謹跋

施主三韓國大夫入淨業院住持沈 氏 妙圓

同願朴 氏 妙圓

同願黃 氏 實生

宣德青龍（元年（一四二六）か）四月下旬に『金剛般若波羅蜜經』

を開慶禪寺の釋卍雨が書写・跋し、沈・朴・黃三氏によつて同寺に奉納されたものと考えられる。とくに施主の筆頭淨業院主沈氏妙圓は「三韓國大夫」と名乗っており、この願文が玉体安穩・国家平安・五穀豊穰を祈っていることから、相当官位の高い貴族の出身なのであろう。

さて、これがどのようにして日本に輸入されたのかは分からないが、高源寺に入った経緯自体は、この經典を入れた箱蓋裏書きに示されている。すなわち、「寄進 毛利家／高源寺什物」とあるように、毛利氏から寄附されたものである。おそらく、洞春寺開山嘯岳鼎虎以来の毛利氏との結びつきに則つて寄進されたものなのだろうが、あいにく年代が分からない。今後の検討を俟ちたい。

次に、弘治十二年（一四九九）朝鮮半島で開版されたものの、国内再版本も高源寺経藏に存在するので紹介しよう。

【経藏6—8—11】『禪宗永嘉集』（下巻）卷末刊記

願我以此刊經功德。奉為

主上殿下壽滿歲。佛日增輝。法輪常轉。先亡父母。及

法界有情。同生淨刹念。

弘治十二年己未十月日慶尚道陝川土石水庵開版

大幹 善灯谷和尚 曹得尚兩主 妙菴刀

法聰 智融 金徳仁兩主 岡湛刀

ヨ梅 岡珠 姜守山兩主 胤禎刀

中徳 惠通 竹衍 金順行兩主 鍊板祖一

寛珠 尚聰 鄭貴山兩主 供養主 玉連

性嘗 義山 郭牛未致兩主

戒宋 戒云 朴中同兩主

処林 行修 姜銀孫兩主 大施主 敬心

李隠 牧牛 大化主 李了

また、朝鮮本ではないが、版本の【経藏1—3—13】『周易経傳』（第十九—二十一卷）裏表紙見返しには、文之玄昌の直筆追記が書き込まれている。ここで紹介しておこう。

文祿癸巳之春。予偶行於一輔。遇自朝鮮而來帰者之齋持経史。

（経史）々々紛失而無全一部者。其中有周易傳義□□三冊。予求之。至

於他邦。又求三冊。猶未足者。令人写之。尔研朱点之。焚香誦之。

恒□□窮七年矣。且復忘其膚淺。妄一加倭点。吁我不才。未得

於辞。況於通意乎。所謂蚍蜉撼樹。精衛填海之比。而多見其不知

量也。後人与我同志者。一校之正之幸也。慶長四年己亥春二月

吉辰。此時在城州伏見島津氏邸第畢功矣。隅州正興文之玄昌書

之。

文祿癸巳は二年、一五九三年。ときに朝鮮出兵で掠奪してきた朝鮮本・漢籍のマーケットが出来ていたのだろう。あるいは国内市場で入手したもの、あるいは人に筆書させたものも含めて図書を蒐集し、文

之玄昌は訓点を施す作業を重ねた。この『周易経傳』もその類の一つだったのか、確かに訓点や付箋の書き込みがなされている。また右によれば、こうした一連の作業は慶長四年（一五九九）二月まで山城伏見の島津氏邸で行なわれたという。ただ、何故にこうした本が高源寺に入ったのか、肝腎なところは分からない。

## 五 今後の課題

以上、本調査の中心的な問題関心に即して、中世文書を中心に、高源寺所蔵史料の解説を行なってきた。そしてあわせて、中世の高源寺・幻住派禅僧の考察を試みた。高源寺そのものの歴史を知るためには、近世・近代期の豊富な年貢・法会・寺領関係史料をもとに、佐治地域における高源寺の実態を分析する方が望ましかったのかもしれない。しかしながら、中世史料の残り具合と、何よりも筆者自身の力不足により、ほとんど歴代住持の研究になってしまった。深くお詫びしたい。したがって、当然のことながら本解説もあくまで高源寺文書に対する一つのアプローチに過ぎないのであり、今後、近世・近代史料を検討するなかで、遡及的に中世の高源寺像も明らかにしうるのではないだろうか。こうした反省から、高源寺文書に関する今後の課題を幾つか示しておけば、以下のようになる。

第一に、朝廷との関係に関する研究。高源寺には前述の通り、十点以上の詳細な「参代記」が存在するが、学界で知られていなかったために、まったく手着かずのままである。近年、斎藤夏来氏の問題提起〔斎藤一九九七・一九九八〕によって、いわゆる紫衣事件の見直しが進められている。この高源寺所蔵「参内記」も、間接的ではあれ、そ

うした「政教問題」に関わってくる可能性が高い。また、参内や住山をめぐる折衝のなかに柏原藩織田氏に関わってくる点も注目される（傳奏柳原氏が仲介として存在）。近世期の宗教や国制を考える上で、一つの有効な研究材料を提供してくれるだろう〔なお柏原藩織田氏については田村一九九八参照〕。

第二に、末寺・塔頭の研究。高源寺のごく近辺の法類として、光明禅寺（旧高源寺塔頭・現廃寺）や長安寺があったことは現任職の御教示により知りえたが、関東・東北や九州、中国地方との関係も広く存在した（近世段階の開山忌などでは関東・東北・九州・中国地方の各関係寺院からの寄付金が相当量集まっている）。明確な本末関係はなかったかもしれないが、戦国期以降の幻住派ネットワークを知るためにも、こうした寺院・塔頭を確認し位置づけていくことは必要不可欠である。

第三に、中世幻住派の特徴の一つでもある「密参」（参禅）の実態や、近世段階における「密参」行為の否定の意味など、主として宗教史的な問題。こうした問題は筆者の能力では到底フォローし切れないし、またその関連の史料も高源寺には存在しなかったため、今回の考察からは割愛した。ただ、玉村竹二氏も指摘するように、時代が下れば下るほど伝法儀礼が重視されるようになり、「密参録」の類が減るようである〔玉村一九七九頁〕。本稿で度々参照した駒澤大学図書館所蔵『浮木集』も、伝灯関係の儀式書としての性格が色濃い（なお足利学校図書館所蔵『浮木集』は筆者未見のため不詳）。いずれにしても、「密参」行為の性格そのものの変化を辿ることは、中近世仏教社会史研究に寄与し得る有効な課題と言えるのではないかと。

第四に、高源寺所蔵史料の保存の問題。高源寺は、地下水位の高い

山の谷間に位置するような立地条件にあるため、湿気による史料の損傷が甚だしく、石化して開けない冊子物が相当数存在した。とくに第一点で挙げた、朝廷との関係を垣間見られる参内記録類にそれが多いのは残念なことである。現在、当寺では限られた予算のなかで史料の修補を行なうなど、出来る限りのことはしている。だが、絶対量の多さゆえ、なかなか進捗しないのが現状である。こうした状況は貴重な史料群の保存にあたってまことに遺憾な事態であり、是非とも地方自治体ないし国による早急な援助・処置が必要と思われる。また、高源寺所蔵文書がそれに足るだけの貴重な史料群であることも最後に強調して、この拙い解説を終えることとしたい。

#### 引用・参考文献

家永道綱「將軍権力と大名との関係を見る視点」『歴史評論』五七二号、一九七七年

伊藤幸司「大内氏の対外交流と筑前博多聖福寺」『仏教史学研究』三九卷一号、一九九七年

「中世後期地域権力の対外交渉と禅宗門派」『古文書研究』四八号、一九九八年

今枝愛眞「禅宗の歴史」至文堂歴史新書、一九六二年

「中世禅宗史の研究」東京大学出版会、一九七〇年

今谷明「室町幕府解体過程の研究」岩波書店、一九八五年

「守護領国支配機構の研究」法政大学出版局、一九八六年

今谷明・高橋康夫共編「室町幕府文書集成 奉行人奉書篇」(上・下) 思文閣

出版、一九八六年

上島有「寺宝としての東寺文書の伝来」京都府立総合資料館編『東寺百合

文書にみる日本の中世』京都新聞社、一九九八年

上田純一「鎌倉・南北朝期における筑前博多聖福寺」『九州史学』七九号、一九八四年

長 正統「景轍玄蘇について」『朝鮮学報』二九輯、一九六三年

川添昭二「南北朝期博多文化の展開と対外関係」平成元年度科研究費研究成果報告書(総合研究A―課題番号六三〇一〇四六)『地域における国際化の歴史の展開に関する総合研究―九州地域における―』九州大学文学部、一九九〇年

北島万次「朝鮮侵略と禅林僧」『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』校倉書房、一九九〇年

小葉田淳「中世日支通交貿易史の研究」刀江書院、一九六九年

小島文鼎(編)『聖福寺史』聖福寺史刊行会(復刻版)、一九六四年

斎藤夏来「五山十刹制度末期の大徳寺」『史学雑誌』一〇六編七号、一九九七年

「江戸幕府成立期の政教関係と紫衣事件」『歴史学研究』七一五号、一九九八年

佐伯弘次「中世博多の火災と焼土層」『法哈嚙』三号、一九九四年

佐伯弘次・小林茂「文献および絵図・地図からみた房州堀」小林・磯・佐伯

・高倉編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会、一九九八年

田代和生「書き替えられた国書」中公新書、一九八三年

田中健夫「島井宗室」吉川弘文館、一九六一年

「島井宗室と景轍玄蘇」『対外関係と文化交流』思文閣出版、一九八

二年

「東アジア通交圏と国際認識」吉川弘文館、一九九七年

棚橋光男「書斎史」と「情報ネットワーク史」『古代と中世のはざま』北

國新聞社、一九九七年

玉村竹二「臨濟宗幻住派」『日本禅宗史論集』(下之二) 思文閣出版、一九七

九年

『五山禅僧伝記集成』講談社、一九八三年

『五山禅林宗派図』思文閣出版、一九八五年

田村英恵「織田信長像をめぐる儀礼」黒田日出男編『肖像画を読む』角川書

店、一九九八年

富田正弘「口宣・口宣案の成立と変遷」①・②『古文書研究』一四・一五号、

一九七九・一九八〇年

『戦国期の公家衆』『立命館文学』五〇九号、一九八八年

西尾賢隆「元朝における中峰明本とその道俗」『禅学研究』六四号、一九八五

年

『元の幻住明本とその海東への波紋』『日本歴史』四六一号、一九八

六年

『中峰明本と笑隠大訥』『人生と宗教—西村恵信教授還暦記念文集』、

一九九三年

『幻住明本と日元の居士』『小田義久博士還暦記念東洋史論集』、一

九九五年

西岡芳文「日本中世の〈情報〉と〈知識〉」『歴史学研究』七一六号、一九九

八年

橋本 雄「報告要旨／中世日朝関係史の再検討」『朝鮮史研究会会報』一二五

号、一九九六年

『中世日朝関係における王城大臣使の偽使問題』『史学雑誌』一〇六

編二号、一九九七年

『室町・戦国期の將軍権力と外交権』『歴史学研究』七〇八号、一九

九八年

東島 誠「前近代京都における公共負担構造の転換」『歴史学研究』六四九号、

一九九三年

廣渡政利(編)『博多承天寺史補遺』文献出版、一九九〇年

星 清「中世禅思想の研究① 幻住派禅思想」八千代出版、一九八八年

堀本一繁「戦国期博多の防衛施設について」『福岡市博物館・研究紀要』七号、

一九九七年

牧田諦亮「策彦入明記の研究」(上・下) 法蔵館、一九五五・五九年

宮本雅明「中世後期博多聖福寺境内の都市空間構成」前掲『福岡平野の古環

境と遺跡立地』、一九九八年

村井章介「中世倭人伝」岩波新書、一九九三年

『中世日朝交渉のなかの漢詩』『東アジア往還—漢詩と外交』朝日新

聞社、一九九五年

『海から見た戦国日本—列島史から世界史へ—ちくま新書、一九九

七年

山口隼正「入寺語録の構造のなかの漢詩」『東京大学史料編纂所研究紀要』八

号、一九九八年 a

『博多禅院入寺関係未刊史料』『九州史学』一二二号、一九九八年 b

吉田伸之・渡辺尚志(編)『近世房総地域史研究』東京大学出版会、一九九三

年

米谷 均「中世後期、日本人朝鮮渡海僧の記録類について」『青丘学術論集』

一二集、一九九八年 a

『史料紹介／東大史料編纂所架蔵『日本関係朝鮮史料』』『古文書研

究』四八号、一九九八年 b

米原正義『戦国武士と文芸の研究』桜楓社、一九七六年

渡邊雄二「館蔵 曲直瀬玄朔像について」『福岡市博物館・研究紀要』四号、

一九九四年

——「乳峰寺・駿岳碩甫像について」『福岡市博物館・研究紀要』五号、

一九九五年

〔付記〕本稿は、一九九八年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。また、本稿で引用した諸史料のうち高源寺文書以外の史料は、とくに注記したもの以外すべて東京大学史料編纂所架蔵のものである。なお、博多に関する検討について佐伯弘次氏、『頤賢録』・経蔵本の分析に関して米谷均氏、史料目録の作成に関して木村直樹氏、巡検のリポートを寄せて下さった細川武稔氏、そして本稿全般に互り村井章介氏・菊地大樹氏の御教示・御協力を得た。

〔調査参加者一覽〕（敬称略）

一九九五年度——村井章介・菊地大樹・米谷均・朴澤直秀・木村直樹・橋本雄・増山秀樹・川勝守生・伊川健二・佐藤正之・細川武稔（11名）

一九九六年度——村井章介・菊地大樹・田中克行（故人）・米谷均・朴澤直秀・木村直樹・橋本雄・伊川健二・稲田奈津子・榎本渉・川本慎自・永原健彦（12名）

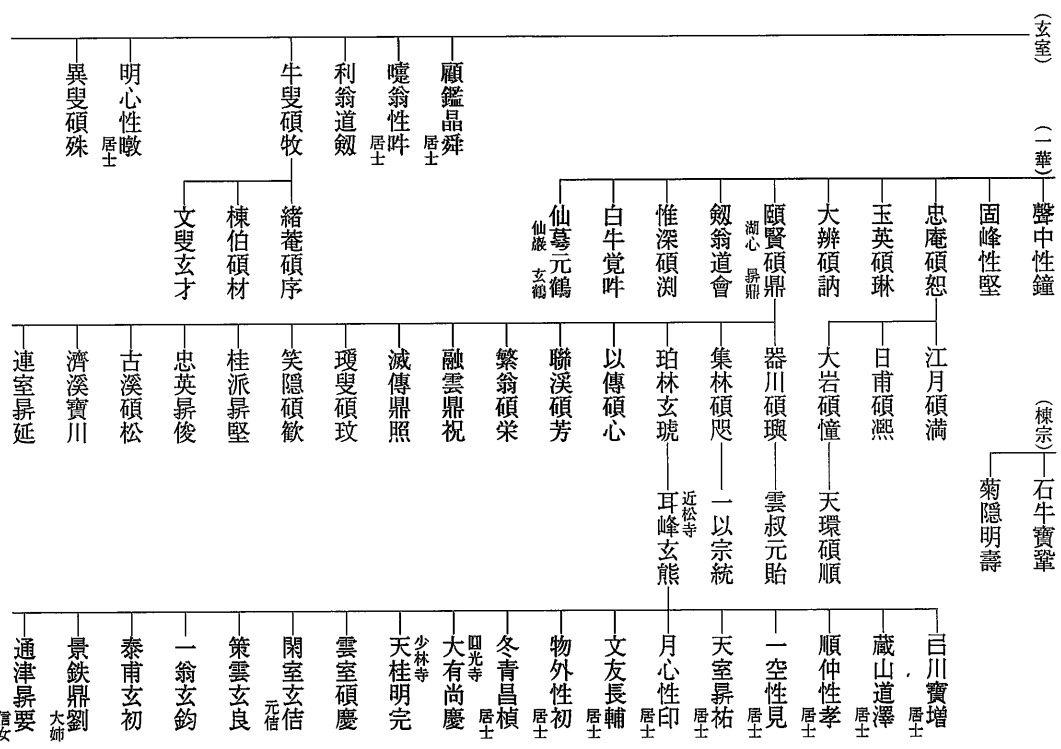
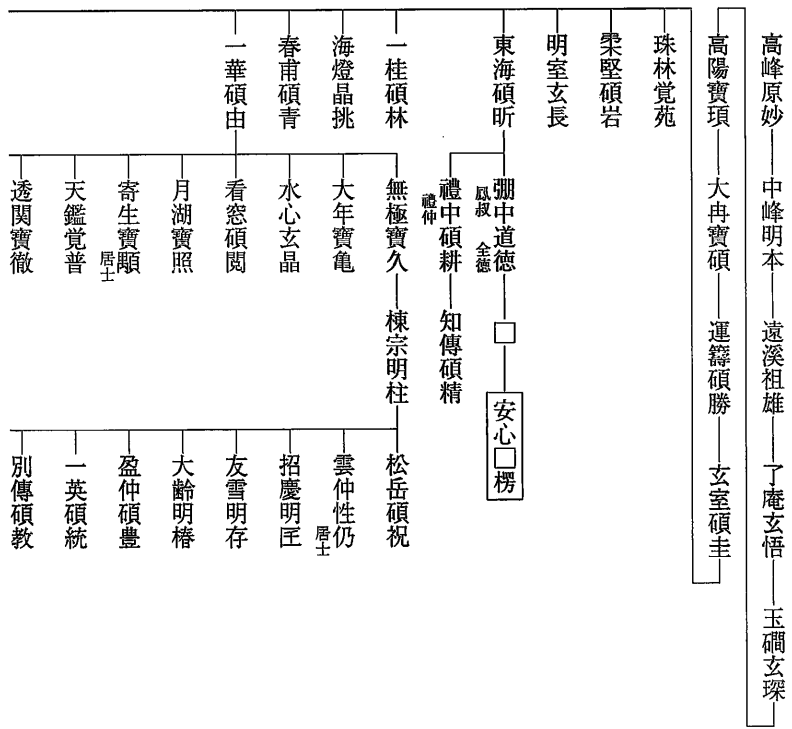
一九九七年度——村井章介・米谷均・朴澤直秀・橋本雄・有馬香織・伊川健二・細川武稔・榎本渉・伊藤剛・上村尚子・佐々木（西田）友広・申美那・澤博勝・山口佳代子（14名）

〔追記〕足掛け三年に亙る本調査に関わった方々のなかで、現任職山本祖登師の御令室知子氏、ならびに二年度目参加の田中克行氏が

他界された。御令室には調査中に多大な便宜を図っていただいただけでなく、終始温かい励ましをいただいた。誰よりも高源寺を深く愛しておられただけに、この僅かな研究成果さえ御覧に入れることができなかつた我々の牛歩が悔やまれる。また田中氏は史料編纂所に入所して間もない気鋭の研究者であり、史料採訪に当たり親しく御指導を仰いだのも記憶に新しい。このような形で御名前を挙げなければならぬのは痛恨の極みだが、今はただ調査参加者一同とともに御二方の御冥福をお祈りしたい。そして、貧しいながらも本報告を霊前に捧げさせていただきます。最後に、奥様の御看病などで多忙な時期にこうした調査を御許し下さった御住職に、衷心より御礼とお悔みの詞を申し上げます。

【幻住派法系図】

\*本法系図は【軸N5】湖心・耳峰製宗派図をほぼそっくり載せたものである。本論に関わる限りで□に人名を補ったが、湖心・耳峰から見た幻住派の広がりというものを、ぜひ感じ取っていただきたい。なお玉村竹二氏作成の法系図〔玉村85二一六～二二二頁〕も参照のこと。







〔史料現狀調査目録〕

高源寺文書 繪旨

番号	文書名	年代・日付	形・数	平装	法量縦	法量横	料紙	差出	宛先	備考
繪旨 1	正親町天皇繪旨	元龜三年十一月二十三日	豎紙 1	正文	三一・九	四三・五	宿紙	右中將(花押)	玄宏和尚禪師	
繪旨 2	正親町天皇繪旨案	元龜元年八月二十九日	豎紙 1	案文	三三・〇	四〇・八	楮紙	權右中將	嘯岳大和尚禪室	借銭関係の付箋混入
繪旨 3	桜町天皇繪旨案	延享元年八月二日	豎紙 1	案文	三三・七	四六・五	楮紙	左中將判	笑庵和尚禪室	包紙上書「笑庵和尚禪室 左中將基望」
繪旨 4	桜町天皇繪旨	延享元年八月二日	豎紙 2	正文	三三・二	五〇・八	宿紙	左中將(花押)	笑庵和尚	繪旨3の正文。封紙あり(同文)。礼紙なし
繪旨 5	仁孝天皇繪旨	天保十一年十一月十八日	豎紙 3	正文	三三・五	五一・四	宿紙	右少辨(花押)	濟州和尚禪室	封紙上書「濟州和尚禪室 右少辨資宗。付箋「天保十一年/繪旨老通高源寺出品」。礼紙あり
繪旨 6	仁孝天皇繪旨案	天保十一年十一月十八日	豎紙 2	案文	三六・三	四九・三	楮紙	右少辨判	濟州禪師禪室	包紙上書「濟州和尚禪室 右少辨資宗。繪旨5の案文。礼紙なし
繪旨 7	桜町天皇繪旨	享保二十年十二月二十七日	豎紙 3	正文	三四・〇	五二・〇	宿紙	左中辨(花押)	桐洲和尚禪室	封紙「桐洲和尚禪室 左中辨光綱」。礼紙あり
繪旨 8	桜町天皇繪旨案	享保二十年十二月二十七日	豎紙 2	案文	三三・〇	四五・一	楮紙	左中辨判	桐洲和尚禪室	繪旨7の案文。包紙あり(同文)。礼紙なし
繪旨 9	明治天皇繪旨	慶応三年三月十五日	豎紙 2	正文	三三・八	五一・一	宿紙	權右中辨(花押)	靈溪和尚禪室	封紙上書「靈溪和尚禪室 權右中辨資生」。礼紙なし
繪旨 10	明治天皇繪旨案	慶応三年三月十五日	豎紙 2	案文	三六・〇	四九・二	楮紙	權右中辨判	靈溪和尚禪室	繪旨9の案文。包紙あり(同文)。礼紙なし
繪旨 11	桃園天皇繪旨案	宝曆七年十二月六日	豎紙 2	案文	三三・七	四五・五	宿紙	右中辨判	高源寺住持鐵門和尚禪室	包紙上書「高源寺住持鐵門和尚禪室 右中將資枝」。礼紙なし
繪旨 12	後陽成天皇繪旨案	慶長四年六月十二日	豎紙 2	案文	三一・四	四九・〇	楮紙	右少辨判	悦叔和尚禪室	包紙上書「悦叔和尚 案文」。礼紙なし
繪旨 13	光格天皇繪旨案	天明元年十二月四日	豎紙 2	案文	三三・〇	四八・六	楮紙	右中辨(花押)	卓堂和尚禪室	包紙上書「卓堂和尚禪室 右中弁篤長。付箋「天明元年/繪旨老通高源寺出品(印)」。礼紙なし
繪旨 14	光格天皇繪旨	天明七年正月二十三日	豎紙 3	正文	三四・一	五二・三	宿紙	權右中辨(花押)	眞乘和尚禪室	包紙上書「眞乘和尚禪室 權右中辨胤定」。礼紙あり
繪旨 15	桃園天皇繪旨案	寛延三年二月十八日	豎紙 2	案文	三四・二	四七・〇	楮紙	權右少辨判	鐵門和尚禪室	包紙上書「鐵門和尚禪室 權右少弁資望」。礼紙なし

繪旨33①	繪旨32	繪旨31	繪旨30	繪旨29	繪旨28		繪旨27	繪旨26	繪旨25	繪旨24	繪旨23	繪旨22	繪旨21	繪旨20	繪旨19	繪旨18	繪旨17	繪旨16
繪旨写包紙「嘯岳大和尚 悦叔和尚 超外和尚／繪旨写三通」	包紙「高源寺大和尚奉」	礼紙	礼紙	礼紙	包紙「官旨 耳峰和尚」		繪旨目録	繪旨写目録	宿紙	包紙「御支干奉」	當今誕生支干通知	受戒方式書	中峰国師偈寄附状	山岡朝負書状	奉願口上之覚	後陽成天皇繪旨案	(基本奉書)案	礼紙
					江戸時代		江戸時代	江戸時代		同上か	寛正五年八月十五日午時	江戸時代か	文政十年六月日	文政十二年閏六月日	延享五年六月二十八日	慶長十一年八月二十三日	永禄十一年六月二十七日	
豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙1		豎紙4	豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙1	豎紙2
案文					正文		正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	案文	
四六・五	四七・三	二七・五	二八・八	二七・七	四〇・八		二七・七	二七・八	四二・二	三八・一	三三・二	三九・八	二八・二	三五・二	三三・〇	二七・七	四三・八	三三・七
三三・二	二七・五	三八・四	四五・〇	三八・七	一三・八		三八・七	三八・六	三一・〇	三二・三	四一・九	五三・五	四〇・三	四〇・五	四五・〇	四一・六	二七・二	四八・五
楮紙	楮紙	楮紙	楮紙	楮紙	楮紙		楮紙	楮紙	宿紙	宿紙	宿紙	楮紙	楮紙	楮紙	楮紙	宿紙	楮紙	宿紙
											藏人左□□□		閑雲友石(朱印二顆)	□□殿家山岡□□(花押)	高源寺住持笑藏副司義山	右少辨判	(高源寺か)	
					耳峰和尚						高源寺□□□			高源寺御役者衆中郎左衛門	瀧久之丞・藪田六郎	超外和尚禪室	玄熊大和尚	
繪旨2・12・18の包紙	軸別1①の包紙か	紙か	朱印跡あり。軸別1①の包紙か		繪旨17の包紙(享保九年二月日作成)		後柏原・正親町・後陽成・後柏原(以上ママ)の代の繪旨官旨類の書上げ。封紙上書「繪旨目録 瑞巖山高源禪寺」。本紙は剝離して三枚になっている。	繪旨目録	嘯岳・濟蔭・悦叔・超外四人に対する	繪旨23の包紙か	改装・裏打あり			別紙あり。追而書あり		礼紙なし	28 下付?「奉」の上に朱印(印文は軸別1①と同じ)。礼紙なし。包紙は繪旨	

繪目33②	繪目写包紙		縦紙1	案文	三六・〇	一三・七	楮紙				上書「嘯岳大和尚禪室写」。裏書「本紙長門洞春寺有之。付箋「權右中将重通」
繪目34	包紙「高源寺住持上野介□□(時基か)」		縦紙1		四一・一	二四・〇	楮紙				軸別1③の軸装前の包紙か
繪目35	断簡「右小辨経遠」		縦紙1		一三・一	三・六	楮紙				繪目12の付箋か。経遠は甘露寺経遠
繪目36	繪目目錄		縦紙1	正文	三〇・七	四二・八	楮紙				

〔凡例〕 本表は「史料細胞現状記録」と一点ごとの調書をもとに作成した。

一、「文書名」は表題を最優先に取り、適宜、内容などから採取した。

二、「年代・日付」は表記の通りではなく、検索の便宜を図って元号+月日という形で示すようにした。以下の表も基本的に同様である。

三、「法量」の単位はcm(センチメートル)である。

四、「差出」「宛先」は史料の価値を損なわぬようにするため、表記の通りに取るようにした。

五、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は「( )」「(か)」で示した。

### 高源寺文書 軸物

番号	文書名	年代・日付	形状	正・案文	料紙	差出・位置・作成	備考
軸別1①	高源寺入院請疏(高源寺某奉書)	(永正十四年)閏十月二十七日	縦紙・卷子本	正文	楮紙	(「奉」字上朱印(印文不明))↓高源寺大和尚	軸別1①②③は同じ軸に装丁
軸別1②	後柏原天皇口宣案	永正十四年閏十月二十七日	縦紙・掛幅装	正文	宿紙	藏人左小辨藤原 奉	銘「上卿 小倉中納言」。端裏銘「口宣案」
軸別1③	室町幕府奉行人連署奉書	大永五年六月二十日	縦紙・掛幅装	正文	楮紙	上野介(斎藤時基)(花押)・雅楽助(斎藤基速)(花押)↓尊寺住持	
軸別2	光格天皇繪旨	文化四年五月二十一日	縦紙・掛幅装	案文	宿紙	右中辨御判↓弘慶和尚禪室	
軸別3①	高源寺前住願仲碩義法衣由来書	天正六年六月二十七日	縦紙・掛幅装	正文	絹本	幻住十一世前当山願仲塾納碩義(朱印二顆(鼎印)「願仲」方印「碩義」)	裏打紙「元禄十四年竜集辛巳八月十四日」 幻住十八世骨天澄明啓誌焉
軸別3②	同右写		縦紙・掛幅装	案文	楮紙		軸別3①の写
軸別4	妙法蓮華経 観世菩薩普門品 第二十五	寛政十二年十二月二日 奉納	卷子本	正文	楮紙	織田出雲守朝臣信憑奉納	奥書に朱印二顆あり

軸床 1	楓園	江戸時代前期	軸装	正文		狩野永叔主信画・近衛水照贊	箱入り(軸床1・2・3)。近衛水照は江戸時代前期の人
軸床 2	松藤園	江戸時代前期	軸装	正文		狩野永叔主信画・近衛基照贊	箱入り(軸床1・2・3)。近衛基照
軸床 3	桜園	江戸時代前期	軸装	正文		狩野永叔主信画・鷹司兼照贊	箱入り(軸床1・2・3)。鷹司兼照
軸床 4	前田直基寄附状	享保二年四月十九日	軸なし・状	正文		前田直基	箱入り。軸なし。便宜この表に収める
軸床 5	遠溪祖雄頂相	江戸時代中期	絹本	正文		十七転法孫明啓(天慶明啓)	箱入り
軸床 6	五色和歌	江戸時代前期	軸なし・帖	正文		青・九条輔実、黄・朝仁帝(東山天皇)、赤・松木□頭、白・中院通卿、黒・京極家仁	箱入り。軸なし。便宜この表に収める 東山天皇(一六七五〜一七〇九)
軸床 7	魯山和尚墨蹟		軸装	正文		魯山玄播	箱入り(軸床7・8)
軸床 8	魯山和尚墨蹟		軸装	正文		魯山玄播	箱入り(軸床7・8)

軸別 5	雪岩祖欽送行偈	鎌倉時代	裏打・元軸装	正文		雪岩叟(朱印二顆(冊印「雪岩」・方印「祖欽」)↓凝蔵主	雪岩祖欽(？)一(二八七)
軸別 6	後水尾院宸筆古歌色紙	江戸時代初期	掛幅装	正文	楮紙	後水尾院	箱書に「寛文十三年九月日」とあり 本紙が軸から剝離。後奈良院(一四九六〜一五五七)
軸別 7	後奈良院宸筆古歌色紙	戦国時代初期	掛幅装	正文	楮紙	後奈良院	
軸別 8①	後柏原院宸筆和歌短冊	戦国時代初頭	掛幅装	正文	色紙	勝仁(後柏原院)	後柏原院(一四六四〜一五二六)
軸別 8②	後奈良院直筆一幅寄進状	享保二年四月十一日	堅紙・掛幅装	正文	楮紙	前田民部藤原真基(印)↓中興高源禪 寺天岩大和尚	
軸別 9①	桜町院宸翰和歌色紙	江戸時代中期	堅紙・掛幅装	正文	楮紙	桜町院	桜町院(一二二〇〜一五〇〇)
軸別 9②	桜町院宸翰和歌色紙	江戸時代中期	堅紙・掛幅装	正文	檀紙	桜町院	箱蓋裏書「時文化六己巳期弥生上流/見弘 藏叟新添/寄附猪倉天外座元」(軸9①② 同箱)
軸別 10	後水尾院宸翰古歌色紙	寛文十二年三月日	堅紙・掛幅装	正文	楮紙	後水尾院	二重の箱あり。内箱「雪ふりて当今御宸翰 寛文十二年三月日。外箱蓋裏書「同 (寛文十二年)五月十一日持明院三位基時 御譲与給」蓋裏書「靈源院御宸翰/高源 寺常住/魯山玄播寄附」
軸別 11	後鳥羽院宸翰和歌切	鎌倉時代前期	改装・掛幅装	正文	楮紙	後鳥羽院	後鳥羽院(一一八〇〜一二三九)
軸別 12	高峰原妙一行書「積善堂」	鎌倉時代	改装・掛幅装	正文		高峰原妙	高峰原妙は中峰明本の師(遠溪の法祖父)
軸別 13	後円融院宸翰和歌切	南北朝時代後期	改装・掛幅装	正文		後円融院	箱蓋裏「于時文化十三丙子歲十月下旬 福知山紺屋町寄附人鍋屋庄兵衛(郷)・花 押」。後円融院(一三五八〜九三三)

軸イ1	地獄図	永正十七年	軸装	正本				原表題の山門疏は同門疏の誤り
軸イ2	月舟和尚製湖心住高源同門疏	永正十七年	軸装	正本				
軸ア1			軸装	正本				箱入り
軸ア2	山間阿弥陀仏尊容 普賢菩薩像		軸装	正本			法眼永真(狩野永真)筆	軸ア8・軸イ17とセット
軸ア3	天目高峰和尚像		軸装	正本	絹本		高峰は高峰原妙	高峰は高峰原妙
軸ア4	天満大政威徳天像		軸装	正本				同書は亀峰雲居(天竜寺雲居庵)にて書とれる
軸ア5	樞帳軒悦眞應上堂法語	天保十四年十一月	軸装	正本			樞帳軒悦眞應	
軸ア6	竜王画		軸装	正本				
軸ア7	墨蹟「浪華城畔…」		軸装	正本				
軸ア8	文殊菩薩像		軸装	正本			法眼永真(狩野永真)筆	軸ア2・軸イ17とセット
軸ア9	宗派図		軸装	正本	版本			
軸ア10	相国大耕和尚書(墨蹟)		軸装	正本			大耕和尚	
軸ア11	出山釈迦図		軸装	正本	紙本		法橋昌運筆	
軸ア12	弘巖筆法系図		軸装	正本			弘巖玄猊筆	
軸ア13	天満宮御神影		軸装	正本			土佐某筆	箱入り
軸ア14	普應國師像		軸装	複製				箱入り
軸ア15	弘巖和尚自画像		軸装	正本	紙本		弘巖玄猊筆(寿七十四と記す)	箱入り。軸エ5より改装したものが
軸ア16	応真□□…(墨蹟か)		軸装	正本				箱入り(軸ア17・18・19)
軸ア17	「從仏右之辺」(水墨)		軸装	正本				箱入り(軸ア17・18・19)
軸ア18	「西天瑞巖」(墨蹟)		軸装	正本				箱入り(軸ア17・18・19)
軸ア19	釈迦及弟子像		軸装	正本	絹本 彩色			釈迦十六善神像か。箱入り(軸ア17・18・19)
軸床9	三幅対 左・竹図		軸装	正文				箱入り(軸床9・10・11)
軸床10	三幅対 中・布袋図		軸装	正文				箱入り(軸床9・10・11)
軸床11	三幅対 右・梅雀図		軸装	正文				箱入り(軸床9・10・11)
軸床12	勅請 弘巖和尚禪室(繪旨案)	文化二年五月二十一日	軸装	案文	宿紙		右中辨御判↓弘巖和尚禪室	紙箱入り
軸床13	十六羅漢図(七幅)		軸装・七幅	正文	墨画		伝・曾我蛇足筆	新聞紙包み入り

軸ウ3	軸ウ2	軸ウ1	三千仏名・狛弘巖新添	文化九年	軸装	軸装	軸装	正本	弘巖玄狛か	箱入り(軸ウ3・4・5)
	竹園	靈光会并保勝会祠堂靈名(交名)							柏原藩織田常忠筆	箱入り
軸イ3	軸イ4	軸イ5	弘巖猊大和尚遺偈	文政四年五月二十七日	軸装	軸装	軸装	正本	弘巖玄狛書(朱印二顆「玄狛」「弘巖」)	弘巖和尚は寿七十四才
			大峽和尚頂相	昭和年間						
			「至徳無邦佐大雄：」(四幅之内)	文政元年	軸装	軸装	軸装	正本		
			「只此菩提：」(四幅之内)	文政元年	軸装	軸装	軸装	正本		
			「天上人間：」(四幅之内)	文政元年	軸装	軸装	軸装	正本		四幅の残り一幅は軸イ20
軸イ8	軸イ9	軸イ10	地獄図		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ7	軸イ6	軸イ5	地獄図		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ6	軸イ5	軸イ4	地獄図		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ7	軸イ6	軸イ5	地獄図		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ8	軸イ9	軸イ10	地獄図		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ9	軸イ10	軸イ11	地獄図		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ10	軸イ11	軸イ12	地獄図		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ11	軸イ12	軸イ13	地獄図		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ12	軸イ13	軸イ14	地獄図		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ13	軸イ14	軸イ15	涅槃像		軸装	軸装	軸装	正本		仏光寺什物の注記あり
軸イ14	軸イ15	軸イ16	釈迦像		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ15	軸イ16	軸イ17	達磨大師像		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ16	軸イ17	軸イ18	図像贊「天巖老衲書」	宝永七年	軸装	軸装	軸装	正本	靈源筆のものか	
軸イ17	軸イ18	軸イ19	釈迦像		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ18	軸イ19	軸イ20	林丘寺内親王御筆観音		軸装	軸装	軸装	正本	法眼永真(狩野永真)筆	箱入り。箱表に「文殊菩薩/釈迦文仏/普賢菩薩」。軸ア2・8とセット
軸イ19	軸イ20	軸イ21	白隠禪師粉引歌原稿		軸装	軸装	軸装	正本	林丘寺内親王	箱入り。箱表には「妙音天」(この箱は本来軸イ23のものであったか)
軸イ20	軸イ21	軸イ22	「三業相応：」(四幅之内)	文政元年	軸装	軸装	軸装	正本		軸イ5・6・7とセット
軸イ21	軸イ22	軸イ23	頂相「百日春天：」		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ22	軸イ23	軸イ24	弁財天十五童子像		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ23	軸イ24	軸イ25	妙音弁財天		軸装	軸装	軸装	正本		
軸イ24	軸イ25		頂相贊	昭和五十五年	軸装	軸装	軸装	正本		紙箱入り
軸イ25			蘭室祖芳和尚頂相	昭和年間	軸装	軸装	軸装	正本		箱入り

軸工10	弁財天像		軸装	正本	絹本着色		箱入り
軸工9	普應國師幻相		軸装	正本	絹本着色	建長寺安養齋□書	箱入り。傷み酷し
軸工8	氣多大明神・達磨像		軸装	正本			箱入り
軸工7	眞乘和尚遺像	寛政元年	軸装	正本		眞乗祖章	
軸工6	村内諸戦歿殉国英靈法名欠く	昭和戦後時代	軸装	正本			
軸工5	弘巖和尚自画像(絵自体は)		軸装	正本			軸ア15に改装か
軸工4	十六羅漢図二幅対		軸装	正本			箱入り(軸工3・4)
軸工3	十六羅漢図二幅対		軸装	正本			箱入り(軸工3・4)
軸工2	布袋図		軸装	正本		雪山筆・天巖明啓賛	箱入り
軸工1	大應二百年忌額		軸装	正本		沢庵	箱入り

軸ウ20	龍頭観音図		軸装	正本		長谷川丹後守筆	
軸ウ19	寿老人図	明治四十四年	軸装	正本			
軸ウ18	弘巖和尚遺訓		軸装	正本			
軸ウ17	□□(十六)羅漢図		軸装	正本	紙本	尾張津島市浅井松次郎寄附	
軸ウ15	頤仲養和尚親書宗派図		軸装	正本	紙本	頤仲碩養	
軸ウ13	近衛家熙筆法皇殿大字	文化七年	軸装	正本		近衛家熙	
軸ウ12	開山遠溪大和尚新相左右山水(右・龍)	文化四年	軸装	正本			箱入り(軸ウ11・12)。開山遠溪和尚像三幅対
軸ウ11	開山遠溪大和尚新相左右山水(左・虎)	文化四年	軸装	正本			箱入り(軸ウ11・12)。同上三幅対のうち遠溪像は別置ゆえか不明
軸ウ10	鳥 文殊菩薩左右花鳥(右・花)		軸装	正本		法眼水真(狩野水真)筆	箱入り(軸ウ8・9・10)。文殊菩薩像三幅対
軸ウ9	文殊菩薩左右花鳥(中・菩薩)		軸装	正本		法眼水真(狩野水真)筆	箱入り(軸ウ8・9・10)。文殊菩薩像三幅対
軸ウ8	文殊菩薩左右花鳥(左・花鳥)		軸装	正本		法眼水真(狩野水真)筆	箱入り(軸ウ8・9・10)。文殊菩薩像三幅対
軸ウ7	眞乘和尚頂相		軸装	正本	絹本着色		箱入り
軸ウ6	聖徳太子像		軸装	正本	絹本着色	渡辺求馬筆	箱入り(軸ウ3・4・5)
軸ウ5	三千仏名・猊弘巖新添	文化九年	軸装	正本		弘巖玄祝か	箱入り(軸ウ3・4・5)
軸ウ4	三千仏名・猊弘巖新添	文化九年	軸装	正本		弘巖玄祝か	箱入り(軸ウ3・4・5)



軸L5	前高源湖心鼎禪師印證(博多聖福寺住願賢禪師)	永正二年書雲令節	軸裝	正本		一華碩由↓湖心碩鼎	一華碩由は金叵羅筆室にてこの題詩を書す
軸L4	妙心僧堂柏巖禪師墨蹟		軸裝	正本			
軸L3	龍派禪珠禪師筆(序并詩偈)	慶長十年二月癸丑	軸裝	正本		龍派禪珠	龍派は同書を芝草野寺にて書す
軸L2	松蔭軒書(墨蹟)		軸裝	正本		松蔭軒	
軸L1	梁山棟和尚書(送偈)	大正八年	軸裝	正本		梁山棟和尚	
軸K8	佛□□和歌(墨蹟)		軸裝	正本		東福敬仲斗室禪師書	
軸K7	雲門花葉爛(墨蹟)		軸裝	正本		魯山玄播和尚	軸床7・8との関係は不明
軸K6	明石逆浪窟(墨蹟)		軸裝	正本		滄海一鷗和尚親筆	
軸K5	富士見西行図(水墨画)		軸裝	正本			
軸K4	南岩墨跡(墨蹟)		軸裝	正本			
軸K3	前住当山明徹祖徳大和尚筆(墨蹟)	承応三年四月住建長寺法語 宝永三年七月日軸裝	軸裝	正本		明徹祖徳直筆/天巖明啓軸裝	明徹は天巖の法孫に当たる
軸K2	備陽井山象海和尚真蹟(墨蹟)		軸裝	正本		井山象海和尚	
軸K1	中井履軒書(墨蹟)		軸裝	正本		中井履軒	
軸工22	海門和尚墨蹟	文政七年	軸裝	正本		海門和尚	箱入り。海門は妙心寺住持か
軸工21	水墨画(楼閣山水図)		軸裝	正本	紙本	映(姓不明)画	
軸工20	墨蹟「遊高源寺/嘿齋」		軸裝	正本			
軸工19	「雪舟在支那所図明人之賛詞」(水墨画)		軸裝	正本		瑞巖人幻功曆	幻功とは祖功のことか
軸工18	「南無阿弥陀仏」(墨蹟)		軸裝	正本			紙箱入り
軸工17	釈迦像		軸裝	正本	絹本着色		
軸工16	寒山拾得図		軸裝	正本	紙本着色		
軸工15	大愚和尚正月之偈		軸裝	正本			箱入り
軸工14	般若心経	寛政十二年	軸裝	正本		織田出雲守信憑筆	箱入り
軸工13	天巖和尚遺偈		軸裝	正本			箱入り(軸工12・13)
軸工12	天巖和尚頂相	文政九年	軸裝	正本	紙本着色		箱入り(軸工12・13)
軸工11	御即位之図		軸裝	正本			傷み酷し

軸N11	鷹図 改装か (本体切り取られ無し→既に)		軸装	正本	絹本着色		箱入り。極札あり
軸N10	天巖墨蹟		軸装	正本			
軸N9	寒山水墨画		軸装	正本			
軸N8			軸装	正本			
軸N7	弘巖印可證	天明三年十一月十四日	軸装	正本		眞乗祖章(方印二顆・花押)→弘巖玄	
軸N6	頂相		軸装	正本	紙本着色		
軸N5	宗派図		軸装	正本			本文末尾の法系図を参照
軸N4	□大和尚遺偈		軸装	正本			
軸N3	近衛家照書(詩懷紙)		軸装	正本			
軸N2	弘巖和尚頂相		軸装	正本		大随贊	
軸N1	絵系図(達磨→遠溪)		軸装	正本	紙本着色		
軸M13	最勝王経本尊	天明元年	軸装	正本	絹本着色		箱入り
軸M12	樵者図		軸装	正本	紙本	月仙筆・弘巖玄祝贊	箱入り
軸M11	松木越飯田和韻		軸装	正本			箱入り
軸M10	達磨像		軸装	正本	紙本着色	雲谷筆	箱入り
軸M9	墨蹟		軸装	正本			箱入り
軸M8	青木氏系譜(越後魚沼郡)	宝永三年	軸装	正本			箱入り
軸M7	観音菩薩像		軸装	正本	紙本墨碧		箱入り(軸M5・6)
軸M6	文殊・普賢菩薩像(文殊像)		軸装	正本	絹本着色	赤井忠通寄進	箱入り(軸M5・6)
軸M5	文殊・普賢菩薩像(文殊像)		軸装	正本	絹本着色		箱入り(軸M3・4)。箱書き「耳峰和尚墨蹟 式巻」
軸M4	耳峰和尚筆	(慶長二年十月四日)	軸装	正本		耳峰玄熊写(慶長第二十月四日於肥前安国再拈筆 玄白押)と記載あり	箱入り(軸M3・4)。箱書き「耳峰和尚墨蹟 式巻」
軸M3	近松耳峰和尚住丹高源法語	永禄十一年八月日	軸装	正本			箱入り
軸M2	般若心経		軸装	正本			箱入り
軸M1	桐州和尚頂相		軸装	正本	絹本着色		箱入り。桐州は桐洲明潮のこと
軸L6	梁翁座元書	文政九年	軸装	正本		梁翁	梁翁座元は梁翁玄珉

軸N12	魯山玄瑠法語	享保四年九月二日	軸装	正本		幻住十九世魯山玄瑠筆	朱印「魯山」「秋氏玄瑠」二顆あり
軸N13	三世発願文		軸装	正本			
軸N14	出山釈迦図		軸装	正本		慈海面書	
軸N15	墨蹟「風□子」		軸装	正本			
軸N16	法語		軸装	正本		前建長見圓正宗玄臨	

軸O1	鬼図(水墨画・淡彩色)		軸装	正本		子性人写	
軸O2	墨蹟「成雲」		軸装	正本		蘭室祖芳	「祖芳」印あり
軸O3	墨蹟「清江青里」		軸装	正本		妙心七十七翁貞山	
軸O4	墨蹟	丙寅之夏	軸装	正本	絹本		
軸O5	墨蹟「竹不改色」		軸装	正本			
軸O6	墨蹟(序并詩偈)	宝曆十三年九月吉祥日	軸装	正本		(年代的に鐵門明柱の筆か)	永明明超が中峰像を作らせたときのもの
軸O7	墨蹟「白雲自去來」		軸装	正本	絹本		
軸O8	四国八十八ヶ所仏画		軸装・版画	正本			
軸O9	涅槃図(天巖明啓勸進)	宝永五年二月	軸装	正本	紙本着色		
軸O10	一道頂相	昭和十四年	軸装	正本	絹本着色	正法山主八十叟大休贊	一道は一道宗唱のこと

〔凡例〕 本表は「史料細胞現状記録」をもとに作成した。

一、「番号」は以下のように分類し、写真帳と対応させた。「軸別」≡別置軸物、「軸床」≡収蔵庫床に別置分、「軸ア」≡右棚一段目、「軸イ」≡右棚二段目、「軸ウ」≡右棚三段目、「軸エ」≡右棚四段目、「軸K・L・M・N・O」≡K、Oの各箱の分。なお軸Kは本来ならば文書Kの表に収めるべきであるが、軸物として便宜この表に収めた。

二、「文書名」はその文書に付された表題を取っているが、表題のないものについては適宜内容から取っている。

三、「位著・作成」は表紙・裏表紙や奥書などを参考に、その文書を作成した主体を取った。ただし、書状類は「作成者→宛所」の形で便宜記したものである。

四、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は( )で示した。

高源寺文書 別置冊物(書誌情報篇) ※内容については内容目録篇を参照のこと

番号	文書名	日付	冊・段	正・委文	材料	位置・作成	備考
冊1	伏見宮様御館入之記録	文化六年九月	冊・1	正文	楮紙	表紙「丹波高源寺」	
冊2	仙洞御所 崩御記録	天保十一年十一月十九日	冊・1	正文	楮紙	表紙「丹波高源寺」 裏表紙「役者普山座元／善應殿主」	表紙「凶事傳奏葉室中納言殿／同奉行裏松辨殿」
冊3	皇都柏原披露諸般記録	天保三年九月如意珠日	冊・1	正文	楮紙	表紙「高源寺住持代濟州玄橋」	裏表紙「紙数廿一枚」
冊4	開山大和尚五百年遠諱會中献立 并野菜寄進簿	(天保十四年)	冊・1	正文	楮紙	裏表紙「西天日高源禪寺」	開山大和尚は遠溪祖雄
冊5	禁裏御所 崩御雜記	弘化三年三月日	冊・1	正文	楮紙	表紙右「濟洲叟代」	表紙左「弘化四年未ノ九月廿三日當日ノ御即位出勤之雜記 添」
冊6	高源寺宗旨證文 公儀江差出御 覚書	享保九年	冊・1	正文	楮紙	表紙「桐州記之」	「高源寺出品(印)」の付箋あり
冊7	宗門御改帳控	慶応四年三月日	冊・1	正文	楮紙	表紙「檜倉村」	「高源寺出品(印)」の付箋あり
冊8	住代中道座元 京師參殿柏原披 露	(文政九年)	冊・1	正文	楮紙	表紙「待者玄規記。裏表紙「梁翁座元 圓寂雜記ノ紙数十三枚」	
冊9①	高源禪寺住持籍	天明八年六月二十七日	冊・1	正文	楮紙	眞乘祖章序	祖章以後も書継ぎあり
冊9②	高源寺開山遠溪禪師略傳	序	冊・1	正文			表紙「統群書類從抄出」
冊10	靈溪和尚參 内記・孝明天皇猷 経記録 合巻	(慶応二年)	冊・1	正文			
冊11	内題「高源禪寺諸宝物目録」 (外題剝離)	天明三年八月二十七日	冊・1	正文	楮紙	裏付「永明明超(花押)、洞明玄寅(花押)、提宗明勤(花押)、義天玄節(花押)、十洲玄海(花押)、眞乘祖章(花押)、香林相嶠(花押)、頑石恵生(花押) (日下に位置)	裏書「右ノ宝物古記混雜依有之ノ今般會集辨別而新記ノ録改作之者也ノ担可稱什物品別記有之矣」(この後に日付・位置)
冊12	弘慶和尚參内記録 全	文化四年	冊・1	正文	楮紙		冊12ノ20まで「宝蔵不出ノ住持籍 高源寺ノ宝物目録添」の墨書のある木箱の中にある
冊13	新規定 全(内題「高源寺新規 定條目」)	(天明三・四年)	冊・1	正文	楮紙	a 法長寺隱居永明明超・光明寺洞明玄寅 他四名、b (天明三年九月日) 長安寺義 天玄節・海眼寺香林相嶠、c 住山卓堂玄 騰、d (天明四年二月日) 同(住山) 十 洲玄海・洞明玄寅・知事永明明超・住 山卓堂玄騰・藥師院主幸眞乘座元	天明三年九月日・同四年二月日採扱(ほか採扱日不明二件)

冊14	幻住清規 完(内題「普應國師 幻住庵清規」)	江戸時代	冊・1	版本		表紙「高源寺常□(住か)」	奥付「三條通鶴屋町田原二左衛門改刊。」「瑞 巖」黒印あり
冊15	中峯派垂示式規則	大正十四年五月日	冊・1	正文	罫線紙	「貫道誌」(日下に位置)	罫線紙は「吉田版」
冊16	幻門傳法道場清規	江戸時代	冊・1	正文	襖紙		
冊17	寶物什器目録牒	明治三十五年十月日取 調	冊・1	正文	罫線紙	高源寺住職松田一道・大燈寺住職法類木 俣惣他四名(日下に位置)	表紙下「高源禪寺(印)」
冊18	寶物目録	明治二十四年四月日	冊・1	正文		高源寺住職二柱桂林(印)(日下)	
冊19	臨濟宗瑞巖山高源禪寺明細牒	明治三十五年九月日	冊・1	正文		住持松田一道・大燈寺住職法類惣代木俣 寛道・法長菴住職末寺總代澤村宗裕・檀 徒惣代足立弥三郎他二名(日下に位置)	表紙左下「高源禪寺(印)」
冊20	妙心寺對高源寺為取替契約書 (必要書類ママ)	明治三十三年十一月日	冊・1	正文	罫線紙	妙心寺派委員／執事稻葉元厚(印)・丹 波高源寺住職長尾塊洲(印)・同上法常 寺住職法類宮裡泰(印)	板心「京都府」「妙心寺」とあり
冊21	木箱		箱	木箱		箱書「宝蔵不出住持籍 宝物目録添 高 源寺」	もとは冊11・13が入っていたか
冊22	金剛般若波羅蜜經	宣徳背籠四月下滯	冊・1	正文	朝鮮紙	開慶禪寺正雨が跋。浄業院住持沈沈氏妙圓 ・朴氏妙圓・黃氏貴生が施入	箱内書「寄進 毛利家／高源寺什物」宣徳年 間(四二六―三五)施主は朝鮮王朝の貴族 か
冊23	法華懺法	戦国時代	冊・1	正文	檀紙	箱書中央「後柏原院御震筆」	箱書左下「此内ニ古筆極札有之」(実際に極 札あり)

〔凡例〕 本表は「史料細胞現状記録」をもとに作成した。

一、「文書名」は表紙に記載されたものを基本的に取り、表紙・表題のないものは内題・内容から取った。

二、「位置・作成」は表紙・裏表紙や奥書などを参考に、その文書を作成した主体を取った。ただし、書状類は「作成者→宛所」の形で便宜記したものである。

三、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は「」で示した。

四、本文内容の概略については、別表「高源寺文書別置冊物(内容目録篇)」を参照のこと。

高源寺文書 別置冊物(内容目録篇)

※書誌情報については書誌情報篇を参照のこと

番号	文書名	「書き出し」・本文・内容その他	備考
冊1	伏見宮様御館入之記録	「書き出し」・本文・内容その他	
冊2	仙洞御所 崩御記録	光格天皇崩御に関する記録。表紙に「凶事伝奏葉室中納言殿/同奉行裏松弁殿」裏表紙に「役者普山座元/善応藏主」	
冊3	皇都柏原披露諸般記録	「九月八日晴天」/「弘慶東堂北野選佛寺迄御来興、律僧…」	
冊4	開山大和尚五百年遠諱會中献立并野菜寄進簿	「天保三年九月出立 伴侶善応篠山城下家…」	袋綴中に書状あり
冊5	禁裏御所 崩御雜記	「野菜」「献立控」から成る	
冊6	高源寺宗旨證文 公儀江差出御覚書	仁孝天皇崩御・孝明天皇即位に関する記録	文中に崩御の際の献立・焼香・諷経を願う口上覚を图示したものあり
冊7	宗門御改帳控	宗旨証文を京都奉行所へ提出することに関する記録	
冊8	住代中道座元 京師参殿柏原披露	檢倉村の宗旨改帳	
冊9①	高源禪寺住持籍	「梁翁座元病中并回寂之事」	
冊9②	高源寺開山遠溪禪師略傳	高源寺住持歴代の書上げ。遠溪祖雄より一舟慈禪(姓三浦)まで至る表紙右「統群書類従抄出」とある通り統群書類従9下(第三二二卷)よりの抄出	
冊10	靈溪和尚参 内記・孝明天皇献経記録 合巻	孝明天皇崩御の際の献経などに関する記録。「慶応二丙寅極月二十五日/禁裏様 崩御 諸般記」	冊中に文書の写、泉涌寺・般若院の絵図などあり
冊11	内題「高源禪寺諸宝物目録」(外題剝離)	「高源禪寺諸宝物目録」/「恵心僧都作本尊釈迦如来…」	
冊12	弘慶和尚参内記録 全	文化四年の弘慶の参内に関する記録。文化四年三月日、弘慶あて圓光寺玄溪書状の引用より始まる。文書の写しなど多し	
冊13	新規定 全(内題「高源寺新規定條目」)	「高源寺新規定條目」/「本山住持交代古規可相守事…」。高源寺運営上の取決書	
冊14	幻住清規 完(内題「普應國師幻住庵清規」)	「普應國師幻住庵清規」の版本	
冊15	中釜派垂示式規則	垂示式の規則六条ならびに備考	
冊16	幻門傳法道場清規	「道場之諸式」	三伯昌伊の室中一間之次第と同様のもの収録
冊17	寶物什器目録牒	寶物目録	
冊18	寶物目録	「古文書之部」「絵画之部」「彫刻之部」「書蹟之部」あり。表紙左下「高源寺」	
冊19	臨濟宗瑞巖山高源禪寺明細牒	沿革・建物・宝物・所有地についての明細	
冊20	妙心寺對高源寺為取替契約書(必要書類ママ)	妙心寺と高源寺との間の契約書	
冊21	木箱	箱書「宝蔵不出住持籍 宝物目録添 高源寺」	
冊22	金剛般若波羅蜜經	(翻刻参照のこと)	

〔凡例〕 本表は「史料細胞現状記録」をもとに作成した。

一、書誌的な情報については、別表「高源寺文書別置目録（書誌情報篇）」を参照のこと。

二、「書き出し」・本文・内容その他は、原文書の冒頭の書き出し部分を「」に記し、また内容のメモを適宜付した。

三、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は「」（「か」）で示した。

### 高源寺文書 A

番号	文書名	年代・日付	形状・頁数	料紙	位署・作成	「書き出し」・本文	備考
A 1	田畑地平均名寄帳	貞享四年三月日	冊1・写	楮紙	宝暦四年三月日義山写焉	「下田四畝二十歩 分米三斗七升三合 庄右衛門」	書写のあとに二頁分の名寄の追加あり
A 2	黄□□〔彌把〕住放行牒	大正九年一月日	冊1・正文	現代紙		大正九年度会計簿	表紙破損あり
A 3	一切経勸化名簿	寛政六年五月日	冊1・正文	楮紙	高源寺副住弘嚴玄胤誌	施入に関わる名簿	「弘嚴」印あり。序文はE38と同じ
A 4	勸願所一切経并寶塔建立	江戸時代	冊1・正文	楮紙	丹州佐治庄天目山高源寺	願主として「大坂講中」六十数名の名あり	
A 5	會計把住・放行控	昭和三十六年十二月三十一日	冊1・正文	現代紙	高源寺副司・高源寺護持會	昭和三十一年〜三十六年度寄附志納簿	冊中に「開放農地賃貸価格調査表」一枚混入あり
A 6	〔桐州和尚参内記〕表紙なし	享保（年間）	冊1・正文	楮紙		「享保廿年六月廿五日」。桐州和尚の参内に関わるもの	桐州は桐洲明潮
A 7	常任祠堂現銀年々貸方利足勘定簿	寛保三年七月七日ヨリ	冊1・正文	楮紙	副寺祖文（印）始焉	「銀六百参拾目此利八拾壹匁 芦田佐左衛門」。祠堂銭の貸付帳	記事は明和二年三月まであり
A 8	田畑高合預口覚帳	寛政二年七月日	冊1・正文	楮紙	高源寺副寺寮	「下田五畝升歩 つばきの本」	A9に続くか（A8・A9はもと一体のものか）
A 9	（表紙なし）	寛政五年三月二十二日	冊1・正文	楮紙		「下畑五畝歩 地藏留」	A8より続くか
A 10	結縁授戒拙偈	文化八年二月朔序	冊1・正文	楮紙	侍者苗編集・弘嚴玄胤序	序「西天目」。本文「開導」。	墨の見せ消しが各所にある
A 11	村離送り手形之事（書状）	明治三年一月日	冊1・案文	楮紙	瀬田□□様御管内丹波水上郡桧倉村年寄足立忠右衛門・足立幸七↓西蘆田村御役人中	「当村新助妹まつ」の婚儀に伴う宗門写し	

A 12	奉願口上之覺	延享二年十月日	冊2・案文		丹波国水上郡佐治高源寺 役者祖堯(印)・中峯派 惣代鉄山(印)・丹崖 (印)・高源寺住持笑巖 (印)↓柳原中納言	往古の如く高源寺での輪番出世を 許し、本寺の格式を立て、紫衣の 繪旨を許されることを願うもの	
A 13	宗門離手形	明治三年正月日	冊1・正文	楮紙	栗住野村寶林寺↓楡倉村 高源寺御知事位	「当村和吉姉てる」の婚儀に伴う 宗門、写し	黒印あり
A 14	引請仕立申瓦之事	寛政四年二月日	冊1・正文	楮紙	福知山町瓦屋又兵衛 (印)・請人一家長左衛門 (印)・口入大工左兵衛↓ 楡倉村高源寺御納所	「方丈屋祿九間半」などの瓦の請 書	瓦屋の印が本文中にあり

〔凡例〕 本表は「史料細胞現状記録」をもとに作成した。

一、「文書名」は表紙に記載されたものを基本的に取り、表紙・表題のないものは内題・内容から取った。

二、「位署・作成」は表紙・裏表紙や奥書などを参考に、その文書を作成した主体を取った。ただし、書状類は「作成者↓宛所」の形で便宜記したものである。

三、「書き出し・本文」は、原文書の冒頭の書き出し部分を「」に記し、また内容のメモを適宜付した。

四、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は( )か で示した。

## 高源寺文書 B

番号	文書名	年代・日付	形状・頁数	正・案文	料紙	位署・作成	本文その他	備考
B 1	開祖五百年・遠謙禪関策進會 金穀収支簿	弘化二年九月二十五日決 算	冊・1	正文	楮紙	副司禪志(花押)他四名	「賀儀」「施入」「供養収」「支」「米納」などの項目あり	開祖は遠溪祖雄のこと
B 2	視察高源拙話	江戸時代中期	冊・1	正文	楮紙	眞乗祖章	開堂の法語・偈類	紙魚がひどく開けず
B 3	開山遠溪禪師五百遠謙雜記	弘化二年秋	冊・1	正文	楮紙		法会儀式関係など	
B 4	瑞巖山毒藥會列職之歳	文化二年	冊・1	正文	楮紙		都寺など役者の職務規定書	
B 5	勸発名刺	江戸時代	冊・1		楮紙		勸進に応じた寺のリストか	
B 6	佛祖三経會名簿	明治二十六年四月	冊・1		楮紙	高源寺八十世桂林文昌 謹誌	名簿	佛祖三経會とは「遠溪大禪師五百五十年遠言」のこと
B 7	(表紙なし)	江戸時代(文化二年か)	帳崩1		楮紙		「越前田谷大安寺則洲徒智純」名簿	B 8の続きか
B 8	荊叢毒藥會名簿	文化二年四月日結制	帳崩1		楮紙		名簿	B 7に続くか(帳崩れゆえ)



B 9	新田測量地圖	大正元年十一月二十三日	冊・1	正文	楮紙	関係者足立忠治郎他三名	新田測量圖	
B 10	開山四百五十遠忌香案資並 役配幹事記	寛政五年六月日		正文	楮紙	表紙「幹事記」	「方金貳百匹 相州鎌府建長寺…」	虫損ひとし。開けない買あり
B 11	高源寺保勝會應募録（佐治 紀□□完納之部）	明治時代か	冊・1	正文		沢野村	「二金六拾錢 貳口 足立喜十郎…」 寄進帳	B 11、14は一連のものか
B 12	高源寺保勝會應募録	明治三十一年九月十二日	冊・1	正文		文室村	「二金六拾錢 二口 金四拾錢…」寄進 帳	
B 13	高源寺保勝會應募録（完納 之部）	明治三十一年十二月三十 一日入手	冊・1	正文		佐治村之内 奥塩久村	「二金六拾錢 貳口 足立邦之亮…」寄 進帳	
B 14	高源寺保勝會應募録	明治時代	冊・1	正文			「二金六円五十錢口数五名姓遺坂足立 作三郎…」寄進帳	
B 15	払子							欠番扱い
B 16	地券	明治十年九月二十日	冊・1	正文		兵庫縣→高源寺	小倉村九百八十三番 字久保田 一耕	小倉村は丹波国氷上郡小倉 村
B 17	地券	明治十年九月二十日	冊・1	正文		兵庫縣→高源寺	地六畝十七歩 小倉村九百八十二番 字久保田 一耕	
B 18	地券	明治十年九月二十日	冊・1	正文		兵庫縣→高源寺	地六畝十六歩 小倉村九百八十一番 字久保田 一耕	
B 19	宗旨証文之事	江戸時代	冊・1	土代	楮紙	高源寺→御奉行所	地五畝十五歩 小倉村九百七十八番 字久保田 一耕	
B 20	地券	明治十年九月二十日	冊・1	正文		兵庫縣→高源寺	地一畝十二歩 小倉村六十五番 字小倉奥 一山林五 反歩	
B 21	地券	明治十四年八月二十八日	冊・1	正文		兵庫縣→高源寺	小倉村五十一番 字小倉奥 一山林三 反二畝十歩	
B 22	地券	明治十四年八月二十八日	冊・1	正文		兵庫縣→高源寺	小倉村九百八十番 字久保田 一耕地 五畝二十一歩	
B 23	地券	明治十年九月二十日	冊・1	正文		兵庫縣→高源寺	小倉村二百三十八番 字屋敷 明治十 年荒畑免稅期明株場成 一株二十二歩	
B 24	地券	明治十一年三月三十日	冊・1	正文		兵庫縣→高源寺	小倉村九百八十九番 字久保田 一耕 地	
B 25	地券	明治十年九月二十日	冊・1	正文		兵庫縣→高源寺	小倉村九百八十四番 字久保田 同郡 檢倉村	
B 26	地券	明治十年九月二十日	冊・1	正文		兵庫縣→高源寺		

〔凡例〕 本表は「史料細胞現状記録」と一点ごとの調書をもとに作成した。

一、「文書名」は表紙に記載されたものを基本的に取り、表紙・表題のないものは内題・内容から取った。

二、「位署・作成」は表紙・裏表紙や奥書などを参考に、その文書を作成した主体を取った。ただし、書状類は「作成者→宛所」の形で便宜記したものである。

三、「本文その他」は、原文書の冒頭の書き出し部分を「」に記し、また内容のメモを適宜付した。

四、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は「」で示した。

### 高源寺文書 C

番号	文書名	年代	位署・作成者	形態	数量	備考
C 1	無縁経供養受納牒	明治三十七年旧三月吉旦	高源寺世話掛	横帳	1	
C 2	役付下書		高源寺	横帳	1	
C 3	無縁経供養米取納控	明治三十六年三月二十六日	西天目瑞岩山世話掛	横帳	1	
C 4	津送小買物帳	已(明治三十八年か)五月十七日	高源寺世話方	横帳	1	
C 5	村々名寄扣帳			横帳	1	
C 6	無縁経供養袋有志明細牒	明治三十七年旧三月吉旦	西天目世話方	横帳	1	
C 7	無縁経中井開山諱香資諸般扣	安政七年三月二十五日ヨリ	世話人幸七・忠左衛門	横帳	1	
C 8	本堂裏側掛替諸人費控簿	明治十五年旧十月九日始	西天目瑞岩山現住幽峰擔當	横帳	1	幽峰は幽峰碩遠のこと
C 9	無縁経会諸費記	明治十六年三月二十六日	瑞巖山幹事	横帳	1	
C 10	開祖忌及経會放把牒	明治三十六年三月二十六日	西天目副寺	横帳	1	
C 11	無縁経會及開山忌把住放行記	明治四十四年四月二十六日	瑞岩山副寺控	横帳	1	
C 12	無縁経及毎歳忌住山把放行記	大正二年四月吉旦	表紙「瑞巖峰副寺」・裏表紙「丹丘勝處瑞岩山副主寮」	横帳	1	
C 13 ①	無縁経會把放牒	明治三十八年三月吉旦		横帳	1	
C 13 ②	無縁経及開山忌把住放行牒	明治四十一年三月吉旦		横帳	1	
C 14	無縁経會把住放行記	明治四十二年三月吉旦	瑞岩山副司	横帳	1	
C 15	棚経年始信徒名簿	明治二十六年七月吉祥	西天目瑞巖山執事	横帳	1	
C 16	無縁経及毎歳忌把放控帳	大正四年四月二十六日	瑞岩山副寺	横帳	1	

C 43	黄白把住放行控	明治四十三年一月吉旦	瑞岩山副寺	横帳	1	
C 42	黄白把住放行控	明治四十年一月吉旦	西天目副寺	横帳	1	
C 41	古心老師七回忌諸記	天保八年三月二十七日	天目副寺	横帳	1	
C 40	武番祠堂銀勘定寛帳	天保十三年八月二十七日	西天目副寺寮	横帳	1	裏表紙の紙継り結び目に印あり
C 39	古心大師十三回忌雜記	天保四年三月二十三日〜二十七日	瑞巖山副司僚	横帳	1	
C 38	古心老師七回忌諸事控	(文政十年)	瑞巖山副主寮	横帳	1	古心老師は弘巖玄観で、入寂は文政四年五月二十七日(高源寺住持籍による)
C 37	黄白把住放行控	明治三十七年一月吉旦	瑞岩山副寺	横帳	1	
C 36	無縁経供養袋受納帳	明治四十二年三月	西天目高源禅寺(印)	横帳	1	
C 35	無縁経供養袋受取帳	明治四十一年三月吉旦	西天目高源寺(印)	横帳	1	
C 34	黄白把住放行帳	明治四十一年一月吉旦	瑞岩山副寺	横帳	1	
C 33	四季檀信徒到来品控	大正八年一月吉旦	瑞岩山副寺	横帳	1	
C 32	常住黄白把住放行記	大正七年一月吉旦	瑞巖山副寺	横帳	1	
C 31	年貢米収納帳	大正四年十一月二十七日	瑞岩山副寺	横帳	1	
C 30	黄白把住放行記	大正四年一月吉旦	瑞岩山副寺	横帳	1	
C 29	黄白把住放行記	明治四十二年一月吉旦	瑞岩山副寺	横帳	1	
C 28	無縁経會及開山忌把住放行記	明治四十三年四月吉祥日	瑞岩山副寺	横帳	1	
C 27	金錢把住放行記	明治三十五年五月下旬	瑞岩山副寺	横帳	1	
C 26	無縁経及開山忌把放帳	明治四十年三月吉旦	瑞岩山副寺寮	横帳	1	
C 25②	開山忌及無縁経會把放帳	明治三十七年三月吉旦	瑞岩山副寺寮	横帳	1	
C 25①	每歳忌并無縁経會把放記	明治三十九年三月吉旦	瑞岩山副主寮	横帳	1	
C 24	無縁経及每歳會把住放行記	明治四十五年四月二十六日	表紙「高源副寺(印)」・裏表紙「惠秀番」	横帳	1	
C 23	諸般小遣控	安政三年正月日	瑞岩山副主寮	横帳	1	
C 22	檜井二松改帳	慶応三年九月二日・三日	講中總代足立幸七他五名	横帳	1	「杉木改帳」(同日付)を合冊印文読めず
C 21	無縁経會供養袋明細表	明治四十二年三月吉旦	世話人足立定右衛門・足立嘉助・足立德次郎	横帳	1	
C 20	會計算用簿	明治二十年正月ヨリ	瑞巖山高源寺會計課	横帳	1	
C 19	山門施餓鬼會出納簿	明治十六年七月十五日	瑞巖山高源寺會計課	横帳	1	
C 18	年貢米収納帳	大正五年十一月二十七日	表紙「瑞岩山副寺」・裏表紙「世話人足立弥三郎・足立忠治郎」	横帳	1	
C 17	年貢米収納帳	大正三年十二月五日	表紙「瑞岩山副寺」・裏表紙「世話人足立忠三郎・足立忠治郎」	横帳	1	

C 70	黄白把住放行記	明治四十五年一月吉旦	瑞巖山副寺	横帳	1	
C 69	年貢米収納帳	大正七年十二月十二日	世話人足立弥三郎・忠治郎	横帳	1	
C 68	無縁経供養袋到着控	大正二年四月二十六日	瑞岩山世話人	横帳	1	
C 67	(表紙なし)「放行」一、六十錢砂とう 二斤……			横帳	1	帳崩れ。把住放行記の一部か
C 66	無縁経供養袋受納牒	明治四十五年四月二十四日	桧倉高源寺執事(印)	横帳	1	
C 65	無縁経計算簿	明治二十一年旧三月二十七日	世話方足立定右衛門・足立徳治郎・足立嘉助	横帳	1	
C 64	會計既〔概〕略豫算簿	明治十九年三月一日	會計掛足立忠治郎・足立弥三郎・足立徳治郎	横帳	1	
C 63	参 内晋山前賀當賀到来記	慶応三年正月廿日前賀・三月十八日 日参内・四月二十六日晋山	常心庵侍衣玄奘・祖善	横帳	1	
C 62	造作諸記			横帳	1	
C 61	年貢米収物帳	大正六年十二月一日	世話人足立弥三郎・足立忠治郎	横帳	1	
C 60	訴訟公費登載簿	明治三十二年三月起	檜倉村原告高源寺	横帳	1	金地院からの施入金あり
C 59	弘岩老大師治照忌香資菜誼掟	八月十六・十八日		横帳	1	
C 58	大般若経施入銀請取帳	正徳二年十一月吉祥日		横帳	1	
C 57	幽峯和尚津華香葉諸般誌	明治十七年十一月二十四日	副司寮	横帳	1	
C 56	弘巖大和尚三拾三回忌齋會諸般把放記	安政三年八月十六日・十七日		横帳	1	
C 55	弘巖大和尚三十三回諱信檀香資之控	安政三年八月十七日		横帳	1	
C 54	津送香資控帳	明治十七年十月二十四日	瑞巖山	横帳	1	
C 53	先祖五十回忌把住放行帳	寛政十一年三月如意日	表紙「天目山副司」・裏表紙「光明寺」	横帳	1	この「先祖五十回忌」とは寛延四年六月十五日入寂した魯山玄瑤のことか
C 52	住代梁翁座元香資謝儀控帳	文政九年二月二十三日示寂	西天目副寺條	横帳	1	
C 51	春沢和尚三回諱香葉扣	未(安政六年)六月二十七日延脩		横帳	1	春沢和尚は春沢祖透で、入寂は安政四年四月五日
C 50	(表紙なし)「一、八番／八斗……」			横帳	1	
C 49	檀越香資収納帳	文政四年五月二十七日	嵩山副寺	横帳	1	
C 48	芦田村田地上納下作勘定帳	寛延二年秋納ヨリ宝暦二年秋マテ	高源寺納所	横帳	1	
C 47	御参 内并献経諸入用帳	慶応三年正月二十三日	役寮中	横帳	1	
C 46	無縁経會出納簿	明治十五年三月二十六日	西天目會計課	横帳	1	
C 45	年始廻禮姓名記	明治十六年春改誌	天目瑞岩山幹事	横帳	1	
C 44	無縁経供養袋到来控	明治四十年三月吉旦		横帳	1	

C 71	□〔開〕山毎歳忌及無縁経會把放記 (表紙のみ)	大正七年四月吉旦	瑞岩山副寺	状	1	帳崩れの断簡
C 72	手禮家別玉帛配贈帳	安政七年正月改	高源寺	横帳	1	
C 73	黄白把住放行牒	大正二年一月吉旦	西天目瑞巖山副寺	横帳	1	
C 74	金錢把住放行記	明治三十六年一月吉旦	西天目副寺僚	横帳	1	
C 75	黄白把住放(以下欠)	大正三年一月(以下欠)	西天目瑞巖山副寺寮	横帳	1	
C 76	光明寺施我鬼買物帳	七月十九日	高源寺納所	横帳	1	
C 77	百六拾九品 本帳ヨリ写	(本帳日付：天明三年八月廿七日)	大江記	横帳	1	
C 78	賀誼受宛	天保十二年三月如意日	副司	横帳	1	
C 79	賀聘還禮牒 附法事還香等 下夕書	開山四百五十年忌高峰録會結制	副寺	横帳	1	
C 80	塔立上立木数改帳	明治六年十二月六日	桧倉村高源寺執事・足立幸七他四名	横帳	1	
C 81	(表紙なし)品代書上			横帳	1	
C 82	(表紙なし)金錢書上(単位は圓)	近代		横帳	1	
C 83	來臨帳	辰八月十三日	天目山知客寮	横帳	1	
C 84	無縁経及毎歳忌把住放行記	大正三年四月二十六日	瑞岩山副寺	横帳	1	裏表紙に「大正四年四月廿参日」の印あり
C 85	〔紐〕			紐	1	

〔凡例〕本表は「史料細胞現状記録」をもとに作成した。

一、「文書名」は表紙に記載されたものを基本的に取り、表紙・表題のないものは内題・内容から取った。

二、「位署・作成」は表紙・裏表紙や奥書などを参考に、その文書を作成した主体を取った。ただし、書状類は「作成者↓宛所」の形で便宜記したものである。

三、「本文その他」は、原文書の冒頭の書き出し部分を「」に記し、また内容のメモを適宜付した。

四、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は「」〔か〕で示した。

高源寺文書 D

番号	文書名	年月日	形・数	料紙	本文その他	備考
D1	(表紙なし)金銭勘定帳	江戸時代	横帳・1	楮紙	二、還(菅束/足衣) 圓光寺/娘玄寺/...	
D2	祠堂現銀貸方毎載差引帳	明和二年三月十八日	縦冊・1	楮紙	二、銀巻員五百目(利一割二分)：西芹田治兵衛...表紙「瑞巖山高源寺知事祖勸識」。	冊中に寛政九年十月「親類頼之一冊」あり
D3	開山遠谿禪師五百遠諱香資記	弘化二年秋	縦冊・1	楮紙	「金百疋金毛窟/金百疋慈聖院/金百疋円光寺...」	最後に「右者菜資之分」と記載あり
D4	普應園師五百遠諱	文化5年か	縦冊・1	楮紙	「會中差定/仮住 醍醐濟州座元/都寺 大燈寛海座元/...」	石化して開けない部分多し
D5	一間之次第	慶長七年正月十五日	状・1	楮紙	記主「幻住十四世三伯道人昌伊」	裏打あるも虫食い酷し
D6	妙法蓮華経卷第八 陀羅尼品第二十六	文化十一年四月如意珠日	軸巻・1		奥書「西天目瑞巖山高源禪寺知客寮」	金泥界。縦二四・六cm/横二六・三cm

〔凡例〕 本表は「史料細胞現状記録」と一点ごとの調書をもとに作成した。

一、「文書名」は表紙に記載されたものを基本的に取り、表紙・表題のないものは内容から取った。

二、「本文その他」は、原文書の冒頭の書き出し部分を「」に記し、また内容のメモを適宜付した。

三、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は「( )」で示した。

高源寺文書 E

番号	文書名	作成年代	作成・位署	形態	数量	摘要
E1	痢疫毒薬會記録	文化二年丑雨安居	瑞巖山副司寮	縦冊	1	諸役位諸儀などの書き上げ
E2	書状断簡(前後欠)「有之、尤急切之事者...」。山門修造の山林切取につき衆儀を要するの件など			状	1	
E3	(表題なし)普應園師四百五十年につき同門法類に化縁を募った書上げ	(宝暦八年三月日)冒頭の化縁を募る書状の日付	高源寺知事祖節・祖勸・明起・住持明柱(冒頭書状の差出)	縦冊	1	
E4	敕願所無縁経施主名簿	(文化六年三月如意日)弘巖玄貌による序の日付	高源寺役者	縦冊	1	
E5	勅化金出納覚	享保四年十二月二十五日	祖賢	縦冊	1	
E6	禪開策進會名刺(弘岩和尚三十三回忌之辰)	安政三年八月如意珠日	西天目瑞巖山高源禪寺知客寮	縦冊	1	法語を僧録司惟叢元弘が記す

E 31	山林境内田畑寄進状并買得證文写扣	宝永元年ヨリ	高源寺知事寮	縦冊	1	
E 30	年貢取立帳	嘉永七年十月	大槻預り	縦冊	1	
E 29	什器取調帳	明治三十五年八月三十日	天目山	横帖	1	
E 28	書籍目録	文化七年以前の作成(寛保三年か)	檜倉瑞巖山高源禪寺蔵司寮	横帖	1	
E 27	開山四百年諱香資簿	寛保三年六月二十七日	高源寺	縦冊	1	
E 26②	開基大和尚四百五十遠年諱高峯録会日子	寛政五年夏精制	副住寮	縦冊	1	
E 26①	普應国師四百五十年忌派中巡記	宝曆八年三月	高源寺知事祖冬・明起・住持(住持)明柱	縦冊	1	
E 25	開山四百五十年化縁帳	寛政元年六月	高源寺知事明祝・祖水・玄海・(住持)祖章	縦冊	1	
E 24	祖堂客殿相兼造立寄進帳之写	寛政三年六月二十七日	丹波水上郡檜倉村勸願所高源寺執事	縦冊	1	
E 23	鐵門大和尚参内扣	(宝曆七年の参内関係か)		縦冊	1	付箋「高源寺出品(印)」あり
E 22	中隆普応国師四百五十遠年諱	明和九年八月初五日〜晦日	孝法了眞信士	縦冊	1	表紙付記「京嵯峨鹿王院靈源西菴和尚招請」
E 21	籍帳	明和九年八月	丹波佐治檜倉瑞巖山高源寺	縦冊	1	法類の在籍する寺の書き上げ
E 20	會中金銀出入日記	文政十一年三月二十八日		縦冊	1	表紙付記「毎歳無縁経 大観大和尚該行二而五日拜請之節」
E 19	鐵門和尚再住高源并中興三十三年諱附録	宝曆八年二月		縦冊	1	
E 18	参内 記録	(天保十一年九月か)	下河政左衛門・役者宗环(花押)・役者普山(花押)・圓光寺正宗・高源寺濟洲	縦冊	1	
E 17	参内諸般日記	天保十一年九月三日ヨリ		縦冊	1	
E 16	弘富和尚開堂内評	(文化四年五月か)		縦冊	1	高源寺住持籍によると弘富の奉勸開堂は文化四年九月二十七日
E 15	弘巖大和尚示寂日記	文政四年五月二十七日晨八ツ時		縦冊	1	
E 14	浪花泰清卓堂和尚住山始終簿	安永十年四月初一寫		縦冊	1	
E 13	出雲守御巡在諸般記	天明七年二月十六日	高源寺知事	縦冊	1	「高源寺出品(印)」付箋あり
E 12	卓堂大和尚開堂諸般日記	(天明二年九月か)	瑞巖山書記寮	縦冊	1	高源寺住持籍によると卓堂の奉勸開堂は天明二年九月十二日
E 11	笑巖和尚入寺略清規	延享元年九月十九日	天竜第一座雲谷座元記	縦冊	1	
E 10	卓堂大和尚開堂賀儀并還札扣	天明二年九月日	瑞巖山高源寺	縦冊	1	
E 9	卓堂和尚紫衣参 内勅許日記	天明元年八月二十八日(天明六年閏十月二十三日再寫)		縦冊	1	
E 8	眞乘和尚紫衣参 内雜記	天明六年十一月吉日	丹州高源寺	縦冊	1	
E 7	泰清卓堂大和尚参内扣	天明二年九月	瑞岩山高源寺	縦冊	1	参内は天明元年十二月申

E 32	御達書并御請書	慶応三年十二月	高源寺役者寮	縦冊	1	光格天皇の即位関係
E 33	御即位安永九年と記録	安永九年十二月四日〜天明三年正月		縦冊	1	
E 34	古心菴新添寶物品	天保三年初秋	大江控	横帖	1	
E 35	紙片(メモ)「高源寺方丈棟札写／瑞巖山高源禪寺方丈梁銘並序／寛政三年壬子秋八月念七日」	昭和時代か		状	1	青垣町調査のときE37に付されたものか
E 36	眞乘大和尚遷化記録	寛政元年十一月三日	薬師院記室	縦冊	1	表紙「寛政元年西霜月三日晨八ツ時示寂」 寛政三年八月二十七日付棟札写(弘慶玄猊)。虫食いで開けず
E 37	高源方丈棟札写	寛政三年八月二十七日		縦冊	1	
E 38	(無題)「聞来半偈…」(弘慶玄猊序)	寛政六年五月	(序文は弘慶玄猊による)	縦冊	1	
E 39	高峯録会僧臘簿	江戸時代(寛政五年か)		縦冊	1	
E 40	高源遠溪禪師四百五十遠年諱香資品目	寛政五年	維那惠問「印」／侍衣□	横帖	1	
E 41	年貢米収納帳	大正八年十二月二日	表紙「瑞岩山副寺」。裏表紙「世話人／足立弥三郎／足立忠治郎」	横帖	1	
E 42	仏殿前側屋根葺替諸費控帳	明治十七年旧三月十六日〜十八日	表紙「周旋方 足立藤兵衛・茂兵衛。裏表紙「住山幽峰代(印「長岡」) 総代人・足立弥三郎・忠次郎・庄三郎」	横帖	1	
E 43	山門施餓鬼會出納簿	明治十五年陰曆七月十五日	住山幽峰會計課惠徳子	横帖	1	
E 44	達磨忌齋米野菜物到来控	明治十四年十月五日	瑞岩山高源寺副司	横帖	1	
E 45	金貨出納記簿	明治十四年十月改	西天目會計課	横帖	1	
E 46	黄白把住放行牒	大正五年一月一日	西天目副寺寮	横帖	1	
E 47	常住黄白把住放行牒	大正六年一月一日	瑞岩山副司	横帖	1	
E 0 ①	(断簡〓紙片)			状	1	
E 0 ②	(断簡〓紙片)			状	1	
E 0 ③	(断簡〓紙片)			状	1	

〔凡例〕本表は「史料細胞現状記録」をもとに作成した。

一、「文書名」は表紙に記載されたものを基本的に取り、表紙・表題のないものは内題・内容から取った。

二、「作成・位置」は表紙・裏表紙や奥書などを参考に、その文書を作成した主体を取った。

三、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は「」(「か」)で示した。



高源寺文書 H

番号	文書名	作成年代	作成・位置	形態	数量	摘要
H 1	鐵門大和尚再住山門疏	宝曆八年か	丹波州瑞巖山高源禪寺	堅冊	1	鐵門明柱は宝曆七年初住・安永二年正月十日示寂
H 2	寺社奉行裁許状	享保十一年七月二十二日	江戸幕府寺社奉行	状	2	高源寺「印」あり
H 3	開堂 法式次第	江戸時代か		堅冊	1	裏表紙「印刷佐治郡文堂」
H 4	高源寺保勝会趣意書	明治二十九年五月	高源寺保勝会	堅冊	1	開けず
H 5	同門・山門疏御様	江戸時代か	発起者	堅冊	1	開けず
H 6	高源寺保勝會加入帳	明治三十年三月日		堅冊	1	開けず
H 7	春澤座元圓寂香菜謝儀并造品贈進扣	安政四年四月五日		堅冊	1	開けず
H 8	(表題なし) 普應國師五百年遠諱募縁書	文化十三年三月日	高源寺知事義門(印)・道安(印)・玄珉(印)・住山玄親(印)	堅冊	1	開けず
H 9	(表題なし) 普應國師五百年遠諱募縁書	文化十三年三月日	同上	堅冊	1	
H 10	大峽嘉和尚津拜記録	昭和十三年五月一日	高源寺	堅冊	1	
H 11	諸借用品覚		雑務寮	堅冊	1	
H 12	羅漢供祭文・講式伽陀	文化十三年四月如意日	瑞岩山主一遺誌	堅冊	1	末尾の方に印刷された罫線紙使用
H 13	入寺披露・賀儀控	近代か		状	1	
H 14	丹波高源寺境内一覽表	近代か		横帳	1	表紙紙背に寺社奉行奉書あり
H 15	法中書状稿	江戸時代		堅冊	1	表紙付記「掛物二記之濟」
H 16	靈光會法諡録草稿		高源寺	堅冊	1	
H 17	大會名簿	明和九年秋	瑞巖山高源禪寺	堅冊	1	
H 18	高源寺年内積帳	嘉永七年十一月改	納所方	堅冊	1	
H 19 ①	高源禪寺境内井山林田畑簿	享保十五年十月五日改寫	高源寺(冒頭に「高源禪寺」印)・奥付「知庫祖玄・副寺玄牛・玄芝・祖珀」	堅冊	1	
H 19 ②	高源寺常住年内積帳	嘉永七年十一月改	高源寺納所	堅冊	1	
H 20	高源寺一般會計簿	昭和三十七年〜三十九年	代表役員記	堅冊	1	
H 21	中興十七回忌献立并人数	元文四年正月十四日		堅冊	1	中興天歳明啓の示寂は享保八年正月十四日
H 22	卓堂大和尚開堂諸般記	天明二年九月十二日		堅冊	1	
H 23	開山五百年遠諱助資□	天保十三年六月日	高源寺	堅冊	1	
H 24	禪閣策進會黃白穀把放記(弘巖大和尚三十三回遠諱辰)	安政三年仲秋□□	西天目山高源禪寺会裡副司	堅冊	1	遠忌供養の際の収支書き上げ帳

H 25	弘岳和尚開堂記	文化四年八月	高源寺	豎冊	1	E 16 参照
H 26	弘巖和尚入寺・開堂・賀誼・披露・謝儀 記録	文化四年八月十八日・九月二十七日	巖山侍者記	豎冊	1	
H 27	弘巖和尚津送之諸役記	文政四年五月末頃か		豎冊	1	
H 28	天目瑞巖山高源禪寺開堂拙語	天保十二年閏正月か		豎冊	1	弘巖玄貌の示寂は文政四年五月二十七日
H 29	高源寺保勝會應募録	明治二十九年か		豎冊	1	濟洲玄橋の開堂に係るもの 断簡あり。祠堂法各一口につき三十銭
H 30	禪關策進會名刺(開山禪師五百年遠諱之 辰)	弘化二年晚秋吉旦	西天目山瑞巖山高源禪寺知客僚	豎冊	1	
H 31	香資募縁(開山遠谿大和尚四百年諱香資 目録)	寶保三年三月日	高源寺知事祖超(印)・祖良(印)・ 祖文(印)・住山明蘭(印)	豎冊	1	
H 32	(表題なし)普應國師中峰大和尚四百五 十年遠忌化縁目録	宝曆八年三月日	高源寺知事祖節・祖勤・明超・明柱 (住持の鐵門明柱)	豎冊	1	虫食いひとし
H 33	大蔵經目録 附諸祖録	佛滅後二四四四年秋	泊松軒岩參学比丘宗格・慧寛	横帳	1	中に「朝鮮本 法善要解」あり
H 34	仏殿屋根替費帳	明治十八年九月日	留守居惠長	横帳	1	
H 35①	黄白青蚨銀札把住日記	安政三年八月如意吉辰	會中副司	横帳	1	
H 35②	賀儀并香資控(禪關策進會中)	八月十日資始	知客寮	横帳	1	
H 35③	賀儀并香資預控(禪關策進會中)	江戸末期か	副司寮	横帳	1	
H 35④	戒會飯費之控	安政三年八月十三(二十六日 未六月)〇〇日	瑞巖山典座僚	横帳	1	
H 36	新命和尚賀儀扣	明治十五年十一月二十四日會議創設 日	瑞巖山靈光會掛	横帳	1	
H 37	靈光會開設金貨出納諸般控簿	嘉永五年三月	表紙「小倉光明寺」・裏表紙「高源 住山春澤代 光明寺住眞報慈恩尼」	横帳	1	
H 38	堂供養賀誼掟	未六月二十七日	副司在番惠柱(花押)	横帳	1	
H 39	定巖和尚轉板諸拂扣帳	大正九年四月	知客寮受付	横帳	1	
H 40	黄白受納簿	天保八年七月吉旦	戒徒係	横帳	1	
H 41	本戒飯米領収帳	天保十二年丑九月	西天目副主	横帳	1	
H 42	萬福収同記		高源寺副主寮	横帳	1	大工屋・瓦屋業種別に構成
H 43	諸堂修葺并遠諱用萬貫帳			横帳	1	
H 44	(表題なし)高源寺諸寶物目録			横帳	1	
H 45	法燈庵安政四巳年ヨリ元治元子年迄借用 差引并二田地向共取調仕方帳	元治元年十二月	法燈庵宗富淨桂・同庵世話人治兵衛 他六名	横帳	1	
H 46	黄白把住放行記	明治三十九年一月吉旦	瑞岩山副寺控	横帳	1	

H 47	断簡多数					
H 48	授戒中金銀把住放行誌	近代	副司寮	横帳	1	
H 49	開山忌及無縁経会把住放行誌	大正五年四月二十六日		横帳	1	
H 50	(表題なし) 佛光寺取替大工日数入用帳	八月四日		横帳	1	
H 51	會計概略予算簿	明治十七年十一月日	表紙位署「會計掛・足立忠治郎・足立弥三郎・足立德三郎・足立庄三郎・足立定右衛門」。裏表紙「高源寺」	横帳	1	
H 52	(表題なし)「亥年書改」一 五本人扇子 承并御札」			横帳	1	
H 53	什器取調帳	明治三十五年八月三十日	西天目峰	横帳	1	
H 54	諸般買物覚帳	文化四年四月日	高源侍者寮	横帳	1	
H 55	毎年諸拂請所帳	天保十一年十二月吉日	西天目副寺僚	横帳	1	
H 56	年貢米取納帳	大正二年十二月七日	瑞岩山副司	横帳	1	
H 57	年貢米取納控	明治四十五(大正元)年十二月七日	世話人・足立弥三郎・忠治郎	横帳	1	
H 58	年貢米取納帳	大正九年十一月二十八日	瑞岩山副寺	横帳	1	
H 59	開山忌及無縁経会把住放行記	大正六年四月二十六日		横帳	1	
H 60	開山忌及無縁経会把住放行記	大正八年四月二十六日		横帳	1	
H 61	檀信徒四季到来控	大正六年十二月十三日		横帳	1	

〔凡例〕 本表は「史料細胞現状記録」をもとに作成した。

一、「文書名」は表紙に記載されたものを基本的に取り、表紙・表題のないものは内題・内容から取った。冒頭の書き出しを示したものもある。

二、「作成・位署」は表紙・裏表紙や奥書などを参考に、その文書を作成した主体を取った。

三、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は「」(「か」)で示した。

高源寺文書 1

番号	文書名	作成年代	作成・位置・差出および宛先	形態	数量	摘要
I 1	一札之事	正徳六年閏二月八日	檜倉村本山主宇右衛門(印)他二名↓高源寺御役者 禪師	状	1	端裏書「厲谷山讓状」
I 2	譲り申山之事	正徳五年未二月二十七日	佐治はりまや久右衛門(花押)↓檜倉村清右衛門殿	状	1	端裏書「ゆりの上山讓状」
I 3	寄進申一札之事	寶永五年十一月十四日	檜倉村庄屋清兵衛(印)他二名↓高源寺知事虎山禪師・一寶禪師	状	1	端裏書「山讓証文/銀四拾匁/一宝座元寄附新右衛門」
I 4	請取申銀子之事	正徳六年四月十三日	檜倉山主伊兵衛(印)他二名↓高源寺御役者禪師	状	1	
I 5	寄進状之事	宝永七年九月二十三日	同村寄進主同村宇右衛門(印)他証人一名↓檜倉村高源寺役者禪師	状	1	端裏書「山讓り證文/檜倉宇右衛門」
I 6	寄進状之事	享保八年卯二月日	佐治はりまや九平治(印・母(印))↓檜倉村高源寺様副寺禪師	状	1	裏書あり(副寺玄賢「花押」)。また封紙によればこれとセットの「當村田地讓状」もあり
I 7	預り申祠堂銀之事	享保十七年壬子二月十九日	□主傳左衛門(印)他三名↓高源寺御役者禪師	状	1	封紙「百拾五匁 讓状 傳左衛門」
I 8	山林寄進證文(封紙上書)	(享保十四年以前)	嘉右衛門(宛所不明)	封紙	1	本紙なし。包紙には鉄山(花押)の注記あり
I 9	一札之事	享保二年十二月五日	檜倉村寄進主傳左衛門(印)他証人一名↓高源寺副寺禪師	状	1	
I 10	一札之事	正徳六年丙申閏二月八日	檜倉村本山主宇右衛門(印)他二名↓高源寺御役者禪師	状	1	端裏書「雁谷山讓状 宇左衛門・嘉兵衛・勘兵衛」
I 11	一札之事			状	1	端裏書「治郎右衛門佛光寺屋敷之代り二大道はた荒地預置」
I 12	譲り渡申畑之事	寛政三年十二月日	檜倉村地主定四郎(印)他二名↓高源寺様納所様	状	1	
I 13	林山譲り渡證文之事	享保元年三月日	高源寺副主(印)他年寄・庄屋二名↓佛光寺知事禪師	状	1	
I 14	譲渡申山之事	文政六年二月日	山主高源寺役者(印)他年寄・庄屋二名↓佛光寺	状	1	端裏書「山 百五拾目 太四郎」
I 15	譲渡林山之事	宝曆四年三月日	檜倉村山主太四郎(印)他証人・庄屋二名↓高源寺知事禪師	状	1	
I 16	覚	享保七年二月日	佐治さしや仁右衛門↓檜倉村高源寺様	状	1	
I 17	永久譲申林山之事	元禄拾年丑ノ六月二十八日	檜倉村賣主仁右衛門親。新右衛門(印)他三名↓當村忠兵衛殿	状	1	宝永三年九月二十五日の住持天藏(印)の奥書アリ
I 18	賣渡山林之事	享保十五年十月五日	當村賣主仁左衛門(印)他四名↓高源寺知事禪師	状	1	本紙なし
I 19	森村畑譲り證文一札(封紙上書)	文化八年十二月	檜倉村地主高源寺他年寄・庄屋二名↓市原村政右衛門殿他一名	封紙	1	端裏書「文化八年未二月日 水座畑 市原村江讓り證文」。包紙一枚あり
I 20	譲り渡シ申替地之事	文化八年二月日		状	1	

I 39	譲り證文之事	寛政十二年十二月日	檜倉村地主甚兵衛(印)他年寄・庄屋二名↓高源寺御納所様	状	1	虫食いひどし
I 38	寄進状之事	享保八年七月二十七日	施主檜倉村清左衛門(印)↓高源寺副寺禪師	状	1	享保十年三月十六日副寺玄霞の奥書と日付不明の同奥書あり
I 37	山林寺所寄進状并古證文二通		佐治界□仁右衛門↓(宛所不明)	包紙	1	
I 36	相渡申畑之度	宝曆八年十一月日	檜倉邑讓主長九郎(印)他四名・檜倉邑高源寺御役者様	状	1	端裏書「下畑菅反巻畝ノ三拾四匁五分 長九郎」
I 35	壳渡山林之事	宝曆十年十二月二十日	當村賣主清七(印)他四名↓高源寺様御役者衆中	状	1	端裏書「林山七拾三匁 清七」
I 34	譲り畑之事	寛政十年正月日	檜倉村地主武右衛門(印)他二名↓佛光寺様	状	1	
I 33	譲り證文之事	文化六年閏十二月日	檜倉村地主茂右衛門(印)他四名↓同村佛光寺御納所様	状	1	
I 32	譲り渡申畑之事	天保八年十二月日	檜倉村讓主高源寺他請人・庄屋二名↓稻土村壇判之助殿	状	1	端裏書「水座譲り證文一札」
I 31	相渡申畑之事	宝永二年十二月十四日	佐治町播磨屋久右衛門判↓檜倉村仏光寺内測室老	状	1	写し
I 30	譲渡申田畑樹木之事	元文四年十二月二十一日	證人久七郎(印)↓高源寺役者禪師	状	1	端裏書「畠讓狀 傳左衛門」
I 29	相渡申田畑之事	宝永二年十二月十四日	佐治町播磨屋久右衛門判他三名↓檜倉村仏光寺内測室老	状	1	文書二通の写しだが二通目は大破して読めず
I 28	拾ヶ年切證文一札之事	明治二年七月日	檜倉村本人代善右衛門(印)他三名↓同村高源寺様	状	1	端裏書 同右
I 27	為取替證文之事	寛政十二年十一月日	組頭甚左衛門(印)他七名↓高源寺様御役者中	状	1	端裏書「字寺通り 百四十式番 高源寺」
I 26	五田切渡候田地事	寛延三年十二月日	檜倉村地主重左衛門(印)他年寄・庄屋二名↓高源寺役者禪師	状	1	端裏書(付箋あり)「□崎小畑式拾匁」
I 25	譲渡シ申畑木藪共不残	寛政六年八月日	檜倉村畑譲り主達右衛門(印)他年寄・庄屋二名↓高源寺様	状	1	端裏書「地藏尊地面証文村達右衛門 高源寺」
I 24	譲渡田地証文一札		檜倉武右衛門↓(宛所不明)	封紙	1	本紙なし
I 23④	寄進仕川原荒之事	享保二年十二月五日	檜倉村寄進主伊兵衛(印)他二名↓高源寺副寺禪師	状	1	
I 23③	寄進仕川原荒之事	享保二年十二月五日	檜倉村寄進主源兵衛(印)他二名↓高源寺副寺禪師	状	1	
I 23②	一札之事	享保二年十二月五日	檜倉村寄進主伊兵衛(印)他証人一名↓高源寺副禪師	状	1	
I 23①	一札之事	享保二年十二月五日	檜倉村寄進主源兵衛(印)他証人一名↓高源寺副寺禪師	状	1	端裏書「明細帳九區 字新田 紙数四枚在中 高源寺」
I 22	指上申一札之事	宝曆七年四月日	惣持村八左衛門(印)他二名↓檜倉村高源寺御役者中	状	1	
I 21	譲り渡シ申替地之事	文化八年二月	畑主市原村藤兵衛(印)他四名↓檜倉村高源寺	状	1	

I 60	鷹谷かりう畑之事	享保二十年五月二十六日	畑替へ主善吉(印)他証人など四名↓高源寺役者禪師	状	1	端裏書「讓證文 善吉畑替證文」
I 59	奉申上口上覚	寛政十一年十一月二日	槍倉村高源寺↓田辺與左衛門殿・片岡□左衛門殿者	状	1	封紙上書「上一寺屋 高源寺」
I 58	譲り渡シ申田畑山林樹木之事	宝永七年七月十三日	譲り主佐治仁兵衛(印)他一名↓槍倉村高源寺御役者	状	1	端裏付箋「字辻九十六番 明細帳之表三反字
I 57	畑譲り渡シ証書	明治十六年旧八月十二日	御住職幽明大和尚様他惣代三名	状	1	文書の写
I 56	寄進状之事	宝永元年三月日	当村嘉右衛門(印)↓高源寺知事禪師	状	1	
I 55	讓渡申田地之事	宝曆三年十二月二十日	槍倉村地主太四郎(印)他証人・庄屋二名↓高源寺副寺禪師	状	1	端裏書「百三拾九匁 太四郎」
I 54	讓切り相渡申畑之事	宝曆十二年十二月日	讓主間甚九郎(印)他三名↓高源寺様御役者衆中	状	1	端裏書「甚九郎」
I 53	田畑樹木讓状之事	享保元年十二月二十五日	俸長次郎(印)他五名↓高源寺御役者禪師	状	1	裏に付箋あり。また天藏明啓の奥書もあり
I 52	畑質物一札之事	天保九年十一月□日	槍倉村借用主證人佛光寺・高源寺・年寄・店屋↓□村伊左衛門殿	状	1	
I 51	寄進状之事	正徳六年閏二月八日	佐治町□戸屋(印)他一名↓槍倉村高源寺御役者禪師	状	1	奥裏書「久左衛門」
I 50	讓渡候林山之事	宝曆四年三月日	槍倉村山主加七郎(印)他二名↓高源寺知事禪師	状	1	端裏書「山三百匁 加七郎」
I 49	讓渡申田地之事	宝曆七年□月二十日	槍倉村地主加七郎(印)他二名↓高源寺副司禪師	状	1	端裏書「銀四拾五匁加七郎」
I 48	讓切二相渡申畑之事	嘉永四年十二月日	槍倉村地主年寄宗七(印)他二名↓高源寺様	状	1	
I 47	讓渡申山林之事	宝永七年八月二十七日	山主當村八兵衛(印)他四名↓高源寺役者禪師	状	1	端裏書「山林 八兵衛」。また天藏明啓の裏書あり
I 46	讓渡証文之事	明治二年十二月日	槍倉村肝煎嘉太郎孫嘉七郎(印)他二名↓槍倉高源寺御役者中	状	1	
I 45	当地證文之事	寛延四年二月二十四日	地主傳左衛門(印)他二名↓高源寺副司禪師	状	1	端裏書「傳左衛門」
I 44	讓渡申山之事	文政六年□月日	山主佛光寺他↓□(高源か)寺	状	1	虫食い酷し
I 43	山林替地證書	明治十六年九月	槍倉村足立忠次郎(印)他二名・立會中↓高源寺御住職長岡幽峰殿	状	1	
I 42	末々流切相渡シ申畑并山林敷之事	宝曆十年十二月日	森山村本人庄屋勘右衛門他四名↓明禪寺御納所	状	1	
I 41	添証文一札之事	安永七年十二月日	御役者衆中	状	1	
I 40	寄進状之事	正徳六年四月十三日	山主槍倉村伊兵衛(印)他二名↓高源寺御役者禪師	状	1	端裏書「代銀七十五匁二而買求者也 天岩老納」

I 61	一札	寛延二年六月	稻土村本人利兵衛判他庄屋・年寄二名↓(宛所不明)	状	1	文書の写し
I 62	寄進仕川原荒地之事	享保四年四月五日	檜倉村寄進主治左衛門(印)他年寄・庄屋二名↓高源寺副寺禪師	状	1	
I 63	寄進状之事	正徳六年閏二月八日	佐治町はりまや久右衛門(印)他一名↓檜倉村高源寺役者禪師	状	1	虫食い酷し
I 64	譲り渡し申田畑之事	文化七年十一月日	森村田畑譲り主甚兵衛(印)他年寄・庄屋二名↓檜倉村武右衛門殿取次	状	1	封紙上書「小倉村田地買得證書巻通」高源寺前住弘蔵。本紙に弘蔵(印)の裏書あり
I 65	(二字札 伝授につき書状)	文政九年八月	賜紫志明院法印大僧都(花押)↓長學院殿	状	1	
I 66	譲り渡し申山之事	寛政十二年十一月日	組頭甚左衛門(印)他七名↓高源寺様御役者中	状	1	封紙上書「山三カ所當村と譲渡證文」一札副寺梁翁代
I 67	譲り渡し申山之事	寛政十二年十一月日	組頭甚左衛門(印)他七名↓高源寺様御役者中	状	1	封紙上書「譲り渡し申山之一札 檜倉村」
I 68	寄進状之事	寶永三年八月二十六日	寄進主同村忠兵衛(印)他一名↓檜倉村高源寺虎山様	状	1	本紙に天蔵明啓(印)の裏書あり
I 69	相譲り申田島之事	享保八年三月十六日	佐治町地主はりまや儀左衛門(印)他年寄・庄屋二名↓「はりまや九吉	状	1	封紙あり
I 70	譲り田地之事	寛政十年正月日	檜倉村地主武右衛門(印)他二名↓高源寺御役者様	状	1	
I 71	寄附仕田畑山林木之事	宝永七年七月十三日	寄附主佐治大坂屋仁兵衛(印)他一名↓「檜」倉村高源寺役者禪師	状	1	端裏書「讓状佐治町大坂屋仁兵衛」
I 72	地所買得證書六通入		第十八大區五小區檜倉村高源寺↓(宛所不明)	包紙	1	
I 73	祠堂田畑記	(元文五年四月二十七日)		縦冊	1	
I 74	(表紙欠 禁裏上納品の控え帳)			縦冊	1	
I 75	年貢米取納帳	明治四十三年十一月二十四日	裏表紙「世話人/足立弥三郎/足立忠治郎」	横帳	1	
I 76	年貢米取納帳	明治四十四年十一月二十八日	裏表紙「世話人/足立弥三郎/足立忠治郎」	横帳	1	
I 77	耕地小前分作取納帳	明治十六年旧十月二十三日	表紙「西天目瑞嶽山租税課。裏表紙「租税課員足立弥三郎/足立忠治郎/足立庄三郎」	横帳	1	
I 78	年貢取納帳	明治四十二年十一月二十一日	表紙「高源寺納所。裏表紙「世話人足立幸七・足立忠右衛門」	縦冊	1	
I 79	年貢取立帳	明治二年十月日	表紙「高源寺納所。裏表紙「世話人足立幸七・足立忠右衛門」	縦冊	1	
I 80	田畑預ヶ口秋納帳	天保十一年月日	表紙「葉師院」	縦冊	1	
I 81	年貢米取納帳	明治四十二年十月二十六日	裏表紙「岩山世話人/足立弥三郎・足立忠治郎」	縦冊	1	
I 82	耕地小前分作取納簿	明治十四年十月七日	表紙「西天目幹事」。裏表紙「耕地掛 足立彌三良・足立忠治良・足立庄三良」	縦冊	1	

I 83	一ヶ年限田畑自預ケ作得記	明治三年	表紙「住職雲溪／周旋方足立幸七・足立忠右衛門／高源寺監事談・都司善」	横帳	1	
I 84	断簡（「確取……」）	明治時代か		状	1	
I 85	年貢取立帳	明治元年十月日	表紙「高源寺納所」。裏表紙「世話人足立幸七・足立忠右衛門」	縦冊	1	
I 86	弘岩法子田井谿耘立名田	壬申（明治五年か）十二月日	法子靈溪 持	横帳	1	本文中の慶雲は谿耘か
I 87	年貢取納帳	明治六年十二月日	表紙「瑞岩山園頭寮」。裏表紙「周旋方 足立幸七・忠右衛門」	横帳	1	
I 88	断簡（付箋）「式斗……」			状	1	
I 89	一ヶ年限田畑自預ケ作得記	明治六年	表紙「住職雲溪／周旋方足立幸七・足立忠右衛門／高源寺監事談・都司善」	横帳	1	
I 90	年貢取納帳	明治三年十月	表紙「檜倉村高源寺納所寮」。裏表紙「檜倉村世話人足立忠右衛門・足立幸七」	横帳	1	
I 91	年貢取立帳	慶応二年十月日	表紙「高源寺納所」。裏表紙「世話人足立忠右衛門・足立幸七」	横帳	1	
I 92	會計概略豫算簿	明治十七年十一月日	會計掛足立忠次郎他四名	横帳	1	
I 93	弘蔵法子田井谿耘立名田	明治六年	法子雲溪 持	横帳	1	
I 94	下作年貢取納帳	明治四年十月二十一日	表紙「高源寺庫司」。裏表紙「世話方足立忠右衛門・足立幸七」	横帳	1	
I 95	田畑山林賃捌長（ママ）	明治十八年十二月日	高源寺惣代中	横帳	1	
I 96	年貢米取納牒	明治四十年十月二十三日	世話人足立弥三郎・足立忠治郎	横帳	1	
I 97	散田取立控帳	文政十三年十月日		横帳	1	
I 98	田畑年貢取納控	明治三十九年十月十四日	當直世話人 足立弥三郎・足立忠治郎	横帳	1	
I 99	田畑年貢取納控	明治三十七年十月二十日	表紙「高源寺納所」。裏表紙「世話人足立忠右衛門・足立幸七」	横帳	1	
I 100	年貢取立帳	明治五年十月二十二日	表紙「瑞岩山高源寺納所」。裏表紙「周旋方足立幸七・足立忠右衛門」	横帳	1	
I 101	手作種物雜穀取入帳	明治四年春二月日	高源寺園頭寮	横帳	1	
I 102	田畑年貢取納牒	明治三十六年旧十月十四日	世話方足立嘉助・足立忠三郎（印）	横帳	1	
I 103	所有田畑年貢取納牒	明治三十五年十二月十日	世話方足立弥三郎・忠二郎・定右衛門	横帳	1	
I 104	田畑年貢取納控	明治三十八年十月二十七日	當直世話人足立治次郎・足立弥兵衛	横帳	1	
I 105	田畑手作下作覚帳	嘉永二年十月	表紙「高源勘定所」。裏表紙「世話人足立幸七・足立勘兵衛」	横帳	1	



I 107	地券 断簡(紙塵)	明治十年九月二十日	兵庫県(印)↓高源寺	状	24	
I 106	断簡(紙塵)			状	1	

〔凡例〕本表は「史料細胞現状記録」をもとに作成した。

一、「文書名」は表紙に記載されたものを基本的に取り、表紙・表題のないものは内題・内容から取った。

二、「作成・位置・差出および宛先」は表紙・裏表紙や奥書などを参考に、その文書を作成した主体を取った。そして、書状類は「作成者↓宛所」の形で便宜記している。

三、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は〔 〕〔 〓か〕で示した。

### 高源寺文書 J

番号	表題・「書き出し」・内容	年代	作成・位置	形態	数量	摘要
J 1	断簡。漢詩の手習い		祖功	状	1	
J 2	〔石歳首之賀詞申上度、御侍立之御宜敷御奏上奉願上候、 …〕	人日(陰曆正月七日)	祖沅(花押)↓高源文方大和尚	状	1	前欠
J 3	役銀の書き上げ	酉歳元旦	大西有慶ほか四名	状	1	紙背あり
J 4	断簡。習字・落款の手習い			状	1	
J 5	書状の断簡(前欠・後欠)			状	1	
J 6	断簡。漢詩の草案			状	1	
J 7	断簡。漢詩の草案			状	1	
J 8	断簡。「斗」(一字の部分?)のみ見える			状	1	
J 9	書状断簡。暑中見舞いか	六月七日	□□新御房↓長學院普山大和尚	状	1	
J 10	書状断簡。余白に漢詩の草案あり		祖功↓首座禪師	状	1	
J 11	〔巡行次第〕として「残金」「開山遠忌香資」の勘定。弘岩和尚あて書上げか			状	1	J 27と関連か
J 12	書状(前欠)。弘岩和尚の一昨年大病全快を祝うなどの内容	七月廿日	明榮↓弘巖老和尚	状	1	
J 13	断簡。元日の漢詩か			状	1	裏に「福」の字
J 14	書状	仲春十六日	慧開	状	1	
J 15	断簡。漢詩の草案・手習い		祖功	状	1	
J 16	断簡。漢詩の草案か			状	1	

J 47	書状断簡。祖功が依頼した漢詩の添削に関するもの		十月五日	(草名にて差出人不明)	状	1	
J 18	断簡。漢詩の手習いほか、数通はりつき				状	1	紙背あり
J 19	断簡。二通はりつき			滄海夢(宣) 運(高) 源堂上和尚	状	1	
J 20	断簡。漢詩の草案か				状	1	
J 21	断簡。結制・乗拵などのことに関する書状(前欠・後欠)				状	1	
J 22	断簡。節句の漢詩の草案など。三通はりつき				状	1	
J 23	断簡。「業料覚」の文言あり。支出金の書き上げ				状	1	
J 24	断簡。冬至の漢詩の草案など。数通はりつき				状	1	
J 25	断簡。「再白、御席之節一座并檀徒中……」。二通はりつき				状	1	
J 26	断簡				状	1	
J 27	断簡。開山大和高四五〇年遠忌の件など。数通はりつき		寛政五年か		状	1	
J 28	封紙断簡			朝倉内後藤□↓長學院	状	1	
J 29	封紙断簡			長學院あて	状	1	
J 30	封紙断簡		卯月十五日	黒沢万治↓長學院老和尚	封紙	1	
J 31	封紙断簡			圓光寺侍者↓幸神社長學院	封紙	1	
J 32	封紙断簡		七月十一日	玄猷↓普山座元禪師	封紙	1	
J 33	断簡。「借用一札並通」			長學院	状	1	
J 34	断簡(漢詩の手習い)。「雪韻箱……」				状	1	
J 35	書状断簡(後欠)。「当夏ハ開祖御年忌ニ付……」の文言あり				状	1	
J 36	書状(漢詩添削の依頼)。「妙音奏出沒鼓琴……」			全提↓(宛所不明)	状	1	
J 37	書状断簡(前欠後欠)。「又ハ松本地藏院……」				状	1	
J 38	断簡。漢詩の草案か。「寒林春満 緑新鮮……」				状	1	
J 39	書状断簡(後欠)。「口上ノ一筆申上候……」。書面に海眼老和尚・同安・龍谷寺が見える				状	1	
J 40	封紙断簡			越後智願↓丹波高源堂頭老和尚	封紙	1	
J 41	書状断簡(前欠)。「祖山静々……」		十一月六日	南禅□□祖露白↓高源寺知事禪師	状	1	
J 42	漢詩書き付け(文集の草案か。前欠)。「海上名山雪露開……」				状	1	
J 43	書状断簡(前欠・後欠)。「二白申上候……」				状	1	
J 44	断簡(漢詩の手習い)。「金連座下……」				状	1	
J 45	断簡(漢詩の手習い)。「已通一氣……」				状	1	紙背あり
J 46	断簡(漢詩手習い)。「……高韻ノ……春色開」				状	1	紙背あり



J 94	断簡。「釘代」「切石代」など見え、J 91と同内容か。なお「永明座元」と見える			状	1	同右
J 93	断簡。「…年寅／…月十五日記之／…建立牒」。J 91と同内容			状	1	同右
J 92	断簡。「…福當銀二而相濟シ申候」で終わる。J 91と同筆・同内容			状	1	J 91と一続き
J 91	断簡。「木挽二十六コ半善二郎」ほか大工と思しい人間を書き上げる			状	1	
J 90	断簡。「但」のみ			状	1	
J 89	白紙			状	1	
J 88	白紙			状	1	
J 87	書状断簡(漢詩の添削を依頼したものか)。「…啼鶉展／…」		祖功↓(宛所不明)	状	1	
J 86	漢詩。「除夕／誰言歲月驟駒馳…」		玄観(花押)	状	1	
J 85	漢詩。「歳旦／阿歳暗分一衲衣…」		玄観(花押)	状	1	
J 84	断簡(漢詩の手習いか)。「天台天…」			状	1	
J 83	断簡(漢詩の草案か)。「至日／春心寒…」			状	1	
J 82	白紙			状	1	赤い沁みあり
J 81	断簡。「身自勤行志／十卷 護守本尊願志」。また「弘蔵和尚」と見える			状	1	J 67と一続きか
J 80	断簡(漢詩・習字の手習いか)。「逢秋」			状	1	
J 79	白紙			状	1	
J 78	断簡(習字の手習いか)			状	1	
J 77	断簡(漢詩の手習いか)。「磨墨虚」			状	1	
J 76	断簡(漢詩の手習いか)。「萬戸張…」			状	1	
J 75	書状断簡。最後の紙か。「不自由勝…」		全白↓(宛所不明)	状	1	
J 74	書状断簡。最後の紙か。「不自由勝…」	□月梅日	之敬↓高源老和尚	状	1	
J 73	断簡(漢詩の手習いか)。「至日眺…」			状	1	
J 72	断簡(漢詩の手習いか)。「塗其未…」			状	1	
J 71	断簡。和歌の解説。「観音乃若より出し百とせの…」			状	1	

J 120	書状断簡(前欠・後欠)。「…庵中皆々随分息才…」				状	1	
J 119	断簡(封紙か)。「龍淵」大書				状	1	
J 118	書状断簡(前欠)。弘岩滞留の件などにつき	十一月五日		開福庵(花押)↓梵伽藏主・良覚道者	状	1	
J 117	書状断簡(前欠)	三月十一日		道欽↓高源寺老和尚	状	1	
J 116	書状断簡(後欠)。公儀寺院人別改につき				状	1	
J 115	書状断簡(前欠・後欠)				状	1	
J 114	鋳物師引札(広告)			大坂生玉中寺町筋たしま町中ほど東が八山本佛 具屋佐兵衛	状	1	刷り物
J 113	借用証文	文政十丁亥年三月十八日		幸神社長學院義門(印)↓平井利兵衛殿	状	1	
J 112	断簡。「口上」今度塔再建九輪鋳直候に付…。予算一覽および寄進召集				状	1	J 91以下と一連のもの
J 111	書状(漢詩の添削を依頼したもの)断簡			紹珠↓(宛所不明)	状	1	
J 110	断簡。「室」大書(封紙の再利用)				状	1	J 107に続く
J 109	断簡。「伽」大書			玄鉞(花押)↓長学主盟禪師	状	1	
J 108	書状(年頭諸色取調につき)	正月十六日			状	1	J 109に続く
J 107	断簡。「伽」大書				状	1	
J 106	書状(印形返還相済の儀につき)	四月廿二日		養清文銀↓普山老和尚	状	1	
J 105	借用状(後欠)。「借用申金子之事」				状	1	
J 104	折禱書。「奉前啓行神 御祈禱。某女性の道中安全を祈願	文化十一年十月吉祥日		幸神社長學院	状	1	
J 103	書状(高源寺の義につき)。「おふみのやうはい見いたし候				状	1	
J 102	包紙	八月廿七日		大阪水元寺↓京都寺町通り今出川幸神社長學院 大阪水元寺↓京都寺町通り今出川長学老和尚 ミね岸部や↓長學院殿	状	1	
J 101	包紙(香典を送ったときのもの)	閏八月廿四日			状	1	
J 100	軸の耳				木	1	
J 99	断簡。「一、武文六□」とあり				状	1	J 98と一連のもの
J 98	断簡。「一、同拾九文七百七十」とあり、造営工事の支払金 か出資金を示すものか				状	1	J 91以下と一連のもの で、同じ帳物の上半分 に当たる
J 97	封紙断簡か。「□(水)元寺」				状	1	
J 96	断簡。「菅原源三郎へ/繩三束代/瓦代/…」				状	1	同右
J 95	断簡。「百三拾目」。また「是ハ辰ノ二月十九日」ともある。 J 91と同内容				状	1	同右

J 148	断簡。「御式方様御星祭／金式百疋」(星祭り祈禱二人分の費用か)	亥正月日	玉揚	状	1	
J 147	書状	廿四日	祖悦↓普山様侍師	状	1	祖悦の道号は沢雲
J 146	星祭御祈禱寶牋		御祈禱所長學院	状	1	
J 145	書状(未歳星祭りにおける某人三名の祈禱に付き)		玉はしたき川↓幸神長學院	状	1	
J 144	書状(前欠・後欠)。「御問條旁草書拜呈可仕候」	閏月廿日	泰清寺文紹(花押)↓普山座元禪師	状	1	
J 143	断簡。「寸椿拝寛仕候」			状	1	
J 142	封紙断簡		丹州黒川大明寺↓京都幸神社長學院	状	1	
J 141	書状。「高源中興天岩大禪師百年忌」	文政六年か	玄賢禪学↓(宛所不明)	状	1	
J 140	封紙	□(二か)月三日	桧倉仏光寺慈恩↓京都幸 <sup>トモ</sup> 神長學院	封紙	1	
J 139	封紙	十二月二十五日	瀧川↓幸の神社長學院	封紙	1	
J 138	書状。「御翰致番誦」(御判物頂戴ノ祝儀二付)		圓光寺↓(宛所不明)	状	1	裏花押あり
J 137	封紙断簡	八月晦日	瀧川↓長學院	状	1	J 139より続く
J 136	書状「先達而ハ御納」(御初尾につき返答)			状	1	後欠
J 135	書状断簡。「新年之徳陽千里同風」(新年挨拶)			状	1	
J 134	断簡(書状の手習い)。「祝座元」(玄祝か)			状	1	
J 133	断簡。「三應寮」大書(寺内の張り紙用の習作か)			状	1	
J 132	書状断簡(二枚貼継)「別口上」。「別紙拙者去年の春より去秋より全快」			状	1	貼継一枚
J 131	封紙		高源寺↓京都今出川幸神町長學院	封紙	1	
J 130	封紙断簡		攝州兵庫門口町福厳寺↓幸神社長學院知事禪師	封紙	1	
J 129	書状(銀子返納につき)	七月廿日	□□□□↓長學院	状	1	
J 128	封紙断簡		大阪玄□↓普山和尚	状	1	
J 127	封紙断簡か。「山口屋三右衛門」			状	1	
J 126	書状断簡(前欠・後欠)。「対面も不相叶」			状	1	貼継一枚(白紙)
J 125	書状断簡(後欠)。「大火後万事御納戸何事も」			状	1	貼継一枚(虫食蝕し)
J 124	書状断簡(後欠)。「車身拝啓座下湿暑」			状	1	
J 123	口上書。「口上」□□役」		金福寺↓長學院	状	1	
J 122	封紙断簡か。「添施餓鬼 嚙儀」			封紙	1	
J 121	封紙断簡か		大ひえ又↓母	封紙	1	J 120の包紙か

J 174	書状。「式翰敬拝呈候...」。暑中見舞い。	林鐘(六月)初八日	玄珉(花押)↓福巖老和尚	状	1	
J 173	書状草案。「林鐘十日之宝翰、夷則初七日...」。上京保養につき取計依頼の件			状	1	
J 172	書状。「単簡拜呈...」。龍勝会会中にて発病の件につき。「東山圓光寺法縁」などの文言も見える。	八月三日	長學院義門(花押)↓東光文室和尚	状	1	J 181はこの写し
J 171	書状断簡。「奠祝上/開端...」		幸神社長學院	状	1	
J 170	断簡(折禱札の下書き)。「卯御年御方/御臨月御祈禱」			状	1	
J 169	書状断簡(後欠)。出火につき急便			状	1	
J 168	書状断簡(御礼敬物・進物などのこと)			状	1	
J 167	書状(漢詩添削の依頼)。「送老師還京/生玉法雲山上横/...」		祖令↓(宛所不明)	状	1	
J 166	断簡。「半」「菅濟/正月」とのみ見える。J 164の上半分			状	1	J 64より続く
J 165	断簡。「冬至結制大應」とあり			状	1	
J 164	断簡。「拂」「十四日也」とのみ見える。J 66の下半分			状	1	J 66に続く
J 163	封紙断簡		大阪生玉↓京幸神社長學院	状	1	
J 162	断簡。「借用户覚書」	寛政九年十月二十四日		状	1	
J 161	断簡(漢詩の草案か)。「巧夕/微涼生也火雲□[消か]/...」			状	1	
J 160	書状断簡。「...湯...」			状	1	
J 159	白紙			状	1	
J 158	書状断簡(漢詩の添削を依頼したものか)			封紙	1	右上隅別紙はりつく
J 157	封紙。「上/さとうしょうが」		不生↓(宛所不明)	封紙	1	
J 156	封紙断簡		播州明楽寺村今村三右衛門↓高源寺大和尚様	封紙	1	
J 155	断簡。「拜晋南帅 玄益」		玄益	状	1	
J 154	断簡。「一、米一升...」。寄進帳簿か			状	1	
J 153	断簡(手習い)。「濃州州可尼明鏡寺徒.../真乘和尚十七回忌」			状	1	
J 152	断簡。「借用一札」の包紙に諸経費の控えなどを書付け		幸神長學院義門↓(宛所不明)	状	1	
J 151	断簡(代金請取帳)。J 177とセットなら宿帳。請取確認は黒印「長學院」		長學院	状	1	J 177とセットか
J 150	封紙断簡		文啓↓(宛所不明)	状	1	
J 149	封紙断簡		泰清寺↓長學院普山座元禪師	状	1	

J 175	書状草案か(途中で切れる)。「謹白/以愚翰奉御申上候」	六月朔日	幸神社義門(花押)↓宇津木如之介	状	1	
J 176	書状断簡	孟正月初三日	全巴↓普山老和尚	状	1	
J 177	断簡。「文政三庚辰年/宿料通」(「長學院」の黒印あり)	文政三年		封紙	1	J 151とセットか
J 178	書状断簡	閏八月廿日晚	泰清寺/永元寺↓高源役者禪師	状	1	
J 179	封紙		花園普明院宗珍↓大徳寺中松林院天長隠師和尚	封紙	1	
J 180	書状。「おふみのやうはい見…」		花園部や↓長覚院殿	状	1	
J 181	書状写し(J 172の書写)	八月三日	長學院義門(花押)↓東光文室和尚	状	1	J 172の写し
J 182	封紙(「豆腐…」など書の手習いもあり)		丹州高源寺玄琅↓上京幸神社普山老和尚	封紙	1	
J 183	断簡(包紙か)。「円光寺一件書付入」			封紙	1	
J 184	借用申銀子之事	文化四年十二月日	借主幸神長學院頑石「印」/法印全福寺省方「印」↓井筒屋平兵衛	状	1	
J 185	断簡(宿料通の断簡か)。「長學院」「長學院」黒印「…」紙背は「廿二才女/御祈禱料」			状	1	紙背あり。J 151・J 177とセットか
J 186	断簡(勘定書上)			状	1	
J 187	封紙断簡			状	1	
J 188	乍恐奉願上候口上覚(京都への托鉢の際の宿院指定の件に関する口上書の控え)		(差出不明)↓京都□(檀か)ノ上幸神社義門 織田出羽守下丹波水上郡檢倉村高源寺印	状	1	
J 189	覚書き断簡。「覚/一、金子五匁…」。「義門」の印あり	文政六癸未年	長學院住職□□(義門か)「印」	状	1	J 137に続く

〔凡例〕

本表は「史料細胞現状記録」をもとに作成した。

一、「文書名」は表紙に記載されたものを基本的に取り、表紙・表題のないものは内題・内容から取った。

二、「作成・位署・差出および宛先」は表紙・裏表紙や奥書などを参考に、その文書を作成した主体を取った。そして、書状類は「作成者↓宛所」の形で便宜記している。

三、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は「」(「か」)で示した。

四、本表作成に当たり、木村直樹氏の協力を得た。



高源寺文書 K

番号	文書名	作成年代	作成・位署	形態	数量	摘 要
K 1	雑談集 三之口			縦冊	1	版本。「瑞巖」黒印あり
K 2	東坡先生画記			状	2	豎冊表紙のみ
K 3	雜僧要訓 全			縦冊	1	写本。裏表紙「瑞巖山藏本」
K 4	仙厓和尚捨小舟	(嘉永六年癸丑仲夏再書一跋)	聖福寺蔵版(非売品)	縦冊	1	版本。「相方」印あり
K 5	老松山安国海印禪寺史	昭和三十五年四月一日	(著者) 服部顕通 / (印刷所) 老岐日報社	縦冊	1	刊本
K 6	白隠禪師夜船閑話	大正四年七月三十日	(著作者) 白隠禪師 / (校訂兼発行者) 今立裕 (発行所) 東京市神田区駿河台袋町一 光融館	縦冊	1	刊本
K 7	瑞巖山高源寺史	昭和八年秋	神楽尋常高等小学校郷土研究部	縦冊	1	謄写本
K 8	「補南禪院塔主職任補旨」(南禪院塔主職補任状)	明治八年八月十日	南禪寺住職權大教正畠山可庭↓前長安寺住職長岡幽峯	状	1	
K 9	(白紙)			状	1	
K 10	山房夜話 上中下(内題「天目中峯和尚広録 卷第十一之上」)			縦冊	1	版本(中峰録第十一の上・中・下を合綴。「光明禪寺」印あり)
K 11	内題「瀛奎律髓 卷之三十九」(外題剝離)			縦冊	1	版本(卷之四十六まで合綴)
K 12	内題「瀛奎律髓 卷之五」(外題剝離)			縦冊	1	版本(卷之十まで合綴)
K 13	内題「七観音三十三靈験鈔 卷第一」(外題剝離)			縦冊	1	版本。表紙見返し「法長禪寺什物八卷之内」注記あり
K 14	臨濟瑞巖山円光禪寺小史	昭和九年十月二十七日	(編輯者) 栗野秀穂 / (発行所) 円光寺尼僧堂	縦冊	1	刊本
K 15	内題「文選刪註 卷之三」(外題剝離)			縦冊	1	版本。「光明禪寺」印あり
K 16	遠州流挿花前百首 全	大正元年九月九日改訂、大正十五年三月二十七日刊	遠州流本廟華神堂↓出徳菊社中山本祖芳殿	縦冊	1	版本
K 17	詩作集 前篇(帳面)		山本祖芳	縦冊	1	京都市寺町今出川角橋本商店の包装紙使用
K 18	内題「小叢林畧清規 卷上」(外題剝離)			縦冊	1	版本。「光明禪寺」印あり
K 19	内題「大光明藏 下巻目錄」(外題剝離)	慶安四年二月日刊行	中野五郎左衛門刊行	縦冊	1	
K 20	奥付「鎮州臨濟慧照禪師語録。柱題「増補臨濟録」	元禄十二年六月吉日刊	花洛書林(版本)	縦冊	1	版本。前欠か。「高源禪寺/法長禪菴」書付けあり



K 41	内題「有象列仙伝 卷之八」(外題剝離)	慶安三年九月六日刊	寺町通三条上町藤田庄右衛門(版元)	縦冊	1	版本(巻九まで合綴)。奥付「宝永六年竜集己丑八月二十九日老衲六旬祝産之時室中小子碩養(後改玄賢)賀呈者也」
K 42	遠州流挿花後百首 全	昭和二年十月二十七日(大正四年九月十六日摺筆)	遠州流本願華神堂↓出雲菊社中山本祖芳殿	縦冊	1	版本
K 43	「有権者、多額納税者」(パンフレット断片)	近代	芸備国郡志より抜書	状	1	印刷物
K 44	高源寺十七世洞春開山嘯岳禪寺伝記			縦冊	1	高源禪寺蔵
K 45	〔明治三十四・五年代、綴、社寺明細帳訂正関係等〕以下①④内容細目			綴	1	以下に内容を記す
K 45①	号外(明細帳訂正願許可につき通達)	明治三十五年五月二十二日	神楽村役場↓高源寺住職殿	状	1	神楽村役場野紙使用
K 45②	乙第一四七四号ノ一(明細帳訂正許可)	明治三十五年五月二十三日	水上郡長穴戸秀策↓水上郡神楽村内松倉村臨濟宗高源寺住職長尾槐州	状	1	
K 45③	乙第一四七五号ノ一(明細帳落漏記入許可)		同上	状	1	
K 45④	社寺明細帳訂正願	明治三十四年十一月二日	右高源寺住職長尾槐州・全上檀徒惣氏・足立忠治郎他二名・全幸世村之内香良村円悟寺住職法類大槻宝洲↓兵庫県知事服部一三	縦冊	1	兵庫県知事服部一三の奥書あり
K 45⑤	〔境内〕(境内地価等書上)			状	1	
K 45⑥	〔丹波国水上郡〕(地券台帳原本と相違なき旨証明)	明治三十四年十一月十一日	水上郡神楽村長代理助役堀亭蔵	状	1	
K 45⑦	社寺明細帳訂正願副申	明治三十四年九月二十五日	臨濟宗妙心寺派管長小林宗補↓兵庫県知事服部一三	状	1	
K 45⑧	〔兵庫県丹波国水上郡松倉村〕(高源寺への喜捨呼掛け)			縦冊	1	
K 46	〔抑当常照皇寺ハ〕(正観音像建立のため喜捨呼掛け)		山国村大雄山常照皇寺第 世御法系住山宮裡魯山	縦冊	1	
K 47	沿革取調帳(高源寺・同末寺仏光寺につき)	(明治十五年か)		縦冊	1	
K 48	〔明治二十八年 社寺明細帳訂正関係綴〕以下①④内容細目	明治二十八年		綴	1	以下内容を記す

K 48 ①	「訂正願二…」（訂正願に本寺法類連署・管長添書を要求）	明治二十八年七月二十日	兵庫県水上郡役所	縦冊	1	
K 48 ②	社寺明細帳訂正願	明治二十八年七月十日	丹波国水上郡神楽村之内検査村高源寺住職二株桂林代理副住職浅田祖純／全郡全村之内全村平民寺惣代足立忠次郎他二名 ↓兵庫県知事周布公平	縦冊	1	神楽村長足立重左衛門奥印あり
K 48 ③	社寺明細帳訂正願	明治二十八年七月十日	同右	縦冊	1	神楽村長足立重左衛門奥印あり
K 48 ④	社寺明細帳訂正願 （明治二十九・三十年社寺明細帳訂正願関係綴以下①～⑦内容細目）	明治二十九年・三十年	同右	縦冊	1	神楽村長足立重左衛門奥印あり 以下に内容を記す
K 49 ①	寺院取調書及明細書訂正願副申	明治二十九年七月十五日	臨濟宗妙心寺派管長関無学↓兵庫県知事周布公平	縦冊	1	付箋あり
K 49 ②	「別紙明細書：」（明細書訂正に關し通知）	七月十五日	（妙心寺派）第二部	縦冊	1	
K 49 ③	社寺明細帳誤脱訂正追加願		右高源寺住職少教正二株桂林神楽村之内検査村參拾四番屋敷／担中惣代 足立忠次郎他二名↓兵庫県知事大森鍾一	縦冊	1	
K 49 ④	社寺明細帳誤脱訂正追加願	明治三十年十月日	同右	縦冊	1	
K 49 ⑤	社寺明細帳誤脱訂正追加願	明治三十年十月日	同右	縦冊	1	
K 49 ⑥	社寺明細帳誤脱訂正追加願	明治三十年十月日	同右	縦冊	1	
K 49 ⑦	社寺明細帳誤脱訂正追加願	明治三十年十月日	同右	縦冊	1	
K 50	永代無縁経万人講名簿之序	（文化六年三月日）	西天目瑞崑山高源寺（高源寺役者）	縦冊	1	後欠
K 51	宗門葛藤集 全	明治二十三年刊	京都大興寺雲崎智道（著作）／京都書舗出雲寺文次郎（発行）	縦冊	1	版本
K 52	碧巖録 第八			縦冊	1	版本。表紙見返し「法藏山板」。「玉林藏本」注記。奥書「明治六癸酉十一月十三日／甲州山梨郡栗原筋／千ノ村柳沢山慈徳院周□什物」
K 53	大光明藏 卷二			縦冊	1	版本
K 54	四郡録 全	元禄十一年九月刊	書林水田調兵衛・山本八兵衛・浅野弥兵衛	縦冊	1	版本。奥書「紹健持主／常性寺」
K 55	内題「瀛奎律髓 卷之三十一」（外題剝離）			縦冊	1	版本（卷三十八まで合綴）
K 56	天竺靈感觀音籤			縦冊	1	版本

K 78	題箋「中峯和尚廣録」				札	1	版本
K 77	天目中峯和尚廣録 卷第五之上				縦冊	1	別紙あり(大正九年四月)
K 76	天目中峯和尚廣録 卷第十二之上				縦冊	1	
K 75	西天日高源寺保勝会主意書 (外題剝離)	昭和七年八月日		住職亀井元嘉他三名	縦冊	1	
K 74	内題「七観音三十三身靈験鈔 卷第三」 (外題剝離)				縦冊	1	表紙見返し「法長禪寺什物八巻之内」記載あり
K 73	内題「人天眼目」(外題剝離)				縦冊	1	版本。表紙見返し「渡ノ於越□之西按也」注記あり
K 72	有象列仙全傳 卷之四				縦冊	1	版本
K 71	天目中峯和尚廣録 卷第二十一				縦冊	1	版本
K 70	婺州雲黄山宝林禪寺語録				縦冊	1	版本。「南禪寺僧堂什物」注記・「南禪僧堂」印あり
K 69	為霖老人語録	明治四十二年五月十五日		愛知県愛知郡猪高村諏訪鉤玄	縦冊	1	活版本
K 68	諸回向清規式 卷第二				縦冊	1	版本。裏表紙「高源寺藏本」蔵記あり
K 67	諸回向清規式 卷第三				縦冊	1	版本
K 66	三界義 一卷	正保三年四月		杉田勤兵衛	縦冊	1	版本
K 65	内題「七観音三十三身靈験鈔卷六」(外題剝離)				縦冊	1	版本。「法長禪寺什物八巻之内」記載あり
K 64	臨安府徑山興 聖萬壽禪寺後録	慶安三年二月良辰		寺町通二條上町堤六左衛門	縦冊	1	版本。「南禪寺僧堂什物」注記・「南禪僧堂」印あり
K 63	内題「七観音三十三身靈験鈔 卷第四」 (外題剝離)				縦冊	1	版本。おそらく「法長禪寺什物八巻之内」か
K 62	第二次保勝会芳名簿	昭和二十七年十一月		高源寺住職山本祖芳(印) 他十四名	縦冊	1	表紙はK60か
K 61	台紙付写真			ランカ堂	縦冊	1	アルバム
K 60	第二次保勝会芳名録			東都書肆西村源六・和泉屋庄次郎	縦冊	1	表紙のみ(K62の表紙か)
K 59	(生花教本)	文政元年五月刊			縦冊	1	前欠ないし表紙欠
K 58	挿花庭対松 上			庭松齋一晴(撰) / 東京薦尚堂(刊)	縦冊	1	
K 57②	押紙「慶応三年三月十五日住職/明治六年五月廿九日教習職試補拜命/高源寺住職周藤靈溪」	慶応三年三月			押紙	1	
K 57①	内題「七観音三十三身靈験鈔 卷八」 (外題剝離)	元禄八年刊		洛陽書林川勝五郎右衛門・永田調兵衛	縦冊	1	「法長禪寺什物」蔵記あり

K 94⑧	寺班稟就請願状 (伊豆国田方郡田中村慶寿院につき)	明治三十四年三月三十一日	願主長尾槐洲 (印) ↓ 妙心寺派教務本所	状	1	
K 94⑦	寺班稟就請願状 (伊豆国田方郡福聚院につき)	明治三十四年四月日	願主長尾槐洲 (印) ↓ 妙心寺派教務本所	状	1	
K 94⑥	拜命届 (静岡慶寿院住職拜命につき)	(明治) 三十四年五月十一日	慶寿院住職和田聞喜 ↓ 本寺高源寺執事寺派教務本部會計部	状	1	
K 94⑤	寺班特約降與請求書	明治三十四年七月二十五日	丹波国高源寺住職長尾槐洲 (印) ↓ 妙心寺派教務本部會計部	状	1	
K 94④	進達状 (六等地支班金の法長庵分二十円につき)	明治三十四年六月十七日	丹波国本派別格地高源寺住職長尾槐洲 (印) ↓ 教務本部會計部	状	1	
K 94③	書状 (高源寺末寺法長庵・慶寿庵の認定につき)	明治三十四年二月二十九日	教務本所第一部 (印) ↓ 高源寺	状	1	
K 94②	書状 (兼昌寺住職兼務の件)	(明治) 三十四年六月二十日	五号部幹事木俣寛道 ↓ 高源寺住職長尾槐洲	状	1	
K 94①	届書	明治三十四年三月十二日	高源寺住職長尾槐洲 (印) ↓ 教務本所	状	1	
K 94	届書 他 (以下①~⑩内容細目)			綴	11	以下に内容を記す
K 93	亀山天皇御事蹟―元寇六百六十年記念出版―	昭和十七年三月二十日	山田無文	縦冊	1	和装函入
K 92	四季之園			縦冊	1	版本
K 91	「乾山詩鈔」全二 (版本表紙のみ)			状	1	版本表紙
K 90	第二次保勝会寄附募金帳	昭和二十七年十一月	高源寺住職山本祖芳他十四名	縦冊	1	
K 89	挿花	乙未秋九月重陽後一日	綾瀬漁人 亀田梓木王父	縦冊	1	版本
K 88	遠州流挿花三體之巻 全	大正二年九月十六日	藍田一英	縦冊	1	版本
K 87	天目中峯和尚廣録 巻第二			縦冊	1	版本
K 86	老子徳経 下			縦冊	1	版本
K 85	森区領収証 (第二次保勝会)	昭和二十八年六月二十七日	水上郡神楽村検査高源寺保勝会	縦冊	1	
K 84	医王山 長安寺史	昭和二十二年七月	福知山市字奥野部長安寺住職正木悦翁	縦冊	1	
K 83	第二次保勝会寄附募金帳	昭和二十七年十一月	高源寺住職山本祖芳他十四名	縦冊	1	
K 82	天目中峯和尚廣録 巻第十二之下			縦冊	1	版本
K 81	第二次保勝会芳名簿	昭和二十七年十一月	高源寺住職山本祖芳他十四名	縦冊	1	
K 80	内題「訓点読本五部合刻」(外題割離)		京都妙心寺派普通大教授蔵版	縦冊	1	版本。「光明禪寺」印あり 裏表紙見返し「明治四十三年二月二十七日此之書籍を和尙様□□」注記あり
K 79	文選副註 巻之一			縦冊	1	

K 115	安山詩	昭和五十一年三月日	暮雲叟	縦冊	1	刊本
K 114	支那撰述 中峰和尚広録			札	1	題箋か
K 113	大光明蔵 上			縦冊	1	版本
K 112	天目中峯和尚廣録 卷第十五			縦冊	1	版本(卷十六まで合綴。「光明禪寺」印あり)
K 111	内題「瀛奎律髓卷四十七」(外題別離)	寛文拾一年正月吉日	村上平樂寺板行	縦冊	1	版本(卷四十九まで合綴)
K 110	三體千字文(鳴雀仙史書) 下			縦冊	1	版本
K 109	高源寺再中興弘岩和尚略歴	大正五年春日	法孫比丘一道	縦冊	1	表紙に「高原禪寺(印)」蔵記あり
K 108	心経	昭和四年九月十日	井上成実	縦冊	1	刊本
K 107	内題「瀛奎律髓 卷之十六」(外題別離)			縦冊	1	版本(卷十九まで合綴。裏表紙見返しに蔵記あり)
K 106	広録入蔵并封号国師表			縦冊	1	版本
K 105	内題「瑞岩山保勝会寄附金募縁牒」(外題別離)	昭和廿七年十一月日	高源寺住職他十三名	縦冊	1	版本
K 104	正風遠州流四季酒園(一名綴松之翠)一		家元明善堂蔵	縦冊	1	版本
K 103	菖根譚 乾	文政五年五月重刻	明 還初道人(洪自誠) / 著作 / 加賀文學蘇坡林瑤(重刻序)	縦冊	1	版本。表紙見返しに「二筆艱難貞次郎。扉に七言律詩「古禪堂外筆株楓」あり
K 102	内題「唐賢七言律詩三體家法 卷之二」(外題別離)			縦冊	1	版本。裏書「丹陽古心菴蔵書」蔵記あり
K 101	国粋美集 上・下	大正十一年九月三十日	兵庫県	縦冊	2	刊本
K 100	大愚遺老	昭和四十五年十月一日	(財) 禅文化研究所	縦冊	1	活版。函入
K 99	内題「瀛奎律髓 目錄」(外題別離)	成化三年二月吉日刊行	紫陽書院刊行	縦冊	1	版本
K 98	天目中峯和尚廣録 卷第二十五			縦冊	1	版本
K 97	照会書(所轄本山妙心寺への義財徵集負担額の件)	明治二十七年九月五日	大阪泰清寺住職鹿園祖思(印) ↓ 高源寺執事禪師	状	1	版本
K 96	「第二次保勝会寄附金募縁牒 奥塩久」(版本表紙のみ)			状	1	版本表紙
K 95	三體千字文 上	明治三十一年六月刊行	世話人足立安太郎・足立実治	縦冊	1	版本
K 94 ㊦	書状(静岡原福寿院・慶寿院の建長寺派から妙心寺派への所轄変更につき)	明治十六年十一月日	梁員外散騎侍郎周興嗣(次韻) など	状	1	
K 94 ㊧	御届ヶ書(高源寺前住職二株桂林の徒弟黒沢祖順尼・戸田智光尼などにつき)	(明治) 三十四年七月二十五日	右届人長尾槐洲(印) ↓ 妙心寺派管長小林宗補	状	1	
K 94 ㊨	書状(高源寺徒弟黒沢祖順の法灯笼転籍の件)		教務本所会計部(印) ↓ 丹波国高源寺住職長尾槐洲	状	1	

K 116	碧巖集百則頌	昭和五十五年三月日	暮雲叟	縦冊	1	刊本
K 117	「謙／中峰国師」(表紙剝離) 文集の類か)			縦冊	1	表紙なし
K 118	頤賢録 坤(當山傳燈第九世湖心／頤賢碩鼎和尚語録二卷他三脚集一卷)のうち			縦冊	1	写本。裏表紙「丹波高源寺藏書」・印「高源禪寺」あり。K121とセット
K 119	嘯岳録 上(當山傳燈拾世嘯岳鼎虎大和尚語録二卷)のうち	宝永元年七月十四日謄写	八世法孫天岩明啓(謄写)	縦冊	1	写本。裏書「丹波高源寺藏本」あり。K120とセット
K 120	嘯岳録 下			縦冊	1	写本。裏書「丹波高源寺藏本」あり
K 121	頤賢録 乾			縦冊	1	写本。裏書「高源寺藏書」あり
K 122	三脚藁 完(前任當山十世湖心頤賢碩鼎禪師語録 三脚藁 完 外二冊写本)		劣孫無方子(撰)／寺町五條書林藤屋古川三郎兵衛(刊行)	縦冊	1	写本。裏書「丹波高源寺藏書」あり。享保七年秋固山碩堅が京都にて購入。撰者無方子は規伯玄方
K 123	学詩堂詩鈔 下			縦冊	1	版本
K 124	藪岡精太郎			表紙	1	
K 125	禪宗四部録 全	寛永八年五月吉日刊行	四條京極時心堂	縦冊	1	版本
K 126	聖福真觀	大正元年九月二十五日	聖福寺	縦冊	1	刊本
K 127	唐詩選掌故			縦冊	1	版本。裏書「文天下公器也」
K 128	(蘇東坡集)表紙剝離	(宋)元豊年間	蘇東坡(著述)／江戸時代刊行	折本	1	版本
K 129	仏祖三教 全			縦冊	1	版本
K 130	碧巖集 五六			縦冊	1	版本。冒頭「玉林藏本」藏記・「聖岩寺」印あり。裏表紙見返し「明治六癸酉十一月十三日甲州山梨郡栗原筋千ノ村柳沢山慈徳院目録代物」記載あり
K 131	白隠和尚遺墨集	大正三年四月五日	民友社	縦冊	1	刊本
K 132	学詩堂詩鈔 上	安政二年	松橋浜城(著)／鷓羅山房藏板(刊行)	縦冊	1	版本
K 133	有象列仙全伝 四			縦冊	1	版本
K 134	内題「瀛奎律髓 卷之十一」(外題剝離)			縦冊	1	版本(巻十五まで合綴)
K 135	内題「七観音三十三身靈験鈔 巻第七」(外題剝離)			縦冊	1	版本
K 136	内題「豊干禪師録」(外題剝離)	寛文十一年五月吉日	江戸室町三丁目戸嶋惣兵衛(開板)	縦冊	1	版本
K 137	内題「寒山詩」(外題剝離)	正中歳次施蒙赤若冬十月下漣刊行	禅尼宗澤捨仁(刊行)	縦冊	1	版本



K 138	内題「七観音三十三身靈驗鈔 卷第五」 (外題剝離)			縦冊	1	版本
K 139	詩集統篇	十年	志機庵 是水齋 山本一湖	縦冊	1	写本
K 140	内題「孝經新註序」(外題剝離)	明暦三年正月吉日板行		縦冊	1	版本
K 141	内題「魁本大字諸儒箋解古文真宝」	慶安二年八月重刊行		縦冊	1	版本(卷之五から卷之十まで合綴。裏表紙見返し「瑞巖山高源寺秘」印書)記載あり
K 142	結録授戒釋解	文化八年閏二月		縦冊	1	
K 143	弘巖和尚古希無宛路		丹丘天目山瑞巖主翁宗将弘巖大禪師(直筆)	縦冊	1	奥付「兵庫縣下丹波水上郡佐治高源寺什書」 注記あり
K 144	大幻録 完 外二卷			縦冊	1	表紙「山門不出書」當山第十七世中興天巖明啓大和尚語録」記載あり。裏書「高源寺藏書」藏記あり
K 145	眞乘和尚語録 壹卷			縦冊	1	表紙「當山傳燈廿世眞乘祖章大和尚」とあり
K 146	大幻録			縦冊	1	「瑞巖」黒印あり。K 144の後篇か
K 147	如雲清貧録詩集	昭和二十五年九月三十日	如雲河津貞吉	縦冊	2	付 家紋帳
K 148	重刊冠註寂室和尚語録 卷之一			縦冊	1	版本
K 0	断簡			紙片	3	紙塵

〔凡例〕 本表は「史料細胞現状記録」をもとに作成した。

一、「文書名」は表紙に記載されたものを基本的に取り、表紙・表題のないものは内題・内容から取った。

二、「作成・位署」は表紙・裏表紙や奥書などを参考に、その文書を作成した主体を取った。

三、判読不明の部分は□で示し、推定の部分は「」(「か」)で示した。

(以下、「高源寺文書 経蔵」の分は次号に続く)